

さて此の時、素盞鳴尊は『我が心清淨し』と仰せられた。此の世に於て、吾々には清々しいことが度々あります。お互は屢々清々しい氣持ちになる。然も日本人として最も清々しいのは一切を 天皇陛下に奉つた時である。素盞鳴尊は此の寶劔を私すべからずと申して之を大神に奉られた後に『吾が心清淨し』と仰せられたのであります。清々しい氣持ちになつた時に、始めて眞の我が國民生活が始まります。乃ち尊は之から愈々家庭生活を始められます。是に於て御一族を擧げて農業生活や、殖林方面に或は國際關係に、更に文化的方面に多大なる御事業をなされるのであります。斯くて國民生活に大切な点を判然お示しになりました。都が大和國に定まるに先立つて饒速日命がお下りになつたことでも分ります。素盞鳴尊の御母伊弉冉尊と共に紀州方面にお移りになりまして、天孫降臨に際して御子や姫命の方々の御神靈を大和の要所々に祀つて、都を守り奉らんとお誓ひになつて、大和にお鎮まりになり、所謂十重二十重に爲つて守り奉つて居るのである。茲に大和の國日本の基礎が成り立つのであります。素盞鳴尊は 天皇の絶對神聖なることを御民吾等に御示しになつたものと思ひます。斯やうに古典を見ます時に、我が國体の根本が判然と分ると思ひます。此の様な事實が建國の精神として未來迄行き渡るのであります。此の事實に基づく日本の國柄を學問的に組織立て、説明せねばなりません。是れが國体の明徴であります。今回の講習にお集りの皆さんも、學問的に國体の明徴を爲さねばならんと云ふ義務がある程の御決心が必要であります。日常爲される仕事は寧ろ國體觀念の涵養にあるのであります。之れは特に深い學問が無くても出来ることであつて、然も極めて大切な問題であります。そこで私は特に教育或は教化方面に關係のある方に、斯う云ふ点をはつきりと願つて置きたい爲に、茲に一言申して置きたいと思ひます。

私は只今、素盞鳴尊が我が心は清々しいと仰せられたと申しましたが、之れは民族性の根本的特色であります。大和心に最も大切な心持ちである。清々しい氣持ちと、神々しい心持ちと、又懐かしさが結び付きますと爽やかな心と云ふことになります。私は日本人として最も大切な心持ちは爽やかな心持ちであると思ひまして、曾て爽やかな心と云ふ題でラヂオを放送しました。其の日は初夏の晴れた日曜日の朝でありまして、如何にも清々しい風が私共の氣持ちを本當に爽やかにする日でありまして、愉快に放送したのであります。その講話の中に明治神宮に參つて口を清め、手を洗つて御社殿の前に立つた私共の氣持ちが、即ち爽やかな心であることを述べる際に自然 明治天皇の御盛徳を偲び奉つたのであります。其の時斯う云ふことを話の序に述べたのであります。大正二年七月三十日即ち 明治天皇が崩御遊ばされた一年祭の日、全國到る所で桃山御陵の遙拜式が行はれたのであります。私の郷里でも小學校の庭に遙拜壇を調ひまして、町民一同遙拜式を擧げました。それで式が終つても多分、町民の中で遅れて來た人で遙拜する人もあるであらうと云ふので、遙拜壇をこわさず其のまゝにして置きました。果して途中で式の濟んだことを知つても皆來て遙拜するのであります。其の中に、一人の年ごろ六十ばかりの八百屋さんが遙拜壇の前で恭しく 明治天皇の御陵を遙拜致したのであります。やがて左の小脇に抱へた風呂敷包を靜かに開けて、綺麗に束ねた牛蓋を一把出してそれを遙拜壇に捧げて又遙拜致しました。 明治天皇を神様と仰ぎ、然も自分の店先の牛蓋を清めて捧げると云ふ、懐かしくも亦サツパリした清々しい心持ちこそは、眞に國體觀念の基礎であります。それで私は此のことをラヂオ放送の中に取り入れまして、一面には 明治天皇の御盛徳を偲び、又一方には我が神道の根本は此に在ると思つて放送したのであります。幸に此の放送は色々の方面から採用せられまして、近來日本精神が旺

んになるにつれて中等學校、實業學校、青年學校などの教科書に澤山載るやうになりました。實は四年ほど前であつたかと思ひますが、十一月二十三日の新嘗祭の日でありましたが、町の有力者が神社に集まつた中に、お醫者さんで氏子總代をして居る方がございますが、之れが私のラヂオのファンでありますので、此の事を話すと、教科書を一冊持つて行つて八百屋に読んで聞かせたさうですが、八百屋さん非常に感激して、放送の材料になつたことを悦び、自分も考へて見ると、若い時分には随分亂暴して親方のお世話になつたことが思ひ出されると云ふので、菓子を一包買ひ、菊の花を片手に携へて、元仕へて居つた其の八百屋に行つて其の菓子を佛壇に上げて貰ひ、又お菓子参りをしたと云ふことを後に聞いたのであります。聽て其の十二月一日、私がお宮の前を掃除して居りますと、其の八百屋が自轉車の後に箱の付いて居るリヤカーを引張つて來ましたが、其の中から綺麗にこしらへた一重ねの鏡餅を出して、先生之を神前に供へて下さいと言ふので、矢張りあのことだらうと思ひながら神前に供へました。すると先生、之れはつまらん物でございますが、其の邊に置いて下さいと云ふて抱へて出したのが、見事に咲いた懸崖の菊で、一つには『聯隊旗』一つには『御國の光』と云ふ札が立つて居る。私は此の鉢を受取りながら、眞に國體觀念の重さを感じたのであります。皆さんは勿論、斯様な氣分をお持ちでございますが、何千年來鍛へられた尊い國體觀念は容易に失はれるものではございません。然し人間生活は意外な變りが無いとも限りません。斯う云ふ氣持こそは東洋平和の基礎になりませう。私は斯う云ふやうな日本の美はしい大和心が、世界平和建設の基礎になると固く信じて居るのであります。どうか國體觀念を教へ導き、磨き合ひ、子供の時から涵養して、培ひ養つて行くやうに御骨折を願ひたい。斯くして私共は科學的、學問的にも優秀なる國民が、學者の力に依つて我が國體を説明する憲法學も、法理學も築き上

げて行く時は決して遠くあるまいと信ずる者であります。私も僅かながら御力添へをしたいと思ふものであります。

次に第二の問題に移りますが、古典に傳へる大汝命の御治蹟について『うしはく』と云ふことの意義と、それに對する我が皇室の私は『領知く』と云ふことについて申します。御統治とについての對立的解釋に關する問題であります。私は國體の基礎が洵に深いと云ふことが此の『うしはく』と云ふ語によつて一層よく分ると共に、國民の務めの一面も自ら明らかにされると思ひます。それで此の場合、私は此の語に對する謬つた見解とそれに伴ふ誤解を一掃すると同時に、之れで我が國體の根本が益々よく分つて來ることを申したのであります。私は此の事について種々の著書でも説いて居るのでありますが、御承知の通り『しらす』といふことが我が皇室の御政治、我が 天皇の御統治であり、それに對して『うしはく』と云ふ言葉を悪い政治、若しくは力の政治と解釋して議論をして居る學者が多いやうであります。果してその通りで間違ひないのであります。此の事について古事記を御覽なると、天照大神が大國主命の所に、武甕槌神をお遣はしになりました時に、武甕槌神が大國主命に對して『汝がうしはける葦原の中津國は我が御子の知らさん國なりと事依し給ひき』と仰せられた。大國主命が此の國を治めることについては、うしはくといひ、皇孫についてはしらすといふ言葉が使つてある。深い意味があつて使ひ分けられたやうに思はれる。それで井上毅先生即ち、帝國憲法の草案をお作り申上げた伊藤博文を援けて最も功績のあつた大人物であると云はれる井上梧蔭先生が、其の『梧蔭存稿』といふ書物の中に、日本の皇室の御統治はうしはくではなく、しらすである。うしはくと云ふ霸道政治に對して、しらすといふ王道政治であり、知食すであると説かれた。此の井上先生の説が一度世に知られますと、世間では我が皇室の御統治の尊いことを説く爲に都合が宜いから、輪に輪をかけて、しらすは徳

治で領知くの力を政治として、對立させて考へてみますが、其の精神は別として、言葉の解釋は如何でせうか。我が皇室の御統治の尊いことは申すまでもありませんが、それは直ちに『しらす』と『うしはく』といふ語の内容價值を決定するものではありません。現に今申した大國主命に付て、うしはくと書いてある所を、日本書紀などでは矢張りしらすと書いてあるのであります。然らば、抑もうしはくと云ふことはどう云ふことであるかと考へてみますと、神の御力に依つて或る場所を限り占めると云ふことである。此のうしと云ふ言葉は目に見えない或は大きな力を意味し、其のしと云ふのは強める助詞で、神秘的な力が『うし』である。それで『わたくし』『わたし』の『くし』や『し』は一種の力で、此の力を公の爲に銘々が働かせ、差出すのが御奉公である。『うしはく』といふのは神でなければ出来ないことである。宣長翁や鈴木重胤なども言はれた通りであります。例へば神功皇后三韓征伐をなさいました場合に住吉神を祭られたのと、神々が船の後の方や前の方を領知きまして皇軍を守護し、玉体を守護し奉つて斯う云ふ風に祀られました。神は強い力をもつて此の土地は自分の支配すべき土地、天子様の土地であるといふやうに判然と區別つて保つて居られる。夫れがうしはくと云ふことであります。日本國家には決して他の者は入れない。犯すべからざる力を以て領知かしてはいけない。かくして、天皇の所有權が確實になります。高天原を、天照大神の知食す世界に於て、天御中主神がぬしとして天の御中のうしとしての存在を確實にして居る。確實に保つて居るそこで高天原が働きを現はす。後に天常立尊が現はれ、常立といふ語の通りに天即ち高天原が永遠の存在となる。そのやうな高天原を天照大神が統治し給うのである。

それから更に此の國土が成り立つ。多くの神々の御働きと御力とによつて、國土は絶えず發展する。かく其の國土を確實に維持する力として大國主神、又大地主神が御出現になつたのである。茲に始めて存在の確實性（國常立神）と所有の確實性（大國主神）が明らかになつた葦原の中津國の上に、天照大神の御稜威が榮えるのであつて、愈々天孫降臨なされたのであります。他の神々の犯すことの出来るやうに確實に、大國主命の領知くと共に各地々々の産土の神々が其の土地々々で、日本の土地や一切の物は永遠に確實に守護せられることに依つて、皇孫の知食したまふ國土と幽冥の世界とが、御稜威の下に歸一することを日本の古典には明瞭に示してゐるのであります。斯う云ふ点を考へます時に、國体明徴には古典を確り讀みまして再吟味する必要がある。我が國は今や日本精神の自覺が昂まり、斯様に再吟味する義務が出来た。夫れだけに吾々の理解を付けるやうな頭の程度が進んだのであります。古典の研究に依つて日本の國体が如何に確實性を有し、如何に永遠の生命をもつて居るかと云ふことを、今更ながら判然と認められるのであります。然も世間の間違つた考へ方から、最も意義深いものが出て來るのであります。本來の面目に還ることが先決問題であります。斯う云ふ意味に於て、我が國体を研究すべき根本精神たる神道基調の理解に進んで行きたいと思ひます。

印刷物の第二項になつて居りますが、もう一應、我が古典に傳へる大己貴神即ち大國主神の御治績を通じて、日本國民の生活、即ち我が國民道徳について考へて見たいと思ひます。必ずしも吾々日本國民に限つたことではございませんが、特に吾々日本民族にとつて、國民道徳は如何なる点に根本があるかと申しますと、臣民たる分を盡し、國民としての務めを果して大君に仕へまつる。天皇にお仕へ申上げると云ふ事でありませぬ。此のことにつきまして、茲に皆さんの御参考の爲に一言して置きたいことがございます。吾々日本國民の生活、吾が國民道徳は日常の生活を通じて

て陛下にお仕へ申し上げるのだと云ふことであります。教育勅語にお示し遊ばされてあります通り、總べての生活を通じて、吾々銘々の公私の立場を通して、皇運を扶翼し奉ると云ふことは、諸君の克く御承知の通りであります。然しさう考へて居りながら、吾々はお互の日常生活が其の儘陛下にお仕へ申上げる途である。吾等の眞面目な生活が其の儘義勇奉公である。忠實奉公である。至誠奉公である。云ふことに就いての氣持が、聊か薄いのではないかと思ふのであります。曾て現代の或る有名な方が、忠君愛國の新しい意義を力説しまして、吾々の日常生活其のものが忠君愛國である。特に皇室に直接にお仕へして臣民たる分を盡さなくつても、夫れ／＼の職業に即する生活が、忠君愛國となる實踐となるんだと云ふことを或る新聞に説いて居りましたが、世間でも結構な新しい教育方針であるとして迎へられたのであります。然し斯様なことを新しいことと考へますのは、却つて遺憾なことでありまして、吾々は祖先以來日常生活夫れ自身が忠君愛國であると信じて居りました。斯様なことを特に説かなければならぬのは、實は世間の自覺が足りなくなつた点もあるのであります。此の点に付きまして、私はさういふ意見が可なり力強く新聞に論ぜられました時分に、吾々の先輩である江戸時代の國學者橋守部が、卓見に富む國學者として宣長翁の反對の立場に立ちながら、却つて宣長翁の意見を展開した所の偉大なる人物であります。其の守部翁の『待問雜記』と云ふ書物の中に、興味深く日本國民として忠君愛國の精神を説いて居ることを世間に紹介したことがあります。橋守部翁は日本國民が大陽の照らす所、國民としての自覺が有るならば、日常生活がそのまゝ忠君愛國であると云ふことを力説して居るのであります。苟も此の心がまへさへあれば日本國民は鋤鎌を取る者も、算盤を弾く者も、悉く天皇にお仕へ申して居るに外ならぬのであると云ふことを申して居ります。尙それと並んで私の興味を覺ゆる書物

の中に『櫻の林』と云ふ本があります。之れは皆さんに御縁の深い書物であります。千家清王（俊信）のお弟子になる岩政信比古と云ふ國學者の著述であります。又同じ門下に岡熊臣と云ふ方がありますが、後に其の門人大國隆正の勧めによりまして、平田翁の教へをも受けるのであります。大國隆正は偉大なる國學者として津和野の本學を主張した學者であります。千家清王翁は本居宣長先生のお弟子として世に知られた人でもあります。先生も清王を門下に得ましたことを非常に喜ばれて、懇切な手紙を度々清王翁に寄せられました。清王翁の方でも深くそれを喜ばれ、其の手紙を立派に整へてそれを御神体として、玉鐙社と云ふのをお建てになりました。千家清王の著述の中で是非皆さんに読んで戴きたいのは『道の八千草』といふ小冊子で、私の『國學の研究』と云ふ書物にも其の思想を特に紹介しておきました。此の清王翁のお弟子に當る岩政信比古は、尙『豊受の御靈』といふ本もあります。此の信比古が千家尊澄の神道説を書いた書物が即ち『櫻の林』であります。此の本の中に信比古の歌がある。

迷ふなよ陸も海がおしなべて

都に通ふ道はあるものを

意味深い歌でございます。此の信比古翁の歌を尊澄翁が大變に喜んで、此の歌の意味を充分聞きたいと云ふお尋ねに對して信比古の答であります。一寸茲で御參考に読んで見たい。殊に何れお氣付きになりませうが、皆さんの中には台灣、滿洲、北海道各方面からおいでになつて居ると思ひますから、殊に面白く感ぜられることと思ひます。

『マコトニ此ノ世ヲ渡ルサマハ路ヲ往クニ似タル事ナリ。君ニ仕ヘ奉ルヨリ始メテ農業ノ道、大工ノ木ノ道ナドイヒ、末々ノ事ニ至リテモ茶ノ道、香ノ道ナドモイフ也。此ノ道々ヲアシキ方ヘユカヌヤウニ、ヨキ方ヘヨキ方ヘ

トユクガ人ノ持方也。其ノ中ニ一大事ハ君ニ仕ヘマツル道ナリ。君ニ仕ヘ奉ルトハ輦轂ノ下ニアルバカリニハラズ、蝦夷松前ノ果カラ長崎薩摩ノキハミマデ、ドコニ居テモ、上ヲ恐レウヤマフハ皆大君ニヨク仕ヘマツル也。サレバカノ山フトコロニカクレ住ム盜賊モ身ノ行ハアシケレド、晝ハ出ズシテ、夜々出テ害ヲナスハ、猶上ヲ恐ル、ガ故ナリ。是彼等ガ道ヲ守ル也。彼等上ヲ恐ル、事ナク晝モ出テ惡事ヲスルヤウニナレバ、山フトコロニコモリモセズ、里ニ居テ惡事ヲシ、白晝ニ盜賊ヲナス。是レ亂世ナリ。亂世ト云フハ、大名ト大名トガ國ヲ争フ事バカリデナク、世界ノ人が貴モ賤モ僧モ俗モナク、ミナガラ盜賊ニナレル也。可恐可恐。又海外ノ諸國モ皆皇國ニ臣伏シテ朝貢スベキ者ドモナリ。世界ニ君ト申スハ我が大君ノ外ハナケレバ、戎天竺ハ論ニ及バズ、アフリカモアメリカモ皆臣伏シ來ルベキ國ナリ。然ルヲ今モ琉球、朝鮮、於蘭陀ナドハ臣伏シ來レドモ、唐戎天竺其外ハ臣伏スベキ道ヲ知ラズ。或ハ隣好ト思ヒ或ハ通商ト思フモアリ。コレ皆マコトノ道ヲ知ラヌ故ナリ。仰冀ハ海外諸戎蠻一モ殘ラズ皇朝ニ臣伏シ來タルヤウニシタキコトナリ。ソハタゴノマコトノ道ヲ教ヘ諭スヨリ外ナシ。』吾等の日常生活が其の儘 皇室に仕へる本になるのであります。國体の眞の姿を實生活に現はすべきことを内閣でも希望して居りますが、實はそれが日本本來の道であります。口先で云ふ國体ではなく、又筆の先で動かす日本精神でもなく、我等の生活其のもの、中に我が國体が存し、我等の行動の中に日本精神は展開して居るのであります。斯う云ふ心持を判然と持つ必要があります。斯う云ふ意味に於て、只今拾ひ讀みました『櫻の林』の中にある一片の木の葉も意義深いものがあると思ひます。

さて先刻申し述べましたやうに、天皇は此の顯世を統治し給ひ、即ち大日本帝國を統治せられるのであります。

大國主命の治めず幽世は眼に見えない世界で、吾々の生活の底力となり、基礎をなすものである。凡て物に原因結果、裏表があるやうに、國民生活の基礎觀念である。日本人が此の眼に見える世界と、彼の見えざる世界とを結び付けて居るところに大事な生活様式がある。顯とは眼に見える世界、幽とは眼に見えない世界である。即ち幽冥は神の世界、顯露は現實の世界を申します。それで眼に見えない貴い方を神と申しますが、神が此の世の生活に交渉をもつて來られると、其の神を命と申上げる。神と云ひ、命と云ふも同じいことである。神の思召即ち命を以て 天皇が吾々に仰せ下されますと、それを見、こと、と申します。それから吾々の眞心は眼に見えないものであります。それが實際に移るときには即ち實際生活と交渉する時には眞事(誠)となるのであります。眞心が其の儘實際の行動に現はれるから眞事(誠)と云ふのであつて、其の『ま』と云ふのは、有りのまゝの姿、即ち純眞なることを云ふのであります。心が有りのまゝなる場合、偽らない心を眞心、紙が白ければ其のまゝの姿が眞白であり、丸いのが歪まなければ眞丸、直線が歪まなければ眞直である。此のやうに『ま』と云ふのは有りのまゝの姿のことである。純眞なる有りのまゝの姿は完全であります。左の手と、右の手は一方の手は片手といひますが、兩方の手が揃つたならば眞手と申します。完全なるものは眞實であるから、『ま』といふ言葉に眞の字を充てた。眞實なるものは又美しい。そこで『ま』といふ言葉が『み』(御、美)といふ語に變つて、美稱となるのであります。純な心の有りの儘の姿は實に美はしいものであります。眞心その儘が『まこと』(誠、眞)になる。色々の事柄となる。社會現象となつて世の中の進歩となるのであります。それで眞心から出た言葉を以つて偽らず、飾らずに何かの事柄を祝福すると、言葉其の儘が事柄を生かして行く。例へば眞面目な人が愈々出征する。君は立派な武勳を建てるぞと云ふと、果して其の言葉通りに武勳を

建てる。之れが言葉の幸はふ國と云ふのであります。言葉が其の儘吾々の生活の上に幸せを與へる。其の反對で咀ひと云ふのがある。夫れは日本では消極的信仰である。積極的信仰は真心から善い言葉を使ふと、其の言葉に靈があつて、我等の爲す事柄に色々の幸せを與へる。それで言葉の佐くる國とも云ふのであります。人間には斯う云ふ働きをする真心があつて、それに依つて私共の生活は眼に見える世界に於て 天皇を戴き奉り、眼に見えない世界に於て神々が、吾々の生活を支配なさるから吾々が真心を捧げる。又神の思召しも現御神とます 天皇をお護り申上げるのであるから、國民は敬神の信念を以て 皇室に御奉公申上げる。従つて吾々が 天皇に仕へ神を敬ふことは、即ち吾々は幽顯二世に懸けて御奉公致す譯であります。そこで斯様な生活から國民は顯幽二つの世界を全然分離し得ない譯であります。顯とは眼に見える現在の世界、幽とは現在の世界ではございませんが、眼に見えない世界で、具体的に言へば過去の世界であり、神の世界であり、未來の世界である。それで顯幽二世を兼ねて 皇室と國家に奉仕するのが國民道徳の根本であります。吾々日本人は絶えず今の世界に向つて勇往邁進すると同時に、過去の世界の力を生かして行かなければなりません。況んや今に於て見るべからざる世界である。之れは尙未來に展開して居る。未來の見えざる世界の力を現實に向つて殖し、又之れを未來に發展せしめて行かなければなりません。之れが吾々の生活の基礎であります。斯様な生活を日本では敬神と名付けて居ります。幽の世界に對する考へ方を敬神と申します。現實の世界は敬神によつて吾等の生活を結び付けて居ります。我が國民道徳の根本、我が國民生活は敬神尊皇、敬神愛國、敬神崇佛、敬神崇祖、更に敬神愛郷即ち吾等の生活が眼に見える此の生活に局限して居らない未來に繋がれてゐる。眼に見えない世界に在つては過去と未來は一つであります。之れを活かすものは現實の世界である。斯様な私共の氣持ちを

吾々先祖以來簡潔明瞭に敬神と名づけてゐる。此のやうな敬神觀念が吾々日本民族の國民生活の根本義となつてゐるのであります。

諸君、今日私共の心の中に眼ざめ、吾等日本人の生活の中に生きて居る日本精神の働きを、此の敬神生活と結び付けて考へて見やうと思ひます。そこで若し日本精神の特色を知らうと思へば色々の特色もありますが、それには敬神觀念を説明すれば最も宜しい。敬神尊皇と云ふことは日本人の忠義を顯すことであります。日本人の忠義が支那の忠義と違つて、何故敬神尊皇と申すかと云ふに、吾等の忠義は只今の 天皇にお仕へするだけではない。夫れが 天照大神其の他の神々にお仕へする途でもある。子孫を榮えしめる途である。神にお仕へする夫れ自身が結局尊皇の意義であつて、總ての神々にお仕へ申上げる夫れ自身が、實は現御神たる 天皇にお仕へすることである。そこで日本の敬神觀念が活きて来る。普通の忠義では言ひ得ない奥行きがある。過去未來に懸けての永遠の生命がある。さう云ふやうな信念が何故發展するか、何故斯様な國民の奉仕生活が發展したか。それは實に我が 皇室の敬神愛民の大御心に因るのであります。此の敬神愛民の御統治に依つて、吾々の斯様な奥深い忠義の精神が發達する、上 皇室の敬神愛民の御統治と相俟つて、下、國民の間に敬神尊皇の奉仕が行はれてゐるのである。昨年春、文部省で發行しました『國體の本義』にも敬神愛民と云ふ言葉が屢々使つてありますが、之れは實に 陛下は常に皇祖皇宗を崇めまつり、深く神々を崇めまつり、而して其の御信念を以つて國民を愛撫せられるのであります。曾て高天原に於て國土を奉獻した大國主命を御優遇あらせられ、出雲大社にお祀りなされたのも、此の大御心に基いてをられるのであります。斯様な深い御信念を以つて天神地祇にお仕へ遊ばされ、此の深い御信念を以つて此の皇祖皇宗の大御心に應へ奉る

べく、國民を愛し給うのであります。支那の帝王のやうに自分の立場を失つてはならないからと云ふので、恐る恐る國民を安心させて居るのではありません。斯様に大御心の底から國民を愛し給のであります。それが敬神愛民の御統治であります。明治天皇の明治三年正月三日の御詔勅に『大祖ノ業ヲ創メタマフヤ、神明ヲ崇敬シ蒼生ヲ愛撫シタマフ。祭政一致由來スル所遠シ』と仰せられてゐる。神明を崇敬し、といふことは敬神といふことで、蒼生を愛撫し給うといふのは即ち愛民である。敬神と云ふことが實際の上に現はれると祭祀になり、愛民の大御心が實際化する政治になる。それ故、神明を崇敬遊ばされる御敬神の祭祀（まつり）と、蒼生を愛撫し給う政治（まつりごと）が離れなければ、云ふまでもなく祭政一致となる。だから皇祖皇宗以來の御精神を顧みれば、祭政一致由來するところ遠しと云ふことになりませぬ。

明治維新に此の祭政一致の國是が定まりましたのは何時かと申しますと、明治元年三月十三日であります。多分その前日即ち三月十二日に祭政一致の大方針が御決定になつたものでありませう。その日既に津和野の藩主には御内報があつたと云ふことであります。そこで此の敬神愛民の御統治祭政一致の御精神を明かにお示しになつたのは、古くは神武天皇である。明治維新は其の神武天皇の建國創業の御精神を承繼いたのであります。此の神武天皇の建國創業に則つて明治維新をなされるやうにと云ふ意見を特に献言したのは、津和野出身の大國隆正の門人玉松操で、此の玉松が岩倉具視公に進言された。さういふ關係で津和野藩主に御内通があつたのでありませう。それで此の祭政一致の大方針、即ち神明を崇敬し、國民生活を如何にして安らかならしめようかと云ふ大御心から、祭政一致の國是の決した其の翌十四日に、五箇條の御誓文が示されたのであります。これは祭政一致の具体化なのである。五箇條の御誓文

は實に祭政一致の大方針から定まつたのである。而して之れは敬神愛民の大御心から出てゐるのである。其れ故、此の祭政一致の御統治に對して、我が國民は敬神尊皇の誠を捧げなければなりません、林内閣の時に祭政一致の精神に基いて敬神尊皇の大義を發揮すべしと聲明したのは、此の理由に基くのであります。

敬神愛民の大御心が實際に顯れて政祭一致になつたのでありますから、愈々五箇條の御誓文として具体化しますとそれを天地神明に誓つて、萬民保全の途を樹てられたのであります。此の大御心を拜察して、我々日本國民は只管敬神尊皇の奉仕を以つて一貫することが、我が國民生活の根本である。敬神尊皇といふ言葉は簡單であります、吳々も皆さん十分御考へと御實行とを願ひたいのであります。

斯やうに皇祖皇宗以來 皇室に在らせられては敬神愛民、國民に在つても亦祖先以來敬神尊皇であつて變りがない。それで敬神崇祖といふのであります。日本に於ける敬神崇祖の基は實に茲に在るのであります。敬神崇祖の信念はかやうにして成り立つてゐるのであります。一体、何の爲に我が 皇室は神代以來、敬神愛民の御統治をなされるのでありませうか。何の目的あつて日本國民は只管敬神尊皇の奉仕を致して居るのかと云ふと、あらゆる困難を克服して優秀な國家をつくり、天地と共に榮ゆべく天壤無窮の皇運を扶翼して居るのであつて、そこに敬神愛國と云ふ理想が成り立つたのであります。敬神愛國の理想と云ふのは、卓越したる國家の建設を目標とする其の心構へであります。

皇室も敬神愛國、國民も只管敬神愛國であります。然も偉大なる國家をつくる爲には種々の文化を必要とする。そこで佛教が入つて來れば、之れを日本化して敬神崇佛の信仰が成り立つた。これは佛教に限らない。總べて宗教が日本に入つて來ようと思へば、敬神觀念に依つて生きる外はない。ところで佛教は何故日本に於て生きたか。佛教は何故

印度で亡びたか。何故支那に於て眠つて居るか。それが何故日本に来て日本佛教としてかやうに盛んに生きて居るのであるか。夫れは注射をしたからである。日本で活を入れたからである。活を入れることを名付け、輸血作用を名付けて敬神と云ふのであります。若しさうでないならば、暫く日本を去つて印度に行き本國に歸つて見るが宜しい。決して佛教だけでは生きられないのであります。だから曾て大國隆正は佛と云ふ題で、歌を作つた。

今更に歸る心やなかるらむ

佛も神の國にゐなれて

佛教は日本に於て生きていたのであります。日本の佛教家はより佛教を活かしたのでございます。此の点、私は佛教家や多くの世間の人々の考へ方に付いて聊か疑ひをもつて居る。よく世間では佛教が日本に影響を與へたとか、佛教が日本を活かしたとか云ふことをいひますが、それは間違ひである。皆さん私が馬鈴薯を食べると、馬鈴薯は私になつて了ひます。之れを馬が食べたならば馬になる、私が食べたならば國學院大學長になる。私が食べて始めて私になる。佛教が日本精神力で活かされたから、日本の佛教は立派なのである。活かされるといふところに大きな力が加はつたと云ふことを認めると同時に、又その之を活かした大きな力となつたといふ其の根本力をより反省して見ねばならない。それと同時に、よく生かされた佛教そのもの、偉大なる宗教としての存在を認めなければならぬ。然し、更にそれを活かした日本の敬神觀念の如何に強いかと云ふことを考へてみる必要があるのであります。今や西洋人は日本人の敬神觀念に多大の敬意を拂つて居るのは此の關係であります。誠に不思議な國民で、遠い神代以來同じ神々を崇めて居る。斯くして若し儒教が來れば、敬神崇儒の思想となつて發達する。外國の思想學説が日本に於て生きようと

思へば敬神觀念に因つて生きなければならぬ。大和心に依つて美はしい本當の生命を見出す時に、正しい學説として日本に於て生きる。恐らく西洋の學問は皆日本に来て生きるであらう。間違つた學説も日本に於て生きるでありませう。日本民族は總べての之を活かして行くと云ふ大きな生活意識を持つて居る。斯う云風に外國から來た信仰とか、學説ではなく、國內に起つた武士の道德觀念までも之を日本的に敬神尙武と云ふ思想に依つて生かした。武士道は發展の歴史から申しますと、我が國民道德と必ずしも一致しなかつた。然しながら斯様な武士道を、皇室に結び付け、國體觀念に結合して日本の武士道たらしめた者は山鹿素行先生である。更にそれに活を入れては日本精神として働かしめたのは吉田松陰先生である。武士道は敬神觀念に依つて長い間色々の疑問を突破して、遂に我が國民道德と致したのである。今は歐羅巴から入つて來たスポーツを明治神宮の外苑に於て、敬神尙武の精神によつて進展せしめてゐる。祖先以來の傳統的の力に依つて生かして居るのであります。さて斯様な難かしい問題を、日本人は必ずしも教へられて知つたのではない。自然にやつて居る。毎日吾々は祖先以來日常生活に於てやつて居る。知らず知らずの間にやつて居る。それが即ち敬神愛郷の生活であります。

斯様に敬神といふ言葉が凡ての生活の面にびつたりと結び付いてゐる。尙幾らもありまして敬神明倫、敬神好學、敬神勤勞と云ふこともあります。

さて、明日以後の話をはつきり理解して戴く爲に、日本精神の働き、言葉を換へて申しますと、日本精神の特色といふことに付て一言致したいと思ひます。國體明徴といふことが問題になつたのは、もと日本精神の自覺の高調した結果であるとすれば、自然、日本精神の特色について考へて見る必要があります。そこで、日本精神の特色を研究し



ようと思へば、先づ日本精神が如何やうに表現して居るかといふことを考へて見るのが大切である。日本精神と云ふものは各時代に、各社會に於て種々の姿で現はれてゐます。今その一例として、日本精神が現代社會に表現した事實は澤山あります。先づ日本刀が盛んになつて來ました。私が十五年程前に、日本の軍人は日本刀を腰に横たへなければ駄目だと言ふ時に笑はれましたが、今や日本精神の自覺した結果は、堂々と軍人の腰にさがることゝなつた。日本刀が今日のやうに盛んになつて來たのは、日本精神の時代的社會的な表現なのである。文化的表現である。又此の外に書道が盛んである。書道講習會に關する機關雜誌が澤山ある。私が此の間田舎のバスに乗つて居りますと、洋服を着た四十歳ばかりの人が何か見て居るので、ちよつと覗いて見ますと、書道講習會の雜誌である。間もなく私の側に居た茶葉服の労働者が今までそれを眺めてゐましたが「今月號は遅れましたかね」と尋ねた。このやうな書道講習會はやはり日本精神の現れで、まだ此の他にもあるかといふと、尙珍しいのは何々祭り、何々祭といふやうに、何でも彼でも祭と云ふことが流行つてゐる。これも日本精神の影響としての一表現である。日本精神に眼覺めた結果、他の言葉では不適當であり、どうしても祭と云はなければ氣持が現はれない結果であります。近來、日本では何時でも、又何處でも國旗を立てる風がある、私は國民精神文化研究所に關係して居りますが、赤化思想にかぶれて大學や専門學校を退學させられました者が、其の心を洗ひ淨めたいといふので轉向を徹底させるために、此の研究所に入つた。數年前のことではありますが、或る日のこと私が研究所に行きますと、寄宿舎の前に國旗が翻つてゐる。後でよく聞いてみますと、其の研究生の一人が腕時計を賣つて來て立てたのださうで、之れを毎朝竿頭に掲げて宮城遙拜をしたのであります。それから又大倉精神文化研究所で先年『神典』と云ふ我が重要な古典を讀み

易くして、手頃な本にまとめて出版しましたが、之れには私共もお力添へをして、所長の大倉邦彦さんが随分督勵せられ、印刷にも校正にも多大の苦心を拂はれたのであります。其の印刷を東京の三省堂の工場へ頼まれたのであります。今から十年も前にかう云ふ本を職工に頼めば、斯んな微臭いものと云ふに違ひないと思はれますが、斯う云ふ立派な有難いものを吾々に印刷させてもらふのは嬉しいと云ふので、職工長以下明治神宮に参拜して印刷に取りかゝつた。そのやうな誠意で出版しましたから、大倉さんは特に金一封をお禮に送つた。普通ならば一杯やらうと云ふところでせうが、其の時一同は此の金は有意義に使はうではないかと云ふので、一同相談の上記念として國旗を買つたといふことであります。さう云ふ風の現象は日本精神の社會的な横の現れである。日本精神が縦には時代的、歴史的に顯現し、横には社會的、文化的に表現する。此の兩方面を事細かく研究し、最善の注意を拂ひました時に、そこに日本精神の思想的、文化的特色が分るのであります。日本精神の特色は第一に、魂を打ち込むと云ふことであります。言葉を換へて申しますと、心を籠めるといふことが日本精神の特色でございます。即ち眞劍味といふことであります。何糞と云ふ意氣である。魂を籠めますから、日本人は家を建てると神棚を設ける。町村といふやうな部落生活を營むと、其の魂をこめて鎮守の森が出来る。大日本帝國をつくると、そこに大きな魂として伊勢の神宮が出来るのであります。斯くて心と魂とを一切 天の陛下に奉つた時に、大日本帝國が成り立つのであります。第二の特色は、日本精神は強い力を柔かに表現するといふことであります。強い力を柔かに表現するから、其處に平假名が發達した。強い力を物柔かに表現するから武士の情とか、日本人の禮儀作法となるのであります。強い力を柔かにはたらかせて平假名が出來た一方に、魂を打ち込んで片假名が出來たのであります。平假名は繪のやうだが、片假名は

五十音圖となつて碁盤の目のやうである。昔狂句の名人大田宿山が江戸近くの田舎の知人を訪ねて行きました。色々御馳走になつた末、其の家の主人が美事に實つた柿の一枝をお土産に差出したので、蜀山人は江戸には最も結構な土産だと、深くお禮を述べて歸へらうとすると、主人が『先生、何か一句下さいお願いします』と望みますので、蜀山が早速『かきくけこ、貰つて直ぐにたちつて』とやつた。誠に調法な五十音であります。片假名は統一性を現はし、平假名は永遠性を示してゐる。魂を打ち込むと云ふことに對して、強い力を柔かに表現すると云ふことを考へますと、自然に大國主命の御事蹟が偲べれます。かやうに強い力を柔かに働かせますから、日本精神は一切のものを容れるところの包容力に富んで居る。總べての物を包容して生かすのが第三の特色である。儒教來れ、佛教來れ、西洋文明來れ、克く這入つたものと考へます。試みに日本民族の頭を日本刀で斬つてその横断面を見たら、如何に内容が豊富でせう。日本刀は切れ味が宜しい。ポーランドの公使館付武官の某大尉が武士道に關するラヂオ放送のうちで、日本刀の鋭利なことを話して居ります。或る虚無僧が尺八を吹いて行くと、武士が其處へ通り懸つて出來た許りの日本刀ではつさりやつた。所が虚無僧は依然として尺八を吹きながら八町許り行つて石に碰いた時に、始めて胸中から二つになつて倒れたのださうであります。白色人種の頭を二つに斬つてみても、その横断面には儒教だの、大社教だの、孔子だのは殆ど無いのであります。日本精神の横断面はなか／＼美しい。あらゆる文化が入つて居る。考へて見れば諸君の頭の中には相當な豊富なる文化が入つてゐるから、肩の重きを感じるであります。私は曾て群馬縣の館林町の看板のことで、坪井正五郎博士のお話を聞いたことがあります。明治の初めに文明開化と云つて舶來品萬能になつた時分に、館林と云ふ町の或る商店の店先に舶來品製造所といふ看板を立てた所があつたさうであります。先

年、私は其の近くの或る村に講演に参りましたが、お話が終りますと非常に喜ばれた上に、名産であるから之れをお持ち歸り下さいと云ふて、繩で大きな西瓜を二つからけてくれました。繩でも解けた時には大變だと思ひながら、極めて包容力豊かな物を『ポケット』から出しました(風呂敷を差出し)余裕綽々たるものがある。之れは雅量のある國でなければ出來ない。西洋にも風呂敷のやうなものがある、然もこれは(ハンカチを示して)極めて包容力が乏しい。之に較べると日本の風呂敷は包容力が豊かである。然らば何故風呂敷と云ふのか。昔は錢湯へ行きますと着物を脱いで湯に入る前に、四角な廣い布に包んで置き、湯から出るとそれを出して着ます。而してその布を風呂場に敷いて足を拭くから風呂敷と云ふた。簡單明瞭である。此の包容力の大きい風呂敷は丁度國際聯盟における日本のやうなものである。平生温和しく國際聯盟といふ『ポケット』の中へ入つて居る。然し彼が不都合な態度に出れば、斷然之れを脱退する。敢へて好んで脱退するのではない。目的は他日偉大なる包容力を發揮して、此のやうによく國際聯盟を包容するのにある。今や吾等は支那を出発点として世界的に包容力を發揮しつゝある。日本精神々々々と云ふても小さい所に立ちもつてはいかない。教育や、教化の目的は偉大なる包容力を發揮するやうに國民の心を指導せねばならない。

由來、日本人は生活上の價値觀が敏感である。そこで色々なものを取り入れましてそれに工夫を凝らす。そこで先程申しましたやうに、舶來品を有がたがつて何でも取り入れるが、只單に取り入れるのではない。何時の間にか工夫を加へる。之れが國民精神總動員の今日に最も相應しいことであります。お互が物の値打ちを認めて之れを活かして行く、總べての物を活かして行くといふことが必要であります。日本人は頭が良いのだから、常に工夫を凝らさ

なければならぬ。所謂嗜みの生活といふことが必要であります。吾々は如何にして健康を保つべきか、如何にして爽快なる氣持ちになるべきか。絶えず其の場所、其の時を考へて最も有効に善く工夫し、嗜み、而して努力することが大切である。家庭生活に於て共同生活に於て嗜むべきことが多々あると思ひます。殊に支那に向つて吾々が經濟工作をやりませうには、支那人に劣らず日本國民は大いに日本精神の工夫力を働かす必要があります。日本人は更に發明の才がある。現代的飛行機を發明した八幡濱市出身の二宮忠八さんの發明は、世界で最も早い發明である。潜航艇は西洋人の方が早いのでありますが、然し日本人は西洋人の眞似をしないでそれを造つてゐます。水戸の烈公が潜航艇を造つて居る上に、又装甲戦車をも造つて居る。タンクが發明されたのは世界大戰の際に英國人の手によつて爲されたのであります。水戸烈公は却々發明家で、安心事といふ一種の装甲戦車を發明したのであります。尙手の抱瘡を植えることを發明してゐるのであります。斯やうに日本精神は工夫し、發明すると云ふ才能をもつて居る。今後の教育は之れを益々發揚しなければならぬ。それから又日本精神は本質の力を失はない。言葉を換へていへば固有の力を伸ばし、外來のものをも日本化する力がある。然らば日本精神の本質とは何か。それは何れ述べる積りであります。以上五つの特色は日本精神の文化的、思想的の働きとして見た長所であります。此のやうな考へ方が何等かお役に立てば幸ひと思ひます。

今日の講義は第三項に入るのでありますが、其の四の説明の緒を引出します爲に、昨日からのお話の續きを簡単に申述べて置きたいと思ひます。今日國体の明徴と云ふことが盛んになつたと云ふことは昨日申しました通り、日本精神自覺の高調の結果であります。吾々お互に日本精神の自覺が深くなり、高くなつた結果として己むに己まれぬ要

求として、心より起る大きな力として國体明徴と云ふ内外に對する吾々の要求が起つたのであります。今日の國体明徴は吾々お互に必要なのみならず、世界の人類に向つて必要なであります。然らば國体の明徴を如何にすべきかと云ふことと合せて、國体觀念を如何に養ふべきかと云ふことに付きまして、日本精神夫れ自身の力をはつきり認識する必要があると云ふことを力説致したのであります。皆さんの中には日本精神の研究に付て深く心を寄せて居られる方があると存じます。それで日本精神の特色を昨日述べたのでありますが、最初に日本精神の最も著しき特色として、根本的特色として魂を打ち込むといふこと、第二には其の強い力を柔かに表現することであると説いたのであります。是等の特色を吾々の祖先の心持ち、信仰から申しますと、第一の特色は荒魂に當る、第二の特色は和魂に當るのであります。更に第三、第四の特色として包容力が豊かである。一切のものを廣く包み容れる、それと同時に工風を加へ、發明をする所の力に富んでゐると、斯う云ふ二つの特長を擧げたのであります。それに就いて、我々の祖先は第三の特色を有する精神を幸魂と稱し、第四の特色は即ち奇魂と稱したのであります。斯う考へてくると、私共の日本精神の働きはつまり祖先の魂が歴史的に展開して、永い間發展した結果として私が述べたやうな意味に於ける四つの特色として展開したのであります。即ち荒魂、和魂、幸魂、奇魂の信仰が進んで來たのであります。それで日本精神は吾等の國民生活を指導する原理であると云ふことがお分りであらうと思ひます。日本精神の特色といふことを考へるに就いても、漠然と考へても當らんことは無い。色々研究の結果特色は見付かるのでございますが、私の申したやうに、我が國史を貫く精神を縦にも、横にも、時代的、歴史的にも、又文化的、社會的にも表現した思想や、文化を研究した結果、始めて正確に近く特色が発見されるのであつて、然もそれが只今申したやうに、吾々の祖先の持つてゐ

た荒魂、和魂、幸魂、奇魂といふ信仰に繋るのであります。諸君にも皆之れはあるのであります。それで大國主命は大己貴神としては和魂であらせられ、大三輪神としては幸魂、奇魂を祭り、又八千矛の神として強く荒魂を發揮せられた。如何にして偉大なる國家を建設しやうか、如何にして顯幽二世に亘る意義深い世界を作らうか、斯様な吾々祖先の努力が積り積つて我が國史を一貫する日本精神となつたのであります。斯う云ふ風に古典を考へて行きますと、茲に日本精神が無限の力として展開して行くことが知られるのであります。私共の研究は斯様な立場にある研究であることを茲に御参考迄に述べて置きます。

尙日本精神のさう云ふ働きが何處から來るのであるかと云ふと、神の靈、吾々の魂、之れ即ち第五にありました本質の力であつて、之れを失はないやうにして常に各方面へ此の固有の力を伸ばして行き、あらゆるものを美化して行く所に日本的の力の存在があるのであります。それが日本精神の第五の特色であります。それでお話は段々深く入つて行きますが、抑も日本的なるものは何ぞやと云ふことに付いて話を進めて行くのが今日の順序であります。昨日知らすと云ふこと、領知くと云ふことに對する意見を述べました所が、後で管長様始め多數の方から御共鳴下さいまして、私は益々斯様に解釋すると同時に、斯様に心得べきものであると思つて居る中に、自然歌が出来ましたから御披露申上げて置ませう。

皇孫の治らす皇國を永へに

領知き護る八千矛の神

漢口陥落の前に歌ふ歌として洵に適當であります。そこで更に皆さんのお忘れになつてならないことは、大國主命

に色々のお名前のあることであります。吾々には色々の働きをする力がある。それで職分々々に應じて其の立場々々に即して、其の力を發揮しなげねばならない。それが吾々の務めであります。夫れが忠君愛國であります。斯様な意味に於てあらゆる力を發揮された大國主命の大を尊敬すると同時に、我々自身もそれ〴〵に力を發揮して命の御神徳を發揚し奉らなげねばならないと思ひます。此の吾々が日本國民としての務めであり、祖先以來斯様な務めをやつて來た、簡單に申せば、祖先以來克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟して來たのであります。然し吾々お互ひが億兆一心、如何に努力致しましても、之れを活かす力がなげねば、どうにもならぬのであります。之れ即ち皇祖皇宗の宏遠なる肇國と深厚なる樹徳といふ御努力に存するのである。言を換へて申しますならば、上 皇室の敬神愛民の御統治と、下國民の祖先以來の敬神尊皇の奉仕とに依つて、國体の精華が發揚せられて來たのであります。そこで此の意義深い國体を如何に考ふべきかといふ事から、直ちに第三の問題になつて來るのであります。第三の問題といふのは、我が國体の特異性と神道の根本義との關係でありまして、我が國体の最も大切な意義、特色、特異性と云ふやうな根本を明かにするならば、自ら我が國体の基礎的な力として神道がはつきりして來るのであります。そこで皆さんには割合に多く神道に付ての考へ方や、研究の仕方が耳に入り、又眼に觸れたりすることがあるだらうと思ひます。國体と云ふことに付てもさうでありませうが、私の國体と云ふことに付ての調べ方を皆さんに申上げて見たいと思ひます。

元來お互ひの体、生命のある此の体について研究すると云ふ場合には、色々の方法があります。生理學的に、物理學的に研究も出來ませう。或は肉、或は血、色々の内部の構造から研究をしても宜しい。或は内臓、或は心臓、或は

精神系統から研究しても出来る。國家の資源、之れから研究しても宜しい。國体に關しても、或は歴史的發展の有様からして研究しても宜しい。私は私の出來得る範圍に於て研究して居りますが、私共の先づ考ふべき方面があり、方法がある。道は近くにある。遠い所より研究するよりは、手近い方が容易くもあり、同時に確實でもある。そこで日本の國体を研究しようと思へば、私は國語に依つて研究することも大切であると思ふ。漢字で見ましても色々の廣い意味があるが、國語程意義深いものは少いのであります。それは極めて微細の感じを表して居る。さう云ふ譯で、國体に關する國語に依る研究は極めて意味がある。話が脇に外れるやうですが、實は進むやうに思はれますから、此際一寸御參考迄に述べて置きます。今皆さんは講習會で種々の問題を修養してをられ、修めて居られます。其の修むと云ふことは修養の修の字でありきす。之れは取入れる方でありきす。私が話をしたものを皆さんは心の底に入れるのであるが、それを入れつ切りではいけない。夫れは入れるのでは無く、閉ぢ込めることでもあります。『おさめたもの』入れたものは再び出さなければならぬ。諸君は貯めたものを何時迄も經濟的に胃袋の中に藏つて吾々の体が伸びる、間接に他の者が生きて行く。吾々が入れたものを自分の力として、更に之を出して行かなければならない。それで取入れた所得に應じて役場に税を納めるのは、即ち入れたものを出すことである。我が手に入れると云ふことは權利であり、世に出すと云ふことは義務であります。歐米諸國では入れると云ふ權利と、出すと云ふ義務は別々である。それが個人主義の社會である。日本では入れたものは出すから權利即ち義務である。さう云ふ義務と權利とが一つの考へから出てくる。之れを名付けて全体觀念といふので、歐米のファッショやナチスのやうな考へ方は全体主義である。我等は全体觀念である。大和心は法律や事情に依つて強ひて結び付けるのではない。本來一体のものに還りたいから

日本人は歐羅巴の全体主義では満足が出来ない。己むを得ず純な全体主義と稱して居りますが、之れは昔からの生へ抜きの全体觀念である。だから新しいと云ふ字を冠せせず、純なる觀念とならなければならぬ。ところが之れをよく心の中に藏つて居るから、如何に歐羅巴の權利義務の思想が入つて來ても、皆さんは心で世の中を克く大乗的に純化し、日本的にしてゆくからそれで治まりがつくのであります。日本民族は總て根本的の氣持ちを重んずる。日本精神に還るのには此の点が最も大切であります。

そこで斯様な氣持を本として上 天皇と、下國民が心を一にした君民一体の國家生活が我が國體の特質である。斯様な氣持ちで斯様な立派な國體をつくり上げたのである。支那から借りた國體といふ文字以外に生へ抜きの言葉がある。即ち我が國體を言ひ表はす言葉として最も重要なのが『國の成り立ち』次に『國風』と國柄と云ふ言葉がある。又全体に客觀的に眺めた『國の姿』と云ふ言葉もある。何故日本では國體と云ふことを斯様な言葉で云ふかといふに、これは克く考へて置く必要がある。一々口で之れを説く必要はございませんが『先づ國の成り立ち』と云ふことはどう云ふことかと申しますと、國の建前と云ふこととでございます。國の建前と云ふことは法律的の言葉で言ふと、國家組織の根本と云ふことであります。之れが今日治安維持法第一條の國體といふ語に對する説明になつて居る。私は國家組織の根本性と云つて居ります。憲法第一條に『大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之レヲ統治ス』とあるのは國家組織の根本性を示されたのであります。天壤無窮の皇運と申すことは、即ち我が國家組織の根本性を嚴定してゐるものである。之れを思想的に言ふと、即ち國の成り立ちと云ふことで、言ひ換へれば建國の精神と云ふことになるのであります。肇國の精神と云ふても宜いのである。建國の精神と云ふても、肇國の精神と申しまして、遠い／＼神代以來

の國家の肇造、創建を意味するのであります。斯様な肇國の精神即ち建國の精神のことを分り易く國の建前と申します。それを國語では國の成り立ちと云つてゐる。即ち國家組織の根本性のことであります。國の成り立ちと云ふことは一時的の意味許りでは無く、時間關係に入つて來る。どうして成り立つて來たかと云ふ由來を意味して來る。それ故、國の成り立ちと云ふことは國の建前及び沿革、發達を意味し、國家組織の根本或は肇國の精神及び其の發達を意味する。之れが日本の國體と云ふことに付ての『國の成り立ち』と言ふ意味であります。それで日本國民の國體觀念、國の成り立ちを法規學的に研究する場合は、國家組織の根本性から研究せねばならない。之れは法規學の問題である。國家學の問題である。それと同時に更に歴史的に研究する必要がある。それでなくては國體の實質が分らないのであります。私が昨日國體について學問的に研究するのはなか／＼六ツかしいと申しましたが、それに較べて歴史的の研究は割合に早く出来る。今年東京帝大、京都帝大或は文理大などで國體講座が出来ましたが、大体に歴史的の研究をやつて居る。

抑も孔子の教へである儒教の出發点は、支那大衆の個人主義の救濟であります。佛教が何故極端に解脱と云ふことを説いたかといふに、印度の民衆が本來個人主義であつたからである。個人主義を國家的に展開したところに孔子の教へがある。個人意識を無我にまで展開したところに釋尊の説法があつた。さう云ふ譯で、支那では個人主義の立場に立つて儒教を巧く使ふ。道の本源天に在り、天何をか云ふや、人をして云はしむといふ工合に、ドン／＼元に戻して行く。斯うして自分に都合の宜いことを言ふやうにしてしまふ。そこで佛教も、儒教も、その起つた國に於て之れを救ふべき使命が我々日本人にある。それで近來王道が日本で活きたからして、之れを支那と滿洲とへ逆輸入をして居る。

日本が舶來品の逆輸入をして居ると同じであります。今日若し吾々が支那の儒教其の儘で彼の地へ送つたならば其れはいかん。日本精神に依つて生きた儒教は、更に之れを日本精神に依つて支那に植を付けなければ斷じていかんのであります。即ち吾々は日本精神と云ふものは日本人だけに限られた精神でなくして、人類に透徹すべき偉大なる日本精神であると云ふことを忘れてはならない。我が國には世界を照らすべき皇道がある。之れを東方の光として世界を照らすやうにしなければ、陛下に對し奉つて濟まないと思ひます。決して日本にのみ小さく片寄つてはならない。吾々は自惚れてもいかんが、卑屈でもいかん。堂々として進むところ廣く光の射すところ、陛下に奉仕する信念を以て進んで行かなければならない。皆さんは『國ノ成り立ち』といふ言葉を平凡だとばかり思つてはならない。之れ程意義深い言葉は少ない。世間には日本の言葉と言ふと軽く見る人がある。今日はこんな思想は決算せねばならぬ時であります。日本語が如何に貴いかと云ふことに付きましては、御地では小泉八雲先生が、曾て日本の文化日本の言葉に付て深い興味をもつて居られました。第二の小泉八雲と云はれるポルトガルのモラエスと云ふ人は、永く徳島に居て能く日本の事を何かと調べて居る。日本の國語は日本精神の結晶だから、日本精神や、日本文化の特色を知るために、日本人の國語を調べるのが最も必要だと云つて居ります。先日獨逸の青年學者ハインリッヒ、ジュモリンさんが來まして、私に國語の研究についてお手傳してもらひたいと言つて居りましたから、私は喜んで引き受けたのであります。此の人は賀茂真淵の國意考を研究して、之れを獨逸語に譯し、更に本居宣長先生の直毘靈を譯して居る。もう一人の更に若い學者がある。ヴシファさんは平田篤胤の古道大意を譯して居ります。斯う云ふものを獨逸語に譯す理由は何處にあるかと申しますと、獨逸には國學者の偉大なる國家的發展の精神があるが、それは正に吾等のナチ

ス精神の力となると言つて居ります。思想の赤くなつた人たち、所謂赤化した人でよく轉向した人達でも日本で本當の日本人らしい氣持のするものは、是等の著述だと言つて居るものもあります。然しながら凡て物に見直さなければならぬ。根本が果して相共通するや否や、そこをよく突きつめて考へておく必要がある。獨逸の全体主義には個人主義的な思想が却々抜けない。日本人は本來が大和心で全体觀念であるから、根本に異なる心持がある。その本質が國家的に展開すると我が國體觀念となつてくる。そこで種々の方面にいろ／＼の特色が出てくる。それを國風と稱する。身風り手風りと云ふことである。 明治天皇が敬神觀念をお勧め遊ばされた御製に

我が國は神の末なり神まつる

昔の手ぶり忘るなよゆめ

と御詠みになつてゐる。之れは祖先以來の遺風で敬神である。神道は、神をまつる業は祖先以來の一つの習慣で、之れを國風と云ふのは國家的の習慣と云ふことを意味する。之れはどう云ふことかと云ふと、之れは國の成り立ちから出て來ます。吾々は生れて生ひ立つて行くと追々に其の人の性格が發揮されて來る。其の人の獨特の風が發揮されて居る。日本と云ふ國は斯様な國柄である。 天皇陛下を親と戴きまして、億兆心を一にした國でありますから、上下の間に神代以來敷島の道が發達した。日本人は皆歌人であると云つてもよい。柿本人麿の出た時分にはなか／＼歌が盛んであつた。さう云ふ風に歌が盛んであると云ふのは、國體に即した一種の風俗習慣で、夫れは文化的なる國ぶりであります。お雛様を三月の三日に飾るのにも、先づ眞ん中にお内裏様を祭る、夫れを中心に皆集まつて居る。世界で斯様な人形の飾り方をするのは日本許りである。之は風俗習慣の上に現れた國體の特色でやはり國ぶりであります。

國風と云ふことは國の成り立ちに伴ふ種々なる特色であります。種々なる特色でありますから道德的特色もある。敬神思想、忠君愛國などがそれである。又思想的特色としての國ぶりもある。尙武を重んじ、祖先を重んじ、歴史を重んずる。之れは即ち思想的特色である。次に國體觀念が生活に現れた特色がある。國風と云ふのは國の建前に伴ふ種々なる特色であるから、此の中に生活意識としての發達がある。日本人の其の日／＼の生活意識、即ち日本人はどう云ふ氣持ちで生活して居るかと云ふことをお考へになつて見れば、お氣付きになるのでございませうが、日本では一番著しい生活上の氣持ちは矢張り言葉の上に現れて居る。魚を釣つて歸つて來るとニコ／＼として歸つて來る。それを見るとやあ御苦勞さんと言ひかける。さう云はれて、やあ近頃は手が上がりましてと云ふ人は余り無い。大抵いやお蔭様でといふ。私共がお百姓さんの家の前を通る時、稻を抜いでゐると私共は早速御苦勞さまと挨拶する。さうすると稻を抜いで居るお百姓の方では直ぐお蔭様でと答へる。このやうに何事につけてもお互に御苦勞様、御蔭様でと挨拶をする。斯う云ふ氣持の上に立つた經濟學が二宮尊徳先生の報徳教であります。之れと反對の喧嘩腰の經濟學がマルクスの學說で、云はゞ動物の經濟學である。吾等は人間の經濟學を要求して居る。斯様に考へて行くと日本人の生活は互に御苦勞様、御蔭様でなければならぬ。そんなら御苦勞様と云ふのは何か一物ある考へものは居らぬかと云ふでありませうが、之れは國民の生活意識の本筋ではない。吾々は心から有難い。辱けないといふことを正直に云はねばならぬ。本當に有りの儘の氣持ちといふものが必要である。さう云ふ自然な正直な氣持ちを眞面目といふのである。『マジメ』といふのは有りの儘の締め方である。自分の心から正直に締めなければならぬ。それが眞面目である。夫れが出来ないと引締めることになる。今日、國民精神總動員といふことをやつてゐるのは、此の心を引締める必要

があるからである。皆引き締つて居る。それが出来なければ遂に『クビリシメル』ことになる。眞面目の『マ』といふのは眞といふ字を用ひて本体の姿である。スポーツでも眞面目な場合は之れを武道精神と稱する。近來スポーツが周囲の應援賞讃を博するところから選手はとかく墮落する傾向があるので、スポーツマンは眞面目なる心に還れといふ自覺を起して來た。明治神宮の外苑に競技場が出来たのは誠に意義深い。今日日本は總てが眞面目に、眞剣になることが要求されて居る。眞面目とお蔭様と負けじ魂、此三ツが日本人の生活意識の根本である。日本人は眞面目でお蔭様とばかり考へてゐるから、弱いか柔いのかと思ふと、それで却々強い。何糞ツと云ふ意氣がある。之れが所謂最後の五分間で止むに止まれぬ日本魂である。斯やうな生活意識は大和心の特性に基礎が存する。而して眞面目なさつぱりとした清々しい心の底に、本當の國体の基礎がある。諸君が億兆心を一にして互ひに御苦勞と感じ、お蔭様と思ふて努力する。斯う云ふ所に正しく明るい皇國日本がある。嚴肅な清々しいサツパリとした國体から、吾々の日常生活が斯様な氣持ちに育まれて來たのであります。又斯う云ふ氣持ちで生活して居るから、召集令が來ると皆トーチカを突破する意氣で出て行くのである。それが日本人の生活意識である。此の氣持ちで生活することは神道精神を固くする所以である。萬一敵が來れば直ちに進んで之れを撃退する。之れが負けじ魂である。然し平時は支那の民衆と互ひに手を握つて東洋平和の基礎工事に努力する。吾々の目的は蔣介石政權の打倒であるが、眞面目に行かなければならぬ。眞實に中華民國を指導して世界平和發展の力強い道伴れとならねばならない。農村が困つた場合は、政府で補助することもよいが、然し農村の中には自ら祖先傳來の此の土地を活かさずば己まぬと云ふ意氣に燃えて居る青年もある。誠に頼もしい。之れについて私は皆さんにも特に要望したのであります。皆さんの教化とか、救済と

云ふものは眞面目にせねばならない。斯うやつたら新聞に書かれるであらう。世間が知つてくれるなど、さう云ふ考へではいかん。新聞に書かれないから樂隊入りで宣傳すると云ふやうなやり方はいかない。さうでなくして何事でもお互ひに手を取つて相援け合つて眞剣にやらう。之れが大國隆正先生の『吾れ自らを空しうして只管に君に仕へ、只管に親を大切にし、只管に夫婦相和し、即ち忠孝貞の本を立て、之れに依つて身を修め、世を扶け、人を濟はねばならぬ』と云はれた所であります。尙隆正は若し外國の思想が悪いのがあるならば、世界中の悪い思想を日本の思想に依つて清算することが必要で、之れこそ偉大なる攘夷であると申して居ります。

私は昨日、お蔭様と云ふ氣持ちに付いて申しましたが、それについては是非千家清主翁の『道の八千草』を読んであの氣分を養つて頂きたい。又其の教へを承けました岩政信比古の『豐受の靈』と云ふ本を読んで本當に有難い、お蔭様と云ふ氣持ちを味はつて戴きたい。私は斯やうな生活意識をあらゆる方面に育て、行くことが、國民精神總動員の根本原因だと思ひます。私が先年、兵庫縣の或る所の講習會で此の話を致しましたところが、小學校の先生が今の三ツの心持を歌に詠んで貰ひたいと云ふことであつた。歌とするには負けじ魂と云ふ言葉は少し強過ぎるのであります。私もそこで負けじ魂を發揮致しまして、お晝の御飯の終るまで御猶豫を願ひましたら、早速食事中に一首やりましたから、只今それを御披露致しませう。

皇民 吾れ御蔭様にて眞面目なり

こゝろのそこは負けじ魂

之れは詠んだと云ふよりも、寧ろ歌をやつて除けたと云ふやうな力強い歌であります。確かに三十一文字であります。



却々覺え易い。人を苦しめない点では洵に宜い歌でございます。ともかく斯う云ふやうな氣持ちが必要であります。要するに、斯う云ふやうに吾々の實生活の上に日本の國體は立つて居るのであります。吾々の 天皇陛下を中心とした努力、日本精神は直ぐに生活に實現が出来る。それで斯様に色々な特色となつてゐるのである。之れを國風と云ふのであります。斯様に日本の國體觀念はいろ／＼に表現してゐる。そこで更にもう一つ國柄と云ふ言葉がある。何故國體のことを國柄と云ふかと云ひますと、元來日本では家については家柄と云ひ、地方即ち土地々々に付ては土地柄と云ひ、人々の性格に付ては人柄と云つて居ります。國家に就いては國柄と云ふのですから、それらの間に何か因縁がありさうであります。皆さんにお尋ねすると吾れながら考へても分らぬと云ふでせう。そんなことはないと云つて問ひ詰めると、實は私の柄に合ひませぬと云ふのであります。日本精神とは何ぞやと云つた時に、曰く謂ひ難しと云ふのと同様である。使つて居りながら分らぬと云ふのは、意味深重と云ふものである。實をいふと分つて居るんだけど、其の或る根本の意義がつかめないのである。夫れが柄と云ふ語である。總て分つてをるが、何となく分らんといふのが最もよいである。皆さんは人柄と云ふことをよく使ひますが、人柄と云ふことは人格と云ふことであり、品性といふことでございます。人の生れつきの性質の現はれたものが人柄である。生れ付き即ち本來の特質がある、夫れが生活に應じ、環境に即して現はれて來るのが人柄である。家柄と云ふのは總て家には先祖代々の教へがある、學校ならば學校建設の精神がある、會ならば其の會の主旨がある、其の根本精神の顯れて來るのが家柄である。即ち家には歴史がある。其れが社會狀況に應じ、環境に即應して顯はれたのが家柄である。土地柄も同様である。津和野なら津和野、大社なら大社、松江市なら松江、それ／＼其の本質としての精神がある。而して其の土地の人々の努力

に依つて顯はれて來る、夫れが土地柄と云ふので、即ち土地の本質が表現するのである。それ等と同様に日本國家の本質が表現すれば、其れが即ち日本の國柄である。我が天壤無窮の皇運といふものが日本國家の本質であります。此の御本質が皇祖皇宗の御努力と國民祖先の努力に依つて顯はれる時に國體の精華があるのである。そこで國柄と云ふことは國家の本質の表現と云ふことであります。皆さんは此の國柄と云ふ言葉の解釋上、柄と云ふ言葉について克くお考へ下さい。吾々祖先以來の傳來と努力が此の『柄』と云ふ言葉を作つたのであります。本質の表現を『ガラ』と稱する。それは本質を重んずる民族でなければ出来ない言葉である。本質と同時に表現を重んずる。精神と活動とを併せ貴ぶのであります。心の有りのまゝの表はれが『マクコト』（誠）である。大和心の顯れは日本國民の活動となる。夫れで本質たる精神とその表現たる活動を重んずる其の結果斯様な意味深い言葉が出來たのであります。日本人は本質を重んずる民族であると同時に、又その表現を重んずる國民である。精神的國民であると同時に表現と實際とを重んずる民族である。従つて本質を貴ぶところの佛教を活かしたのであります。佛教は元來本質を重んずる宗教であるが、宗教が單に本質のみに捉はれると亡び易いのであります。之れに反して儒教は寧ろ形式を重んずる道德である、儒教は形式、表現に重きを置いたから種々の方面の道德形式が發達したのであるが、一方にその本質を忘れたからその精神が枯れて形式化した。然し日本は本質と表現とを重んずるから日本に來ては儒教も亡びない。物質的に長所を有する西洋文明は表現に重きを置いたのである。歐米の文明は寧ろ形式を重んずる。それで歐米諸國は精神の方面を忘れた結果として互ひに衝突して西洋文明は行き詰つた。之れを復び活かすには本質と表現とを重んずる日本精神に依るより他に途は無い。そこで日本は過去に於いて佛教や、儒教を活かした經驗を力として更に將來、東洋

文明と西洋文明とを合せて活かすべき立場に立つことになつたのであります。此の意味に於いて今回の支那事變は實に東西文化を合せて大きくし、偉大なる文化を發展させる序幕を開いたのである。それ故、私共は海陸軍の飛行機が敵の軍事機關を爆撃したと云ふ新聞の報道を見れば、決して日本の飛行機が敵を落したとばかりは見えない。それと同時に日本文化が世界文化を爆撃したものと考へるのであります。飛行機は其の代表であり、第一線に立つものであります。實に現代日本の立場は來るべき世界文化建設の前に、個人主義文化爆撃の立場に立つてをるのであつて、吾々は最も尊い本質の表現を重んずる國民である。諸君は之れがチャンとお解りになるのみならず、更に之れを活かして下さる方々でありますから、日本民族の文化的使命の如何に大きいかと云ふことを深く考へて戴かなければならない。之れが我が國體觀念を深く思ふと同時に、日本精神の特色に付いて深く考へねばならない所以であります。

次に此の印刷物の第三の我が國體の特異性と云ふことを明かにする爲めに、國がら、土地がら、家がら、人がらと云ふ『柄』と云ふ意味について既にお話致しましたが、此の言葉から推してお分りでございますが、日本には國は國、家は家と別々ではないのでございます。お互ひ銘々が人がらを立派につくり上げて行くことに依つて其の家々が發展する。家柄に依つて人柄が造られて行く。學校教育、家庭教育に依つて人柄が出来て行く。家と云ふのは全然獨立の存在でなくして、向ふ三軒兩隣と云つて、土地々々の環境に依つて家柄が出来て行くのであります。而して土地の人々が皆其の家柄を發揮して行くことに依つて、祖先傳來の土地柄が出来て行く。此處の島根縣は島根縣、お隣の鳥取縣は鳥取縣、夫れ／＼土地々々の土地柄を發揚することに依つて、日本國家全体の國柄が發揮されて行くのであります。胃袋は胃袋として、肺臟は肺臟として夫れ／＼の獨特の動きを爲しながら、整然たる統一を保つて血が働き

意思が働き、全体として働き、結局頭の力に依つて足が働いて行き、頭の光で足が働いて行き、それで又頭の力も充實して行き、國家全体の國體夫れ自体が發展する。茲に私共が日本國家の深い意味の全体的關係、全体觀念の存することを忘れてはならない理由がある。斯う云ふことになる個人主義で安心の出来ない個人の理想が全体觀念に依つて却つてよく實現し、又之れに依つて社會主義に考へて居つた希望が却つてよく實現して行く。その上之れに依つて歐羅巴等の國家主義夫れ自体の理想が却つて實際に實現して行くのであります。斯う云ふことを考へて行きます時に斯様な國體觀念を明かにすることは、ひとり日本人の爲めばかりではなく、或る意味に於て、人類全体の利害休戚に大きな問題であります。結局物は抽象的に考へたり、先許り考へてはならない。よく今日のところ足許の事を考へなければならぬ。

斯う云ふ關係から日本に於ける國家と、郷黨と、家庭と、國民との深い關係がよく發展してゐる。それで先程述べた様に國がら、土地がら、家がら、人がらと密接の關係があると同様に、本質の表現と云ふことにも亦注意せねばならぬのである。本質が努力に依つて表現するからして人がらとなり、國がらとなるのであるから、『がら』と云ふ言葉が『本質の表現』と云ふ意義をもつて居ると云ふ事について深く心に留て置かなければならない。夫れで日本の國家地方家庭、國民、夫れ自体の本質とは何んぞやと云ふ問題である。

さて『國がら』と云ふことが、國家の本質の表現であるとすれば、日本國家の本質とは何でありますか。日本國家の本質が皇祖皇宗の努力と國民祖先以來の努力とに依つて表現するから國體の精華と仰せられたのである。如何にして其の本質を表現するか。所で國民の本質も家々の本質も土地々々の本質も國民の本質も、日本にあつては一つで

ある。だから問題が複雑のやうであつて簡單である。困難のやうであつて意外に簡單である。我が國に於ける是等の本質とは何であるかと云ふに、之れを消德的に見れば祖先に對する奉仕の精神である。それが日本人として其れ等の本質に對する心構へである。祖先に奉仕し、祖先に御仕へ申上げることが、日本の國の道徳的本質である。土地々々家々人々の本質も、日本國家にあつて、その道徳的な本質は此の奉仕の精神である。然らば大日本帝國の本質は何かと云ふに、萬世一系の 天皇が此の國を統治なされることである。萬世一系の 天皇は無限の御祖先からの 天皇である。それで 天皇は皇祖天照大神の御本質の御表現である。それ故、 天皇にお仕へすることは 天皇の御祖先に御仕へすることである。宮城遙拜は神宮遙拜である。神宮遙拜は宮城遙拜と一体であると見なければならぬ。現御神は天照大神の御子孫である。 天皇が日本國家を皇祖皇宗からの御遺訓に依つて治められるのであるから、即ち 天皇の御統治は御祖先への御奉仕である。日本國家全体の御祖先の力は天壤無窮の皇運である。此の皇運に奉仕することが國民道徳の根本である。夫れが日本國家の道徳的な本質である。そこで斯様な皇祖皇宗にお仕へ申上げる、國民祖先に奉仕する心構の精神之れが吾が國民道徳の根本であり、國體觀念の基礎であるが、是こそ實に神道である。神の道である所以である。

次に祖先に對する奉仕の精神と云ふことは、單に過去の祖先にのみお仕へすることなく、祖先の使命を展開することであるから、やがての將來の子孫に對する無限に發展するところの信念が起るのであります。吾々が現代に於ける國民生活に於て私することを棄て、國家に御奉公を申上げるといふことは顯世に於ける道であります。子孫に對して無限に發展する力を與へる道が即ち幽世に對する道であります。斯う云ふところに我が國民道徳の根柢の興行が

あります。そこで此の心がまへが自ら神道の根本義となるのでございますが、私は此の機會に、尙前に話した國體觀念を明かにして、次の話の出発点をもつと固めて行きたいと思ひます。

私は先程我が國語に依る國體觀念の考察と云ふやうなことを説明致しましたが、好い機會でありますから、皆様に或は御參考にならうかとも存じまして、暫く日本に於ける國體觀念を昨日は我が古典に即して素盞鳴尊に付て申しましたので、本日は尙他の方面から少し申して見たいと思ひます。昨日申しました様に、我が日本の國體觀念を闡明するのにも必要なことは色々あります中に、三種の神器が最も意義深く感ぜられることは皆様のよく御承知の通りであります。三種の神器の話致します前に支那人の祖先以來考へて居つて、今も尙さう考へて居る國家觀念について一言申して置きたいと思ひます。支那では國と云ふ字を國と書くのは今更茲に申すまでもない。何故之れが國と云ふ字であるか。これは興味深い問題であります。

昔、大楠公未だ小さい楠多門丸と呼んだ時代のこと、或る日山門を潜つてお寺に行かうとすると、和尚さんが本堂に見て居つて『其處に來たのは誰れかつ』と云ふ質問を發した。多門丸は聲に應じて楠多門一、と答へた。和尚さん聞えないのか、更に同じやうな問を發した。楠多門も却々我慢がよい。相變らず元氣よく楠多門と答へる。和尚さんも一向知らぬからだから大きな聲で楠多門と答へると、和尚さんがそれはお前の名前だらう。名前は言はゞ看板のやうなものである。其の看板を擔いで來る者は誰か。これには多門も困つたが、早速家へ歸つて考へて見て暫くして又山門を潜つて來ると、和尚さん依然として本堂に控へてゐて、嚴然と『來る者は誰か』と聞くと多門丸は落つて『來る者は之れ祖先の遺体ぢや。諸領の民の養ふ所のものぢや。されば祖先の恩は一口も忘れてならない。所領の民は一

日も安心させなければならぬ」と答へた。流石に和尙さんも感心して多門丸を呼入れたと云ふ傳説があります。人は凡て祖先の遺体であります、然もそれは社會國家の恩に依つて生きるものであります。これが解つただけでは之れは單なる自覺である。眞の自覺は更に進んで其の恩に感謝し、祖先の努力を活かすと云ふ覺悟に徹底せねばならない。抑も私とは何ぞや。西洋では「吾思ふ故に吾在り」と答へた哲學者がある。それも一つの考へ方であるが「吾れは祖先の遺体なり」も面白い。若し祖先の遺体でない人が出來たならば、次の萬國博覽會に出品しても宜しい。お互ひは祖先の遺体ではあるが、然し社會國家の恩に依つて生きもし育ちもしてゐるのであります。そこで祖先の恩は一日も忘れてはならないし、又社會國家の人々を一日たりとも安心させるやうに努力しなければならぬのであります。そこに大きな自覺が存する。これは歴史として善く調べられませぬが、楠多門丸にありさうな言ひ傳へであります。吾々は楠多門丸と同様の立場に立つて祖先の恩を一日も多く返さなければならぬ。吾々は祖先の努力を受け繼いで之を子孫へ傳へる責任を持つてゐる。此のやうな心構へが日本精神の中心であり、我が國體觀念の根本である。それと同時に所領の民の養つて呉れたといふやうに、國家は勿論多くの社會、外國からも恩を受けてゐるのである。吾々の日本精神も遠い昔から支那の文化のお蔭を受けてゐる。國と云ふ字を一つ考へても興味深いものがある。

元來支那の國と云ふ字は却々面白い字である。今之れを分解して見ますが、中の或と云ふ字、之れは國の古字である。これについては近頃の支那の學者で政治家であつた有名な梁啓超の書いた『國學彙編』と云ふ本にも書いてある。こゝで一寸申添へますが、支那で滿洲事變前後迄盛んに發達して來た學問は國學である。我が國の國學と違ひませんが、これも兎に角、我が國學が起つたと同じ動機で起つてゐるのであつて、中華民國には古來獨特の文化がある。

之れを吾等中華民國の國民の力に依つて、現代に活かして行かなければならぬと云ふ要求から起つたものが即ち彼の國の國學である。私は此の自覺が、今日支那軍の強い力もその一原因となつてゐるのである。この國學と同時に注意すべきものは戴季陶等の主張してゐる武士道である。戴季陶、戴大仇、胡漢民も此の武士道の長所を認めてをります。新進の學者や碩學の大家などが、何れも日本の武士道を禮讚した。實はさういふ精神が中華民國に起つて居たのであるが、斯う云ふ親日的傾向は近來地を拂つて亡びつゝある。諸君は斯う云ふ事實を顧みて中華民國の識者尙語るに足るものと考へられたい。矢張り中華民國でも矢張り國民的自覺のあることを考へなければならぬ。蔣介石政權を打倒して眞に中華民國の國民としての自覺を起させて俱に事をなすに足るものがあらうと思ひます。國學、武士道が中華民國に於て斯様に起つてゐたとすれば、同時に顧みて、吾等の武士道を考へて見なければならぬ。今日出た許りの文藝春秋に武士道精神を語る座談會と云ふものが出てゐる。斯う云ふやうに、武士道は今や世界的に活躍せんとして居る。従つて斯う云ふ武士道を起さしめた此の皇道精神は、我が國體に取つて如何に宜しいか分りません。さて支那の古代に長く『或』といふ字を書いた此の或を分解すると一口才となつてゐる。どうして國になるかと云ふと、始めには才と云ふ字である。之れが多くの人を押へ付ける力であり、國家を支配する力であつて武力若しくは軍事的の力を示すから、やがて國家統治の主權を意味する。即ち主權のシンボルである。所謂兵馬の大權である。支那では才を以て國家統治の大權と考へた。何處までも青龍刀式である。次に口は鼻の下の口であります。それで之れは人口を現はす即ち人民の表徴である。後の一本棒（一）は何か、之れは土地を示すのである。土地の表徴である。國家と云ふものは一定の土地と一定の人民等を支配し指導する主權に依つて成り立つのである。主權と人民と土地、

之れが國家を構成するのに缺くべからざる三要素である。之れによつて國家が成り立つ。主權の無い國家は無い。夫れは社會である、世の中である。土地の無い國も無い。勿論それは空中も海も入つてゐる。土地があつて後に國家が出来る。それで國家と云ふものゝ定義を下しますと、國家とは獨立唯一の主權に依つて統治せられる一定の人民及び土地を云ふと申してゐる。それで『或』の字は國と云ふことを現はしたことになる。ところが斯う云ふ國が幾つも出来て他を侵すから、どうしても境を構へて國家と云ふものが出来た。支那では之れは城廓である。之れを大きくすれば萬里の長城である。却々旨いところを考へたものである。三四千年の昔からこんな字が支那には出来てゐた。これは中華民國の文化的偉大性の一斑で分る、そこで此のやうに三つの要素で國家が成り立つとすれば、我が國に於ける三種の神器にも何か其のやうな意味がありさうである。三種の神器に付きまして皆さん色々考へ方がございませうが北畠親房卿は直接神器の徳について先づ寶鏡は正直の本源で、即ち正直を重んずる政治道德をお示しなされたものと説き、叢雲の劍即ち草薙の劍は智慧の本源で、勇氣果斷を意味し物を斷ち斬る力として考へられた。此の徳も亦政治上、正直に次いで必要である。同時に慈悲を重んじなければならんと云ふ意味に於て神璽を考へられた。或は神器を智仁勇に當てた例があるが、之れは三種の神器についての完全な説き方では無いのであります。斯やうに直接に皇祖皇宗の大御心を拜察することも結構であるが、元來三種の神器は天照大神の神靈を會したもふ神聖なる御寶であります。それで自ら大神の御本質を示し奉ることゝなるのであります。さて私共は古事記を拜誦致し、他の古典を開いて見ますと、三種の神器については洵に興味深い語り事、意義深い由來が語られてゐる。仍つて三種の神器が大神の御手に具足され整ひますについての物語が大切である。先づ八尺瓊勾玉はその玉の美しいところから斯やうな御名前が

付いたので、洵に鮮かな美しい御玉である。それが全体としては澤山の玉が繋がつて居りますから五百箇御統玉と申します。即ち八尺瓊勾玉は洵に美しい玉が澤山繋がつて居る御玉である。之れは何時、大神の御手に入つたかと其の由來を承りますと、此の國を始めてお造りになつた伊弉諾尊から賜はつた即ち大神の御祖先から賜はつたもので何を意味するかと申しますに、蓋し國家統治の大權即ち主權の御表象である。しかも五百箇御統玉であつて、連綿として絶えないところの萬世一系の主權を意味してをると拜察せられるのであります。日本では支那が主權を武力を以て現はしたのとは違つて美しい玉を以つて現はされてゐる。吾々の魂は永遠の生命である。武力と大變に違ふ。其の玉が然も連綿と云ふ繋がりがつて絶えぬ玉である。萬世一系の主權と云ふことが思ひ起されるのである。皇統連綿である。天壤無窮である。

次に天照大神の御手に傳へられた叢雲の御劍は、何處から御手に入れられたかと申しますと、之れは素盞鳴尊が奉獻つたのである。而して此の御劍は尊の博愛の御精神が發揚されて國土を開拓された時に護られた靈劍である。即ち此の劍は土地開拓に伴つて獲給うたものであるから土地のシンボルである。然かもそれは單なる土地ではいかに。博愛の精神に依つて開拓せられて行く土地でなければならぬ。是に於て我國の皇位の御印たる叢雲の劍は最も尊い皇族たる素盞鳴尊から奉獻られたのであつて、實に博愛の精神に基いて開拓され發展し行く土地のシンボルである。單なる土地ではなくして、博愛の精神に依りて人類救済の精神に依つて開拓せられる土地の表象である。八咫の神鏡については、天照大神が天の岩屋に御籠り遊ばされた時に、八百萬神々が即ち吾々の祖先が上つたもので正に誠心を籠めて作つた御鏡が大神の御心に適つたものである。それは何を意味するであらうか。總て一切を 天皇に捧げ奉つた

國民の赤誠が嘉納せられた赤子の如き國民の奉つた御鏡である。此の寶鏡は國民が 皇室に誠心を捧げた印である。誠心を宿した時に統治権の表象となり、伊勢の神宮の御靈体となるのである。君民一体の表徴であり、赤子の如き國民の真心のシンボルであると解し奉られる。斯様な謂はれを以て居る三種の神器であるから、此の皇祖天照大神の御靈を拜します所の三種の神器に穢れがあつてはならんと云ふ 崇神天皇の御思召しから、宮中から脇にお遷し申上げた。其の時に三種の神器の中で寶鏡と靈劍だけを選り、さうして其の二種の神寶の御寫しを造り奉つてそれに御靈をお遷し申して新に宮中に祀つてある。その御靈をお遷ししてこゝにお祀りしたものが賢所となる。皇祖天照大神の御親とます伊弉諾尊より賜はつた八尺瓊の勾玉は國を生み、此國を修理固成せられた所の主權のシンボルであるから、宮中に其の儘お停めになつたのである。第十代の 崇神天皇の御代に、御鏡と御劍を皇居の外にお遷しになつた所以であると拜察する。斯くて日本武尊が此の神劍を奉じて東國の地方を開拓せられました時に、皇威の擴張に伴つて、日本武尊の御力に添ひ東夷御征伐に際して熱田の神宮に祠られることとなるのは誠に自然であります。

斯やうな由來で、我が國の三種の神器が 皇位の御璽として定まつたのは誠に意義深いことでもあります。日本に於ける御統治の大權は初めてこの國をお造りになつた御祖先の御靈がやどり、國民の中で最も尊い皇族の御魂が捧げられ、更に國民の誠心が捧げられて、茲に完全なる統治権として成り立つたことが自然に拜察されるのであります。到底普通の學問等では説明の出来ないことで、それで分り易く歴史として語り傳へられたのであります。その中に籠つてゐる深い心持ちを吾々が拜察することが出來ますのは、固より今日聖代のお蔭であります。只今は極めて簡単に申しましたのでありますが、斯やうなことを考へますと、想像が付かない深い文化的意義の存するものが多いのである

が、私共は日本の一つ／＼のものそれ自体に斯様な心持ちのあることを悟らなければならぬ。之れが神ながら言舉せぬ國柄である。そこで斯様な精神を如何にして説かうか、時代に即して如何やうに發揚しやうかと云ふところに神道に關する種々の學説が起り、いろ／＼の宗教運動が起つて來るのであります。

さて然らば、神道の根本義は何處にあるか。之れも諸君が神道と云ふ言葉を考へる時に、何時も神道と云ふ語で支那の文字を書いた言葉でございますから、先づ國語に直して見ることが必要である。神道とは『神の道』であります。『神の道』とは何ぞや。それは即ち日本民族祖先以來の生活原理である。こゝに申す神と云ふのは決してキリスト教の神でもなく、支那で云ふ神でもない。全く日本の神である。日本の民族の神である。それは祖先の御魂を祀つた神もあり。又祖先以來信じて來た神もある。それには人間のやうな方ではなくして偉大なる宇宙の力として仰いだ神もある。宇宙の力を私共の祖先は單に宇宙の力と考へたのではない。國家の發展、國民生活の發達に對する原動力として神と仰いだのである。兎に角祖先の御靈を祀つたとか、或は祖先以來信じて來た神々を吾々は神と仰いでゐるのである。要するに日本の神は日本民族の生活と精神と離れないと同時に祖先の御心に繋がる神々であつて、個人々々の考へではなく、全く日本民族總体の神である。吾々の仰ぐ祖先と云ふのは決して古典にのみ書いてある神々ではない。今も尙信ぜられる神々である。それ故神の道とは即ち祖先以來の生活原理だと云ふ所以である。その爲されたことが又吾等の道となつて跡付けられたところに吾等の道が存する。日本民族祖先以來の道がある。此の道は祖先以來の生活の中に展開して來た道である。即ち生活原理である。それ故神道とは日本民族祖先以來の生活原理である。日本民族の祖先以來の道が神道の根本義であるから、神の道の本質は祖先に對する奉仕の精神である。然らば祖先

に對する奉仕の精神の中心は何であらうか。祖先と申せば、皇室の御祖先もあり、國民の祖先もある。皇室の御祖先は恐れ多くも又吾等の御祖先である。日本は家族的なる國家であつて、皇室の御祖先は吾々の御祖先と崇め奉る方々であります。現御神と云ふ言葉は、天皇の神聖なる御本質に對する言葉でありますが、天皇は皇祖天照大神の御延長である。法律的に云ふと延長と申しますが、之れを我が國の言葉で云ふと、皇祖天照大神の御本質を表現なされた方であるから、神ながらにおはしまし、天皇の道は神ながらの大道である。神ながらと云ふことは神の御本質の表現である。尙此の解釋については吾が國體の本質の説明を致します場合に詳しく説きますが、今から相當にお納得の必要がありますから、説明致して置きますが、神ながらと云ふ字に、何故惟神と云ふ字を當てたのかと云ふと、之れは大化三年四月の詔勅に出てゐるのが史上の初見で、昔は此の一箇所しか使つて居ない文字である。此の後少しくれた時代には多く隨神と云ふ字が使はれた。之れが奈良朝前後に最も多く使はれた文字である。然るに大化三年の詔勅には始めて神ながらと云ふ言葉が出て來るのでありますが、其の場合に惟神と云ふ文字が宛てられた。之れは天皇は惟れ神であらせられ、其の儘神であらせられると云ふ意から此の字が使はれたのである。惟の字は支那では絶対性を表はす意義を有し、又混り氣の無い純粹性を現はす場合に使ふ字である。例へば戊申詔書について拜誦致しますと、信義と云ふことを強めて深い意味を現はす爲に惟れ信、催れ義と述べられてあります。そこで惟神即ち神ながらと申すことは、天皇は其のまゝ天照大神であらせられる。即ち現御神におはしますのである。然し當時は多分一般に隨神と云ふ字を書いて居つた時に惟神と書いたのであるから、此の詔勅には此の二字をよく理解しないとけないと云ふ御心つかひからと思ひますが、其の同じ詔勅にもう一箇所出て來る『かむながら』といふ語には隨在天神

といふ字が宛てられた。之れは惟神といふ二字は見て直ぐ神ながらとは氣が付かないから、隨神と云ふ一般的な文字を示されたもので、その中の在天と云ふ二字を除いて見ると直ぐに隨神となる。然らば何故に在天と書いたのかと云ふに、蓋し此の神ながらの神と申すのは多くの神々を意味するのではなく、天に在します神、高天原を知食す神と云ふことを意味するのである。即ち天照大神を示すのである。之れは文武天皇御即位の宣命を拜誦しますと、此の点がよく解るのであります。それが惟神と云ふことは、天皇が皇祖大神其の儘にましますと云ふことである。同時に天皇は大神の御心に從つて國を治めるから隨神とも書くのである。皇祖皇宗の御遺訓に從つて御統治なさる。之れが我が國に於ける、天皇の御統治である。大化の改新當時に、斯様な偉大なる信念、非常に深い精神があつたればこそ奈良朝の文化が展開したのであります。斯様にして大化のせつ國家統一の大業が出來たのであります。そこで自然に神祇官設立の必要を感じたのでありませう。

『神ながら』の信念は斯様な重大な意義を有して居りますので、今上天皇は皇祖大神の御現はれであるから、今の天皇にお仕へ申すことはやがて御祖神にお仕へ申すことであり、同時に又吾々の祖先に仕へることである。日本國民は歴代、天皇の御子孫とます今の、天皇に奉仕するのだと考へますと、吾々が日常の生活を營んで居ることは聽て祖先に奉仕する道である。こゝに吾々の根柢の深い國民生活がある。過去を承けて未來を展開する道を考へますと、日本民族の永遠性が動いてくる。そこで顯明の世界と幽冥の世界を結び過去未來を一体とした生活觀念が出て來る。斯う云ふ考へ方を中今の思想と申します。文武天皇御即位の宣命の中に中今と云ふお言葉がある。日本民族は『今』といふことを單に一時的のものと考へない。無限の過去から無限の未來に發展するところの間と考へる。世界に斯う

云ふ幽玄な氣持で、然も發展的な思想が何處に存するか。『中今』の中といふ語は榮える意味を以てゐる。斯様な心持を私共が考へます時に、天皇が御自分は決して自分の尊い位に就くのではなく、遠い皇祖皇宗から傳はり傳はつて來た御位に就くのだと仰せられたのであるが、日本の皇位と云ふものは無限の過去から無限の未來に榮える皇祖の御靈である。此の御位の思想は到底外國人には分りません。此の皇位が即ち天照大神の御本質である。その皇位を承け繼いだ方が天皇で、天皇は此の御位に即いて日本國家を御統治遊ばされる。皇位の働きは統治である。統治と云ふことは、皇位に即いて皇國を治めることで、日本の皇祖皇宗の御遺訓である。即ち天照大神の御心である。大神のお定めになつた御位に即いて大神の御心を受けて統治することが、大神の御本質を表現することである。神ながらといふ信念は此のやうに皇祖天照大神の御本質を表現遊ばすと云ふことである。斯う云ふやうな意味に於て始めて『大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之レヲ統治ス』といふ憲法の根本義が説かれるのであります。

斯やうに祖先にお仕へして祖先の心持ちを受け繼ぐと云ふことには無限の意味がある。かやうにして我が國體の特性に即して發達して來た日本民族の生活原理が即ち神道に他ならぬのであります。然らば更に考へてみる、神道とは何であるか。それに就いてはどうしても我が國體の特性即ち萬邦無比なる我が國體の全く他と異なる性質を顯はさなければならぬ。神ながらの道、之れが我が國體の他の國體から全く區別する所の根本である。此の信念を道徳化すると皇道となる。皇道と云ふ言葉に就いて御參考までに説明しますと、皇道と云ふ言葉は、もと神ながらの信念を表はした語である。神ながらと云ふことは、前に申しましたやうに皇祖の大神の御本質を御表現なすることである。即ち皇祖大神と現在の天皇とを結び付け奉つた思想である。皇祖大神は唯今の天皇、今上天皇は即ち皇祖

天照大神であらせられる。それが神皇の信念である。此の原理を歴史的發展として書いたものが建武中興の忠臣北畠親房の『神皇正統紀』である。大楠公の精忠も此の信念の表はれである。其の神皇の道を簡単に云ひます場合に、皇國日本の道と考へますと皇道となり、又神國日本の道として考へる時に神道となつて來る。此の神道皇道といふことを國學者は皇神の道と申しました。即ち皇祖皇宗の道が其の儘今の我が天皇の道であるから、皇神の道である。これも同様の言葉で成り立つて居る。従つて之れを約すると皇道ともなれば神道ともなる。此の神皇の信念が皇道並びに神道の根本である。皇道と云ふのは言葉の上からは此のやうに神皇之道といふことが畧されたのでありますから、其の由つて來るところを明かにして置く次第であります。

さて然らば神道とは何んぞや。只今からしつかりと之れを吟味して見たい。そこで次の第四に移ります。神道とは一体何であるか。私は久しく神道の研究をやつて参りまして、色々の著述を書き又度々話を致しましたが、今日は時間の都合もございまして、大体に付いて、皆さんに特に斯ういふ点をはつきり考へて戴きたいのであります。先づ神道とは何ぞやと言はれた場合には、神道の特質を明かにすることが最も大切であります。皆さんが日本人はどう云ふ國民かと聞かれた時分に、頭が一つある國民だとか、足が二本あるとか言つたのでは勿論間違つてはをらぬがそれは支那人と同様である。日本人は何處が違ふかといへば少くとも負けじ魂をもつて居る点が違ふ。何糞と云ふ意氣が日本人を特色づけてゐる。尙日本人が外國人と違ふところが何處にあるかと申しますと、皇室を中心として國民の活動をやつて居る点が極めて著しい特色である。イタリヤもドイツも偉いが、それが日本ならば如何なるムツソリーニが出ようと、ヒットラーが出ようと、天皇の御稜威は燦として一切の上に輝くのであります。何でも他と違つたものを



説かなければ特色と云ふものは分りません。私などの顔を畫くにも鬚を畫くと大分よく分ります。乃木さんの顔を畫くにはちよつと反つたやうなところを描いて顎の方に短い鬚を描きます。或る特徴の点を掴まなければ特色が出て来ない。世間共通の点許り見たのでは神道は分らない。そこで神道の研究に當つて神道の特色を説くのに、どう云ふ点を説くのかと云ふと、そこに問題が出て来るのである。神道と云ふ字は支那にも可なり古くあつて、無論支那の方が本家であるが、支那の神道と日本の神道と、どう違ふかといふに、支那の方は『神なる道』であり、日本の神道は『神の道』であります。即ち支那の神道は不思議なる道 (Mysteries way) であり、日本の道は『神の道』 (Way of gods) であります。大變に違ふのであります。かういふ点のはつきりと區別して考へるといふことが大切であります。世間には神道と云ふ文字が同じであるからといつて、直ちに此の兩者を同一視する人がありますから、其の点を説明致しますには先づ親切に、此の區別から語らねばならぬのであります。

文字でも辭句でもよく分りやすくする必要があります。これについて思ひつきました。これを一寸申添へておきますが、明治の初めは其等の点に於て相當親切であつたやうでございます。殊に興味あるのは、明治七年に汽船や小船に對する海上衝突豫防規則がある。此の法律は漢字の右に読み方がついてあつて、左側には『うみのうへつきあたりをよけるきまり』といふ假名が付けてある。さうして向ふから来る船の大きさ、又船の前か後を見分けることが必要である。それで船の上と左右とに燈が付けてある。その上船頭達の覺え易いやうに歌が付いてゐる。法律に歌の付いてゐるのは之れ許りでありませう。規則に依りますとマストの燈火は白く、右舷側は碧色燈、綠、左舷側に付いてゐる燈火は紅い。それを區別さへすれば宜しい。それで『大船に點す燈火、上は白。右は碧に左紅』と、斯う云ふ歌が添へてあ

ります。それは要するに右と左を取り違へますと大變でありますから、右の『ミ』と碧の『ミ』と合せて覺えてをると宜しいと云ふのである。それから又、西洋では左の舷側をポートと云ふから、ポートワインといふ赤色のお酒と併せて覺えてをるといふ参考のことまで記してあるのであります。總て法律は斯う云ふ風に親切な心から考へたいものである。

それから神道は生活に即した道である。といふことが大切であると思ひます。そこで前にも述べたやうに神道即ち神の道と云ふのは、言ふまでもない、日本民族の生活原理である。然らば日本に於ける神にはどういふ特質が存するかと云ふ工合に考へられる中に日本の神が出て来るのであります。日本の神様を考へようと思へば、日本の神様について何處に他と違ふところがあるかと考へなければならぬ。日本の神の特質性を考へなければならぬ。そこで日本には一柱の神がお坐すのでもないから、その多くの神々の中心たる最高至貴なる神はどなたであらうか、その最も高い最も貴い神は皇祖天照大神である。あらゆる神々の中で最も貴い神が皇祖天照大神であります。此の点をはつきり吾々にお示し下さいましたのが素盞鳴尊であり、大國主命であります。之れは私共の忘れてはならない点であります。さうして昨日讀みました『櫻の林』にちゃんと此の点が説いてある。次に日本に於ける神々の中で、最も此の世に近い神様は即ち最も現實的なる神様はどなたかと申しますと、言ふまでもなく、天皇であらせられる。キリスト教にはたゞひとりの神であるから、外に特別の神は無い、日本には澤山の神々が居る、今日事變に斃れまして百日祭が濟んで靖國神社の神になる方が多い。それと異なつて現實の世界に最も近い神は現御神にまします。天皇である。天皇は實に多くの神々の中で其の最も現實的なる神、即ち現御神である。

然らば日本の神の道に於ける、道と云ふことは如何と申しますと、それについても神道と云ふことの道の特質を考へますと、道の八衢、非常に多い。外國から来た道も實に多い全く道の八衢に立つて吾々は何處に行くべきかと考へて見ますと、『分け登る麓の道は異なれど同じ高嶺の月を見るかな』といふ工合に、其の多くの道が、一体如何なる方向に向つて進んで居るか云ふと、要するに凡ての道が祖先へ向つて展開してゐる。即ち『道』の本質的傾向は祖先への奉仕といふことにある。即ち日本に於ける神道の大切な特質は祖先崇拜といふことで、之がないと日本の神の道にはならない。元來、神道は現實的である。それは世間で云ひ、外國で云ふ現在のといふこととは違ふ。日本の現實的とは見へざる世界に近寄らうとすることである。祖先にお仕へする意味に於て、最も重要な大切な實際的道德は何であるか。其の次に最も重要性を有する實際的なる道は何であるか。あらゆる道の中で、天皇及び國家に奉仕することが實際生活の中心である。天皇及び國家どちらも日本に於ては公である。否寧ろ、天皇即國家、國家即天皇である。それを道徳意識で分つて考へますと、皇室及び國家といふことになつて、即ち忠君愛國と云ふことになるのであります。日本では忠君愛國、敬神尊皇、敬神愛國一つであります。此の点が『櫻の林』に大分に明瞭に書いてあります。今迄は『神』の特質と『道』の特質を説いた。そこで『神の道』の特異性は何であるか。そこで祖先崇拜の心で神に仕へる心に結び付ければ敬神崇祖である。天皇に仕へる忠義の精神に敬神を結べば敬神尊皇となる。即ち神の道とは敬神尊皇、敬神愛國、敬神崇祖に歸着するのであります。今迄私は敬神尊皇、敬神崇祖と云ふ言葉を使ひましたが、其の他にも尙、斯様な吾々國民に大切な神の道が成り立つてをるので、歴代、天皇の敬神愛民の御統治の大御心に依つて育つたものと拜察致します。更に私は前に便宜説明書に道の根本として敬神尊皇、敬神愛國、敬

神崇佛、敬神崇祖、敬神愛郷と掲げましたが、斯様な敬神觀念を一貫して考へますと、結論として、日本民族の敬神觀念にはあらゆるものを包容し、總てのものを攝取し、敬神觀念が總てのものを包容する。さうして然も之れ等のあらゆる敬神觀念が總てのものを活かして行く。之れは實に日本精神の強い力である。敬神の觀念は廣く容れませんが、一度び之れに反する者は容易に受け付けないのであります。勿論受け入れましても固より初の中はなか／＼排斥致します。それ故佛教が入つても却々入れなかつた。然も一旦入つて行けば大いに擴まつたので、魂を打ち込むと斯様な働きをすることが判る。敬神觀念は廣くあらゆるものを、深く強い日本的なる力を活かすのである。

さて私は神社と神道と宗教といふものを區別致してをります。西洋の學問をやりますと西洋風になり、東洋の學問をやりますと『禮記』と云ふ書物が生きて來ます。支那の古い經書たる『禮記』の内容は日本の神道の方面から忘るべからざるものであります。總て禮といふものはどうして起るかといふに道徳意識が無いと禮は起らない。そこで道徳意識が風俗習慣と結び付きますと禮が出て來る。私共日本人でありますと、お互ひに帽子を取つて挨拶する。それが禮である。最敬禮或は神宮遙拜の姿、風俗習慣と結び付く。之れが近頃、イタリヤ、獨逸では右手を伸ばす。チベツトは大變違つてベロを出す。併しそれがあちらの禮である。満場立錫の地無しと云ふ時には、後ろの方の人に棒の先に舌をくつつけたやうな物を振り廻す。所變れば品變るといふが、時代に於ては私共、天子様の前を通ると實に頭が下がる。現今は舉手注目禮が行はれる。之れに宗教情操が結び付くと、今度は祭祀、祭りとなる。更に之れに國家意識が付いて行くと神社の祭祀となるのである。即ち國禮國式となる。若し宗教感情だけで不充分であるとか、或は平凡であると云ふ場合には更に教理をくつつけると神道宗派が出て來る。即ち茲に大社教と云ふものが出て來る

わけである。更に今度は個々の國家意識だけではいかんといふので國家の政治と結び付けて行く。さうすると神社は國家の宗祀としての神社行政が発生する。斯様な点から人に依つて神社は宗教だと説く人があるが、然し神社には政治的要素も、道德的基礎もなかく深い、ところが長い間、宗教的な神道説が展開して居り、神社は宗教的に發展する素質を持つて居る。日本は昔から國家行政と結びついて居る。そこで國家が神社を特に御待遇申上げるのであるが、その最も著しい例が杵築の大社である。ともかく神社は宗教であると云ふことは簡単に片付けられない。宗教的要素は立派に内在してゐるが決して宗教ではない。宗教的な神道教派の成り立ちである。此の邊の事は東洋に於ける禮と云ふ意識を知らなければ説明が出来ない。然し之れは學問上の説明に限ること、實際問題として、況んや神社行政として之れを見れば神社は宗教として取扱つてはならない。國民生活の總和的發展として考へなければならぬ。私共斯う云ふ点を深く力説して居るのでありますが、一般に却々分りかねるのであります。だから宗教に關する學問の方で説いたのでは役に立たない。神社に於ける宗教意識は非常に必要であるからして、神社に於ける宗教的の氣分を十分に尊重して戴きたい。之れが所謂文部省に於ける宗教々育を力説せらるゝに至つた理由である。一昨年來、文部次官の依命通牒に依つて居る所の宗教々育と云ふのはつゞまる所、宗教的情操教育である。元來明治以來國民生活の教本に主力が注がれたが大正の央頃になつて國民精神の教育に力を入れるやうになつた。過去の國民精神は日本精神に展開しました。こゝで我等は國家の偉大性と相俟つて、國民性格を如何にすべきかと云ふことが今日以後の教育問題である。日本精神の鍛鍊と國民精神の總動員と相俟つて宗教的情操教育の必要を感ずるに至つた。現代日本に於ける國民教育、教學刷新の意義がこゝに存する。

今度は第五項になります。以上話を進めて参りました結果として、皇國の國体並に神道の本質としての眞心についてお話を致します。聽て昨日も申しました日本精神の本質と云ふことになるのであります。然らば我が國體の本質とは何かと云ふ問題になります。神道の根本の性質は即ち本質は何かと云ふ問題になりますと、夫れは聽て日本精神の本質でありますから、夫れからお考へになつた方が便宜であるかと思ひます。私が日本精神の特色を挙げます時に常に其の本質を失はないと云ふことを教へるのであります。日本精神はよく其の固有の力を伸ばして行くと云ふ特色をもつて居る。祖先傳來の力が即ち日本精神の本質である。本質と云ふことは途中で舶來したものではなく、舶來して來るものを活かす力、夫れ自体が本質である。盡しながら盡す、夫れ自身が本質の働きである。總て他のものを活かす力は本質の力である。私が此の水を呑みますと此の水が本質の力に依つて私の血となり肉となつて行くのである。かりに牛肉ならば牛肉を私が食べると私の血となり肉となつて此の牛肉が私の働きの中に生きて行く。其の牛肉を馬が食べれば、其の牛肉を馬にして終ひます。總てのものが本質に依つて生かされて終ひますが、本質が弱ければ其の働きのしない。日本民族が總てのものを生かして、外來の思想、他國の文化を日本化して行くと云ふのが即ち日本精神の本質の力であつて、之れは生え抜きのものである。本來の力である。従つて祖先傳來の力である。日本精神の本質は日本民族祖先以來傳はり傳はつて來た力である。力とは筋肉の力だけでは無い、精神の力である。即ち日本精神の本質は日本民族祖先以來の傳統的の信念である。之れが日本精神の本質である。我が國體の本質は何であるかと云へば、教育勅語に仰せられてある通り、天壤無窮の皇運である。天壤無窮の皇運と云ふことは我が天照大神の御信念であり大御心であるが、民族心理の立場から云へば、天壤無窮の皇運に對する信仰が成り立つて居る。此の信仰は決し

て新しい信仰でなく、日本民族祖先以來の信仰であり、信念である。即ち日本民族の傳統的の信念が天壤無窮の皇運の力となつて居る。其の信念が天壤無窮の皇運を扶翼し奉つて居るのであります。寶祚の無窮、彌が上にも榮えて行くのであります。つまり日本國家の發展、日本民族の生活の根柢をなして居る力、神代以來の日本民族の行爲であるから、我が國體の本質も、神道の本質も、總て同一である。之れ即ち日本民族の傳統的信念である。民族と云ふ場合には傳統的と云ふ言葉は無くても分る。民族と云ふ考へは傳統的、歴史的の考へである。國民と云ふ場合は政治意識でありますから、傳統的と云ふことは無くても宜しい。假りに新しい日本の領土や人民が出来たとすれば、新附の民が出来たとすれば國民意識は起るが民族意識は急に起り得ないのであります。民族意識や血統觀念と云ふものはさう容易く起すことは出来ない。而して同じい歴史を繰り返し、同じい生活をして同じい歴史を展開して來たと云ふ歴史感が必要である。民族意識の中に傳統的の力がある。民族と云ふ考へ方は夫れ自身傳統的である。然しながら單に血族關係を強めるだけでは民族意識は強まらない。更に言葉が必要である。同じい言葉を使つて居ると極めて深い民族觀念が出て來る。その上、最も必要なのは同じい信仰である。此の三つの條件を加へた上に、同じい信仰をもつてをると云ふと、一層民族意識が強くなる。所が今の獨逸人には祖先以來の信仰が無い。キリスト教は相當盛んであるが獨逸民族特有の信仰とはならない。そこでヒットラーは新に神話をつくつてそれで獨逸民族の思想を統制しやうと思ふのでありますけれども、今頃神話を造つては少し時勢が遅い。然しながら、今日からでも千年経ちますと相當舊くなり、二千年も経てば苔蒸して來るのであります。然もその神話を民族の信仰として活かすものは民族の魂である。いくら古典が古く且つ貴いからと云ふても古典を見る心がなければ、古典は反古同様である。この魂が目ざれば、

多少新しくとも古典が偉大なる祖先以來の力として存在することになる。そこにゲルマン民族が民族神話を持つやうになる力が出て來る。流石にヒットラーは偉い所に氣が付いたと思ふ。かやうな心持で、ヒットラーユーゲントは日本に來て先づ富士山を仰ぎました。獨逸人には矢張り魂の違ふところがある。兎に角感心なところがあるから、私は遙かにヒットラーに敬意を表する。日本には大人物の要求が無い譯ではないが、偉大なる人物を超越したる現御神を仰ぎ奉つて居る、而して又多くの神々に仕へて居る。吾々の神としての祖先をもつて居る。それらの心持が日本民族の傳統的の信念となつて居る。それが忠君愛國、敬神崇祖、敬神尙武となつてゐるが皆之れ傳統的の信念で、其の最も強い大きな現はれ方が天壤無窮の皇運である。天壤無窮の皇運を中心として總ての傳統的の信念を一括した吾々祖先以來の最も尊い言葉は『神ながらの道』と云ふ言葉である。そこで私はすぐに日本民族の傳統的の信念として神ながらの信念即ち皇道の精神と云ふものを説くのであります。

神ながらの信念は我が國體の發展と共に存して居る。神ながらの道は昨日よりボツ／＼説いて居りますから、皆さんの心持ちにもつて居られる、神ながらの心に依つて自然に御理解が付くのであります。神ながらの道と申すのは天皇が神として御祖先にお仕へ遊ばさるゝ道で、天皇が皇祖天照大神を始め奉り皇祖皇宗の御遺訓を以つて御國を治しめす道である。同時に此のやうに、天皇の大御心を休して、神を敬ひ、皇室にお仕へする心がまへで國民が生活する。それが又廣い神ながらの道の一つの流れであります。従つて萬葉集を御覽になれば、國民が頻りに宮殿を美しいものに仕上げやうとして働いて居る有様を指して『勤はく見れば神ながららし』と諺つて居る。總て大君に仕へ奉る心持ち、例へば春になると野山も花を開いて、天皇をお迎へするやうであり、秋になれば紅葉して、天皇をお迎

へするやうな自然の風色も矢張り、神ながらだと謠ひます。「神ながら」と云ふ語は、本来 天皇がその本躰であります。だから本躰を現はす時には惟神と書きます。天皇は天つ神の御子として天つ神の命以ちて御世知食されると云ふやうに天子様について申上げる。それで國民は大君は神にし坐せばと歌ひ奉る。斯様に國民の信念は極まつて居る。天皇も其の御信念である。斯くて 天皇は天つ神の御子を以つて此の世を治められますから大君の命畏みて仕へ奉ると申すのであります。天皇が此の御信念に依つて此の日本國家を知食し給ふ。此の 天皇の仰せられますのを詔として仰ぎまつる。斯くて皇祖皇宗の御遺訓を以て國を統治し給ふ。國民は國民祖先以來の遺風として大君に仕へ奉るのであります。斯様な信念は日本國家存立の原理であつて、之れに習つて獨逸も中華民國も伊太利もイギリスも皆之れに習ふべきであります。滿洲もこの道に據り、之れに習つて居ります。斯くて國內の我が道は國外を通じて彌益々に東西に施して悖らぬ道である。皇祖皇宗の御遺訓を奉戴して祖先の遺風を顯彰し、斯くて天壤無窮の皇運を扶翼し奉るのであります。若し斯う云ふ精神が世界中に擴まれば大國隆止の理想も實現して行くわけであります。

以上神ながらの信念について説明して來ましたが、何故斯様な立派な信念が成り立つたのであるかと申しますと、斯様な信念があればこそ、我が國体が成り立つたのである。神ながらと云ふ 天皇の道は嚴として確立し、其の下に吾等の神ながらの道が發展して來たのであります。皇祖皇宗の道も國民祖先の道も根本に於て皆一致して居る譯であります。斯くて茲に君民一体の原理が成り立つて居り、國民には國民の分がある。それをすることが務である。夫れがお互の働きである。扱て神ながらの道と云ふのは 天皇が常に皇祖皇宗を崇め給ひ、思ひ遊ばされる道であり、御祖先にお仕へなされる道である。御祖先の道に依つて國を治められるから私と云ふもが無い。全く廣く高く大きい公

の道である。従つて神ながらの道は廣く大きい。従つて神ながらの道を現はす場合には、日本の神の思想について知られるのであります。神直日神、大直日の神、高皇産靈神、神皇産靈神と云ふ神々の御名によつても知られるやうに、高く大きく、又幽玄(カミ)な性質をもつてゐる。總て神と云ふ信仰は眼に見えざる働きと眼に見える働きとから成り立つので、又知られる範圍と知られざる世界に依つて神の觀念は成り立つのである。吾々は神の力は直接顯せないから、高いとか大きいとか幽玄と云ふ言葉を常用して居る。それは日本の神の觀念である。而して又それは即ち神道の精神であり神道の性質でもある。即ち言葉を變へて言へば神ながらの道の性質は高く大きく、小さき私の無いところに其の根本がある。斯の道は廣くさつぱりして居つて大きな強い力をもつて居る。それは申すまでもなく、天皇の御稜威の然らしむるところである。又國民の心によつて斯様な道が打開して居る。そこで斯やうな傳統的信念の基礎は傳統的感情にある。夫れが次に示された日本民族の傳統的情操である。

そこで話は日本民族の傳統的信念の基調をなして居り、深い根となつて居る日本民族の傳統的情操、即ち祖先以來鍛へに鍛へ磨きに磨いた傳統的な民族感情に移つてゆく。此の民族感情、國民感情即ち國民性と云ふものがあるから信念が奥深く入つて強く育つて行く。幾等信念を強めやうとしても其の本質の無い國民は駄目である。吾等が神ながらの信念を支那人に植ゑつけやうと思つても駄目である。大和心としなければ駄目である。幾等よいお米の種でも舗装道路の上に蒔いたのでは生えない。幾等よいお米の種でも悪い地味の上に蒔いてはよく育たない。地味が良く、之れに好い種を蒔いて、肥料を適當にやつて骨折れば、始めて好いお米が稔るのであります。私共は斯様な信念を之から益々立派に磨きをかけて行きます爲には、信念の根柢であり、地盤であるところの國民感情を磨いて行かなけれ

ばならない。國体を明徴にする爲めには國體觀念を深めて行かなければならないからして、國体を無窮に培ふことが大切である。斯様な基礎があればこそ、立派な信念が成り立つのでありますけれども、信念が立派であればそれに應じて益々その基礎をよくしなければならぬ。悪いものを蒔けば皆吸ひ取つてしまひます。土地相應の木を植ゑ或は草を植ゑなければならぬのである。そこで愈々日本精神の根本の問題に参りましたが、我が國体の根本に培ふことが極めて大切であります。此の國民感情は國民全体の生活の中に行き渡つて居る。此の氣持を育てて行くことが、神道に於いて最も大切である。日本民族の傳統的情操が民族心理に依つて研究されるのであります。之れを細かく申しますと長くなりますが、話の順序と致しまして便宜上私が民族性と云ふ立場から説明致し度いと思ひます。民族傳統的情操と云ふことは我が民族性である。民族性を吾々國民は學問や教育で氣が付いたのでなくして、可なり遠い昔から氣が付いて居る、夫れで支那の思想を入れた。外國の思想に接觸して氣が付いた。我が國民の特性に氣が付いた。そこで大和心が自覺された。それ故やまと心か日本魂と云ふ言葉は平安朝の文献にある。日本民族性と云ふことは即ち大和心と云ふことである。大和心は我が日本民族の傳統的情操である。平安朝時代に支那の儒教や佛教が旺んになつて大和心が掩はれて居たものが復活したのであります。斯くて江戸時代に及んで、此の大和心を明かにしたのが國學者の努力であつた。而して我等の眞心を復活したのであるが、その最大の努力者たる本居宣長は之れを和歌に詠じて

敷島の 大和心を人間は

朝日に匂ふ山櫻花

と云ふ名歌を残された。扱てこの日本民族の傳統的情操は二つの方面から研究することが出来る。その一つは民族性と云ふ立場と、もう一つは大和心と云ふ立場とである。先づその民族性と云ふ方面からして、吾々祖先以來の氣分を考察しますと、著しい三つの特色がある。即ち第一は統一性、第二は永遠性、第三は純眞性である。之れは私の考へた名前であるが、大体適當であると存じます。尤も之れは學問的に付けた名前でありますから、名前だけでは直ぐに、私の思つて居る通りに皆さんにはその内容が思ひ浮ばないかも知れない。説明すれば先づそれで宜しいと云ふことに落付くのであります。日本人はとかく纏まり勝である。團結する氣持が豊かである。同時に纏める力が強い。結合させる力が強い。無理に纏めるのでは無く、自然に纏まつて行く統一性がある。例へば歌をつくるにしても、長い歌もつくりませんが、大抵極く短くまとめて三十一文字にする。それで簡単に纏まつた、上手な人の歌になると意味深長であります。更にすつと纏めると十七文字の詩になる。上手な人は如何にも巧妙にまとめる。私共の俳句は十七字並べただけであるが、芭蕉の俳句になると、實に意味が深い。それが即ち纏める力の表はれである。斯う云ふ方が自然國民生活の中に出て來ると、氏神氏子と云ふ制度となつて來る。結局一君萬民、億兆一心で、日本は非常に克く纏まつて居る。統一性の深いことは總ての生活や文化に亘つてさうである。日本の文化現象には斯う云ふ特色が自然によく表現し、又含まれてゐる。永遠性と云ふのは、何時までも發展しようと思ふ氣持で、祖先から子孫へ、祖先から子孫へと榮えて行くと云ふ欲求である。従つて現實生活も幽世の生活と共に榮えたと云つて居る。之れが永遠性である。統一性が強いから儒教が日本に於て、しつかりとまとまつた。支那では種々と喧嘩して議論にのみ走つた。永遠

性が深いから佛教が日本に於いて盛んになつた。何故、佛教が日本に發達したのでありませうか。その一つは日本民族の心の底に永遠性があるからである。又統一性があるから一君萬民の國家となつてゐる。天壤無窮の國体が展開して居る。纏まりには永遠と云ふことが最も必要である。まとまつたものが永遠に發展するので、悠然として全く吾れを忘れた無我の境地となるのである。吾々の胸の中に心臓がある。之れは一つの心臓であるけれども、之れを組織して居る何億の細胞が皆一齊に伸びたり縮んだりして居る、皆善くラジオ体操と一緒にやつてそれで全体がまとまつて居るから偉い。無数の細胞が緊密な總動員で悉く同じ様に働いて居るのである。それと同時に日本人のもう一つの氣持ちは有りの儘で天眞爛漫であつて偽り飾らざるところに著しい特色がある。即ち純真である。此の三つが日本民族の心持ちで、然も祖先以來から鍛へられたる氣持ちだと思ふ。私は國民道徳を説きます際に、我が國民道徳の特殊性を明かにするために、神道中心で説いて來た、而してその根柢に觸れる爲めには民族性を知らしめるにあると思ひまして、大正時代の半ばから斯やうな民族性の特色を説いて居るのであります。更に又、一層日本的ならしめん爲めに此の民族性を深くして吾等の眞の姿に立ち還つて大和心を説いた。それが今日私が特に教育の根本として考へて居る点であります。それで次に大和心とは何ぞやと云ふことになります。

大和心と云ふのは、日本民族の傳統的情操のことで、之れを民族性と云ふ立場から研究することも出来るが、更に大和心と云ふ方面から之を考察して見たい。大和心とはどんな心持ちかと云ふことについては、幸ひ宣長先生がよく考へて呉れられ『敷島の和心を人間は朝日に匂ふ山櫻花』と教へられました。僅か三十一文字であるが、よく大和心の特色を譬へられてある。山櫻の花に朝日がさした其の時の氣分は正に大和心の特色を思はせる。匂ふと云ふこ

とは特色に當るのである。それは丁度、大和心の特色を現はして居る。然らば大和心の特色はどんなかとよく考へて見ると、流石に宣長先生は旨いことを詠じたものであると云ふことが分ります。獨逸のヒットラー、ユーゲントも富士山を仰いで自然に大和心を直感したと思ふ。富士山の姿は洵に宜しい山であります。どなたが見ても富士山は神々しく、懐かしく、清々しいと感ずるのであります。恐らくはヒットラー、ユーゲントは相當深く日本の氣持ちを感じたのであらうと思ひます。富士山は何んと神々しい山ではありませんか。曾てアメリカのシカゴ大學の教授スタール博士は世界で最も氣高い山は富士山で其の上如何にも懐かしい山である。本當にあれ位温か味のある山は少ない。あのスラツとした流れるやうな裾野は、自然に懐かしみを與へる。之れは平安朝の末期に發達した日本藝術の特色に見られるのである。此の線は懐かしみをもつて居る。それでスタールさんが亡くなつた時に友人等が富士山の麓にスタールさんのお墓をつくつたのであります。此の懐かしさと云ふ氣持が大和心の第二の特色であります。第三は清々しさと言ふさつぱりとした特色をもつて居る。富士山が蒼天に聳えた姿は誠にさつぱりとして居る。實に清々しい。所謂、白扇倒さまに懸かる東海の天であります。つまり富士山は神々しく懐かしく清々しい山である。斯う云ふやうな氣持ちを富士山を仰いで感ずるのは全く大和心の共鳴である。それを何故宣長翁は斯様な歌で現はしたのであるかと申しますと、其の懐かしさは山櫻の花に依つて最もよく現はすことが出来る。山櫻は大きさも、色合も、共に懐かしい花である。然らば此の世で最も神々しいものは何んであるかと云ふと、云ふまでも無くお日様である。日輪である。朝は一日中で最も清々しい時である。それで『朝日に匂ふ山櫻花』は正に大和心だと云ふと云ふので、宣長翁はそれを含ませて物に譬へてうまく歌はれた。それを神々しさと懐かしさと清々しさと云ふやうに分析して解釋したのが私

であります。所で宣長は斯様に歌つたが、明治の俳人内藤鳴雪は俳句に之を吟じた。

元日や一系の天子富士の山

吾々日本人にとつて、一年中で最も懐かしい日は元日である。一家打揃つてお雑煮を食べる。お互ひに一つ齡を取つてもお目出度うと云ひ交はす、不思議にも其の一日前は餘り懐かしくないのである。その大晦日一晚過ぎると懐かしい日になる。此の日は昔より借金取りも鶯の聲と申して居ります。元日は誠に懐かしい日である。然も我々日本人にとつては『元日や神代のことと思はるゝ』で極めて神々しい日である。群臣百官宮城に参集する姿を思ひ浮べると實に貴い。吾等日本國民が神代を思ひ宮城を思ふ時に、自ら一系の天子と云ふことが念頭に浮んでくる。而して此の日は門前も床の間も清められて、何時になく清々しい。それで自然に清々しい姿の富士山を思ひ出すのである。

日本人が神社に参拜するときは、先づ手を洗ひ口をすすぐ、實に良い習慣である。元日やお祭の日に氏子も一般の人々も小さい我を忘れて懐かしい気持ちで社頭に額づく時に、我ながら神代ながらの雰圍氣を覺える。そこに日本の神社の神々しさがある。神道とは斯様な気持ちを發展させる祖先傳來の心がまへである。

斯やうに、民族性としての特色は統一性、永遠性、純真性で大和心の特色としては神々しさと、懐かしさと、清々しさである。と云ふのは、同じ傳統的情操でありながら、見方が違ふから、其の名前の付け方も違ふのである。そこで今これを比較して見ますと、大和心の神々しさは、民族性の永遠性に當る。神々しいものは永遠性をもつて居る。神佛は永遠性をもつて居る。乃木將軍も永遠の力として仰ぐところから神として祀られた。永遠なるものは神々しい。次に懐かしさは統一性に當ります。懐かしいものは纏まるのである。まとまつてゐるものは懐かしくなる。懐かしさ

は統一性を増して来る。皆さんでも斯やうにお集りになつて居ると、自然懐かし味が増して来る。一しよに纏まつて居ると自然に懐かしくなるのであります。純真性は即ち清々しさに該當する。是等の關係は音樂に於て最もよく推知せられるのであります。

斯やうな譯で、大和心が更に文化發展の基礎をなすのであります。而して大和心の特性の最もよく現はれたものが、即ち吾等の國旗であります。之は大和心の姿其の儘である。(國旗を壇上に示して) 何故我が國に斯やうな國旗が出来たかと申しますと、日本國民の眞心が嚴肅に然も自然に現はれて來ると斯う云ふ姿になる。此の世で太陽は最も神々しい。然も吾等には太陽がひとり神々しいのみならず、お懐かしいお日様であり、天統様である。然もこの國旗は實に清々しい。何故清々しいかと云ふと、生々とした力、燃えるやうな朝日が落付いた白色で包まれてゐるから清々しい。八紘一宇、天下に君臨したまふ皇室を億兆心を一にした國民の力に依つてお守りして居るから洵に清々しい。之れが大和心の姿で御座居ます。今や日本は大和心に還つたから國旗を掲揚して總てのこゝろを行ふやうになつた。之れ即ち大和心に目覺めた姿である。是に至つて始めて眞に日本精神の本質、國體の本質、神國日本の神々しい姿、懐かしい、家族的な國家、清々しい神ながら言挙げせぬ國の姿を皆さんの心の中に判然と思ひ浮べる時が來た。之れは日本精神の自覺に最も深い意義をもつて居るのである。斯様な心を以つて生活することが、我等の神道精神に對して如何なる意義を持つて居るかと申しますと、國體觀念の養成に對し、又日本精神の發揚に對して、我々に取つて神道の重大使命が存する。今日の時局に直面しまして、私共は大和心を基礎として吾等の日常生活を營み、神ながらの使命を愈々高く、深からしめなければならぬ。茲に日本國民全体の務めがある。苟も日本に在つては、佛教でもキリス



ト教でも、皆此に目を付けなければならない。之れが吾等の最も重大な使命である。私は斯う云ふ心持ちを基礎として、今回お開きになりました講習會に参りまして、國体の根本義又日本精神並に神道に對する愚見を御參考に供した次第であります。私はこゝに益々皆さんが自重自愛して斯道に廣く又深く御精進あらんことを特に希望致して此の講話を終ります。

## 思想問題の批判的研究

文學博士 深作安文氏述

目次

一、思想問題研究の意義	一
イ、現代思潮	二
ロ、思想と日本	三
二、デモクラシー	七
イ、その種々相	八
ロ、その批判	一四
三、マルクス主義	一八
イ、その特色と主張	一八
ロ、その批判	二六
四、過激主義	二六
イ、その發生史と主張	二六
ロ、その批判	二九
五、フアシズム	三〇
イ、その活躍と特色	三〇
ロ、その批判	三六
六、日本精神	三六
イ、その意義	三六
ロ、日本民族の文化的使命	三九

## 思想問題の批判的研究

文學博士 深作安文氏述

御依頼に依りまして、本日から三日間「思想問題の批判的研究」と云ふ題の下に御話を致します。

### 一、思想問題研究の意義

先づ「思想問題研究の意義」から始めます、思想と云ふものと文化と云ふものとの間には極めて密接なる關係があるのであります、文化人と呼ぶものゝ頭腦の主なる内容は思想であるからであります、文化人が己を懐いて居る思想の豊富な人であり、又その生活を己が正しいと信ずる思想で指導して行く人でございます、思想内容の正當性が文化人の價值を決める大切な條件になるのであります、ですから、文化が進むと云ふと思想と云ふものも亦進んで來ます、従つて思想問題と云ふものが發生するのであります、思想問題は彼の世界大戦中、初めて起つたのでは決してありません、又思想問題に苦しめられて居ります國家は、單り我國ばかりでもないのであります、文化の花咲く所には何時でも思想問題があるのであります。例へば古代希臘に於きまして大層進んだ文化がございましたが、是は矢張

り其背景に進んだ思想があつたのであります、又羅馬に於きましても之に似た事實が見られたのであります、でありますから文化の進んだ所には其處に進んだ思想があり、其處に複雑な思想問題があると云ふ風になつて居るのであります。

然らば、思想問題とは果して如何なる問題であるか、これは人間の新しい生活原則と舊き生活原則とが出會ひまして、これらが或は喰違ひを生じたり、或は衝突を生じたりする所に發生する問題であります、今少し言ひ方を精密にして見ますと云ふと個人なり團體なりの是迄信奉して來た傳統的生活原則が新に發生した生活原則、又外國から傳はつて來た生活原則に出會ひまして、新舊の生活原則が或は喰違ひ、或は衝突する時、是迄の舊き生活原則が權威を失つて了つて、新しき生活原則が個人なり團體なりを支配するやうになり、其處に起る問題が則ち思想問題であります。

## イ、現代思潮

「現代思潮」と云ふ言葉は大正七、八年頃から日本に行はれた流行語の一つでありまして、それがつひ今日まで生命を有して居るのであります、然らば、この思潮の内容とも言ふべきものはどんなものかと云ふに、それは要目に掲げました一、デモクラシー 二、マルクス主義 三、過激主義 四、フアンシズムなどがその主なるものであります、是等がいづれも今日の人々の生活原則となつて居りまして、否應なしに彼等の思想なり信念なりを動かし居るのであります、この故に、現代思潮と云ふものは世界大戰を機會に、デモクラシー以下の色々の思想が集つて出來まして、現代人の思想なり信念なり乃至は行爲なりを動かし居る思想の潮流であります。

## ロ、思想と日本

次に「思想と日本」に移りますと云ふと、我日本國は思想と云ふものにつきましましては、遺憾ながら第一流の國家ではないのであります、日本民族は思想と云ふ點から考へますと残念ながら第一流の民族ではございませぬ、此邊りが思想研究者に取つて注意すべき一つの點であります、日本が大戦このかた複雑な思想問題で悩まされる主なる理由は過去の日本民族が思想に就きましましては全く素人であつた爲であります、これが理由は色々考へられます、例へば風土と云ふか、地理的環境と云ふか、是が先づ考へられる、日本の風土、日本の地理的環境は如何にも恵まれたものである、爲に思想の點で我民族が深刻に考へて見ると云ふやうな機會は極めて乏しかつたのであります、次には政治である、我國に行はれる政治と云ふものは國を建て、から今日まで至仁至慈にまします皇室の御政治でございまして、或國民のやうに悪しき政治の爲に深く考へてこれが打開策を講じるといふやうな機會はなかつたのであります、日本の政治の如何なるものなるかは彼の御神勅を拜讀し奉つても分ることでありまして、夙に悠遠なる神代に於いて、御神勅の中に日本の政治の本義と云ふものがハッキリ言ひ表はされてあるのであります、我國の政治は仁徳を根本とする政治であります、力を根本としないで仁徳を根本とする政治であります、この故に、日本國民は國を建て、から此外國の特殊の國のやうに悪しき政治で非常に悩むと云ふやうなことはなかつたのであります、従つて我國に深遠な思想が生じなかつたのであります。

以上の理由の下に、日本國民は思想の點では餘り發達したものを所有しないやうなこととなつて居るのであります、

之が類例を外國に求めて見ると云ふと羅馬國民でありませう、日本國民は羅馬國民に餘程似て居るのであります、當時、羅馬國民は色々の蠻民を征服しまして、羅馬帝國と云ふ彪大なる國家を建てた、羅馬帝國にとつては今日の地中海は宛も盆池のやうなものであつたのであります、これ眼前のファツシヨ伊太利國民が「地中海を以て再び湖水たらしめよ」と叫んでゐる所以であります、そこで如何にして此大國を統治すべきかと云ふことが羅馬の君主や政治家の頭腦を悩ました緊急問題でありまして、實際、羅馬國民は此點で非常に苦心致しました、夥しい新附の民を如何にして統治すべきかと云ふことは彼等に取つて大關心事であつたのであります、さて苦心の結果。彼等の考へついたのであるが、そこで羅馬法と云ふ浩瀚な如何にも發達した法典が出来ました、羅馬は法治國として、數多の異風異俗の民を統一したのであります、又羅馬國民は独自の宗教と云ふものゝ持合せがなかつた、爲に猶太に發生した基督教を取入れて、己が國教と致しました、宗教の側からは基督教と云ふものが羅馬人の靈の世界を支配したのであります、政治の方からは法治主義、宗教の方からは基督教、この二大機關によつて羅馬帝國と云ふものが統一されたのであります、でございませうから羅馬國民といふものには偉大な哲學がない、又彼等の頭腦から湧いて出た偉大な宗教もない、是といふは空前の大國を治める方法如何といふことにその腦漿を搾つてしまつて、世界の本體はいかん、人生の究竟目的はいかんと云ふやうな崇高なまた深奥な問題に頭腦を勞する機會がなかつた爲であります。

これと等しく、日本民族は矢張り當初から政治と云ふものに就ては非常に注意を拂つたのである、我等の遠祖、天孫民族がこの國に渡來せられた理由が、己にこの國に理想的政治を行ふ爲であつたのであります、又哲學は古くは支那、印度近くは歐米諸國に學びました、宗教は佛教でも、基督教でもいづれも外國のものであります、神道は宗教であるかないかは今日尙ほ未だ問題となつてゐるが、若しそれを宗教とすれば佛教や基督教と肩を比べることは出来ないと見なければなりません、何故かなれば、それは二教ほど宗教としての訓練を経て居ないからであります、爲に日本にも亦大哲學者はありません。大宗教家もありません、若し日本で哲學を立て、日本哲學と云ふものを唱へるならば、それは今日以後の日本の學徒の任務であります、今日までの思想日本と云ふものは殘念ながらいかにも貧弱であります、思想日本をして豊富ならしむる爲には、従つて日本哲學と呼ぶものを建設する爲には、今日以後の日本の學徒が責任があります。

斯様に日本國民は思想的に貧弱でございませうから、例へば、先程述べました如く大正七、八年頃にデモクラシーと云ふものが、我國に傳つて來ますや、大抵の人はそれが果してどう云ふものか分らなかつたのであります、否、初めの内は殆んど何人も分らなかつたと云ふて宜いのであります、一部の學者の如きはデモクラシーと云ふものは世界にある君主制を廢して民主制にして仕舞ふ思想系統であると解したほどであります、これでは我國一部の人は驚きました、爲に東京に駐在して居りました某民主國の大使は或る社交機關を利用して、デモクラシーの説明を致し、デモクラシーと云ふは決して君主制を廢して民主制とする思想系統ではありません、君主制は君主制とし、民主制は民主制として、地球の表に共存することを圖るものであるといつたのであります、ですから、當時、大抵の人はデモクラシーを恐れました、これにはデモクラシーを曲解した件の學者に責任があつたのであります。

次に吾が國に這入りましたのはマルクス主義であります、此主義が背景となりまして、何回もの共產黨事件と云ふものが起つたのであります、この事件に依つて如何に吾が國が悩まされたかと云ふことは、更めて説明する必要はこ

さいますまい、極端な左傾派の思想運動の起つたのも一つにはこの事件の爲であります、實際、右傾運動は左傾運動に對抗する爲に發生したものであります、斯様な事情から考へて見ましても日本國民が如何に思想的に貧弱であるかが能く分るのであります、既に貧弱であるから外國から傳はりましたものゝ思想の爲に、未だに煩はされて居るのであります。若しこれ等外來思想に對抗する思想の持合せが此方にあるならば、日本民族がかくまで思想問題に苦しまされないで済だ筈であります、何分、此方に適當なものがないのですから、彼等は思想問題に惱まされ、どうあつても思想問題を研究せなければならんと云ふ風になつて來たのであります。

終りに外來思想に對する態度に就て一言しまして、思想問題研究の意義を一層的に理解していたゞきたいと思ひます。その態度には色々あります、その一は、一も二もなく外來思想を迎合する態度である、その二はこれに反してどこまでもそれに反抗する態度である、外來思想の善惡を検討せず、徒にこれに反抗する態度である、その三は一切の外來思想を疑つて見る態度である、「ナニ外來思想が」と云ふやうな考へから、當然、我が採るべきものがあることを考へないで、初めから懷疑的態度を取るものである、その四は外來思想に對して全く冷淡であり、無關心である態度である、さて、最も望ましい態度は是等四通りの態度でありませんが、即ち迎合、反抗、懷疑、無關心と云ふやうな諸態度はいづれも妥當なものではありません、それならばどう云ふのが果して妥當なものであるかと云ふと、それは批判の態度であります、然らばそれはどう云ふことぞと云ふにその對象が全體として圓形では充分に判らない爲に、それを各部分にほゞいて見て、部分と部分との關聯と、部分と全體とのそれとを正確に認識することである、さうすると初めてそれが能く判つて取るべきものは取り、捨つべきものは捨てること出来るのであります、取るべき

ものは取つて、我が文化の發展に役立たせ、取るまじきものは決して取らないといふことが批判の結果であります、この度私が「思想問題の批判的研究」と云ふ題目を拵へたのも全くこれが爲であります。

## 二、デモクラシー

次に「デモクラシー」に這入ることに致します、デモクラシーがどう云ふものであるかと云ふことについては英米の學者も亦佛蘭西の學者も色々の見解を立て、居ります、これといふは英米佛の三國はいづれもデモクラシーの國であるからであります、固より英國は國王が君臨してゐますから王國であります、議會特に下院の力が大層強いので政治の實権は下院にあるのであります、爲に同國は「君主的民主國」と呼ばれて居ります、表面は君主國であるが實際は民主國であると云ふ意味である、佛蘭西と亞米利加とは表も裏も大統領の治めて居る民主國である、此故に英米佛の三國の學者は色々デモクラシーを説明するのであります、しかし、今はこれ等の學者の説明を紹介することは悉皆省きまして、直に私の考を述べることと致します。

デモクラシーの國民は自由と平等との二は人間が生れながら有つて居る權利だと考へるのであります、又機會均等と云ふことは我々の生活原則として大切なものであると考へるのであります、機會均等と云ふのは日常生活の上で社會が甲に厚くして乙に薄しと云ふのではなく、甲にも乙にも社會生活上の待遇を同等にすることである、もう一つデモクラシーの國で重視されるものは輿論である、社會は社會の社會であるから、若し社會に重要な問題が起れば社會を組立て、居る人達がそれを解決しなければならない、輿論とは社會の重要問題に向つて社會を組立て、居る人々の

發表する共通意見を云ふのであります。さればデモクラシーと云ふのは自由平等の二者を以て人間の生れながら有する権利となし、機會均等を以て人間の主なる生活原則となし、輿論と云ふものの力を以てこの権利を行使し、この生活原則に従つて生きようとする思想をいふのであります。

## イ、その種々相

次にデモクラシーの種類取扱に移ります。デモクラシーの初めの形は政治的デモクラシーと呼ぶものであります。是は人間は固と自由なもの、平等なものである以上、一人若くは少數の優者が一國を統治する権利を獨占するのは宜しくない、宜しく人民全體が一國の統治権を有すべきであるといふものであります。古代の歐洲でこの主張が實現されましたのが前に述べました古代希臘のアテーネと云ふ都市である、アテーネは又國家でもありましたから、都市國家ともいはれたのであります。其處の市民の内、男子は年齢が二十歳になりますと云ふと公民権を得てエクレジヤ即ち公民會と呼ぶ議會に出席することが出来ました。公民會ではアテーネの大小の政治が議されました。是がアテーネの政治的デモクラシーであります。デモクラシーと云ふのは英語でございますが、希臘の言葉ではデモクラテイヤといひます。これは二つの言葉が合して出来て居ります。それはデモスと云ふ言葉とクラトスと云ふ言葉であります。デモスと云ふは「人民」と云ふ意味であり、クラトスと云ふは「權力」とか「支配」とか云ふ意味であります。ですからこれら二つを合はせて出来ましたデモクラテイヤは「人民政治」と云ふ意味であります。君主政治ではなくて人民政治であります。この政治的デモクラシーがデモクラシーの最初の形態であります。斯う云ふ風に別に代議士

を造りませんで公民自身が國家の政治に與かるところのデモクラシーを「直接デモクラシー」と呼ぶのであります。アテーネに直接デモクラシーが出来ましたのは、國が聽て都市であつて、いかにも小さく、又人民の數も僅かであり、その上、經濟事情も割合に單純でありました爲であります。従つて當時の國民は別に代議士を拵へずに一國の政治を運用することが出来たのであります。所が近世となつて國家と云ふものが次第に大きくなり、公民権を持つものも多くなり、それが一堂に會することが逆も不可能になり、終に自分を代表するものを選出することとなつて、茲に「代議的デモクラシー」と云ふデモクラシーが生じたのであります。今日の佛蘭西、亞米利加等のデモクラシーが即ち是であります。

第二の種類は社會的デモクラシーと呼ぶものであります。これは機會均等の原理を人間の社會生活の上に適用して出来るデモクラシーであります。其主張を見ると、眼前の社會には階級があり、或階級に屬するものには特権があり、或種の特権は世襲的になつて居る、是では人の自由と平等とは蹂躪せられて了ふ外はない、であるから我々は階級を無くせなければならん、特権を撤廢せなければならん、さうして社會生活の上で何人も均等なる機會を得なければならんと云ふのであります。これが社會的デモクラシーであります。この故に、無階級の社會、無特権の社會を現前させることが社會的デモクラシーの理想であります。別に言へば、人間を人間として取扱つて、何人にも生活上の機會を均等ならしめようと云ふ主張であります。此處まで申すと、諸君の内には此種のデモクラシーは餘程日本で實現されて居ると云ふことが御氣付きになられた方があらうと思ふのである。例へば今日、汽車の三等客の寢臺の出来たとと社會的デモクラシーとの間には關係があります。明治時代に遡れば、士農工商の區別の廢止の如き亦然りであり

ます。

第三の種類は、産業の方面に機會均等の原理を適用して出来るものでありまして、産業的デモクラシーと呼ぶものであります、其主張を見ますと云ふと、凡そ資本は産業經營の上に大切なものであるが、労働も亦同じく大切なものである、若し世に資本のみで労働がなければ産業の經營は全く不可能な筈である、所が今日の産業組織は資本家、企業家を本位として出来て居て、肝腎の労働者といふものは如何にも輕視せられ、従つて労働者の労働の成果と云ふものは殆ど總て資本家、企業家の獨占到歸して了ふのである、労働者の受取る賃銀と呼ぶものは労働者の造出した成果の極めて小さい部分に過ぎない、其大なる部分は資本家、企業家の懐に這入つて了ふのである、どの國でも労働者といふものが貧しいのはこれが爲である、ついでには我々は此の様な産業組織を造り變へて資本家、企業家の手から産業管理權と云ふものを労働者の手に收め、産業經營の衝に當るものは主として労働者其人にしたいのであるといふのであります、別に言へば資本家、企業家の束縛から労働者を脱離させようとするのである、簡単に言へば産業自治を實現したいといふのである。結局、今日の産業界は資本家企業家の支配するところとなつて居るから労働者は苦しいのである、宜しく兩者に産業界から退いて貰つて労働者の自己經營の出来るやうにせなければならぬといふのであります。

こゝで諸君は若し叙上の態度を進めて行けば、いかにも危険であると云ふことに御氣がついただらうと思ひます、日本では大正十二、三年頃から昭和の初めに掛けましては随分、ストライキが頻發しました、これは叙上の産業的デモクラシーの影響と見て宜しいのであります、大阪附近では川崎造船所のストライキの如き、東京附近では千葉縣野

田町のそれの如き何れも相當深刻なものであります、是等のストライキの思想的根柢は何處にあるかと言へば、今述べた産業的デモクラシーにあるのであります、又ストライキと迄は行かなくてもサボターヂユと云ふものが一時、日本に行はれました、現にサボルと云ふ新しい日本語が出来たほどであります、怠業であります、是亦矢張り産業的デモクラシーと關係があります、詰り、ストライキにせよ、サボターヂユにせよ、労働者が自由や平等に目覺めて、資本家、企業家に對抗する態度に外ならないのであります。

第四は「文化的デモクラシー」と呼ぶものであります、是は更に二つに分れます、其一つは教育的デモクラシーと呼ぶものであります、其主張を窺ふと云ふと、およそ教育と云ふものは社會の上層者の獨占到歸してはならない、又社會の中層者の獨占到歸してもならない、教育は社會の上層にも中層にも亦下層にも行はれなくてはならないといふものである。詰り、教育の上に機會均等の原理を實行しようとするデモクラシーであります、何故に教育が社會の上層者の獨占到歸してはならないかと云ふに、その時は智識と云ふものが、社會の上層者の下層者に對する誇衒となるからである、上層者は自分は學問がある、自分は某の學校を出たと云ふやうに大なる誇り、大なる輕蔑心を以て下層者に臨むからである、又一國の教育が中層者に迄廣まつても、下層者がこれに均霑せなければこれと同じ事が中層者に起るに相違ない、是では下層者が上層者に對しても亦中層者に對しても不快の念を持つて來て社會の融和を缺くやうになつて來ます、事實、社會といふものは上中下の三層から出来て居るのに、教育の爲に三層の間に融和を缺くやうになります、そして終に下層者は社會に對して關心を有たなくなります、何處の社會でも下層者の數が上層よりも亦中層よりも多いのであります、所が下層者が無智曖昧であつて常に上中兩層から制壓せられるならば、社會の融和、



社會の發展と云ふものは期待されないのであります、それ故、教育はひとり上中兩層にのみ行はれないで、下層も亦これに均霑しなくてはならないと云ふのが即ち教育的デモクラシーの主張であります。

斯様に申して來ますと云ふと、我々はおのづと明治五年八月發布された學制を思ひ出すのであります、詳しく言ふと學問獎勵被仰出書であります、この中に、多分、諸君の御承知のことではありますが「邑に不學の戸なく、家に不學の人なからしめん事を期す」とあります、是は明治教育史上に於ける教育的デモクラシーの實現と見て宜しうございませぬ、重ねますと、明治五年の學制の中には西洋の民主國で云ふところの教育的デモクラシーの趣意を窺ふことが出来るのであります、かくはいふものゝ私は明治時代の教育史に西洋のデモクラシーがあるから喜ばしいとは決して申しませぬ、明治時代の教育史に何處までも一般人民を重んじ給ふ御趣意の窺ひ奉られることを有難く思ふのみであります。

文化的デモクラシーの小分けの二は藝術的デモクラシーであります、これによるといふと、藝術と云ふものは平生暇のある人々、即ちいはゆる有閑階級の消閑具となつてはならない、何故ぞと云ふに、藝術と云ふものは之れを味ふ人に本當の人生、いはゞ人生の眞を理解させる役目を有つて居るからである、されば藝術の題材は貴族とか富豪とかの生活に求むべきではない、毎日、汗を流したり、膏を流したりして生きて居る同胞のそれに求むべきである、有閑階級の生活に題材を求めた作品は我々に人生の眞を教へて呉れない、人生の眞を教へて呉れる作品は汗や膏を流して毎日眞剣な生活を生きて居る同胞の生活であると云ふのであります、簡単に云ふと、藝術の民衆化を主張するのが即ち藝術的デモクラシーであります、日本の藝術は疾に此域に達して居ります、今日、小説を讀んで見ましても、芝居

や映畫を見ましても、その題材が労働者職工の生活に取られたものが随分多いのであります、是は藝術的デモクラシーが日本の藝術に喰つた證據であります。

終りに、デモクラシーの第五の種類があります、それは國際的デモクラシーと呼ぶものであります、是まで申したデモクラシーは凡て一國家の中のもの、一社會の中のものであります、この度のデモクラシーは國境を出まして、國際に跨がるものであります、であるから國際的デモクラシーと呼ばれるのであります、其主張を窺ふと云ふと、今日、世界には大小の國家があり、強弱の國家がある、是等の國々は何れも自分で自分を決定する權利即ち自決權と呼ぶものがある、然らば何を決定するかといふに、國體や政體を決定するのである、ついでは大國は小國の自決權を尊重しなければならぬ、強國は弱國のそれを承認しなければならぬ、かくして初めて大小強弱、それ々の國家が地球の表に共存共榮をなすことが出来るのである、是が國際的デモクラシーの主張である、ですからこのデモクラシーは大國が小國を侵略しないやうに、強國が弱國を併合しないやうにと努めるものであります、之を民族自決主義といひます。かの世界大戰の總勘定の時、國際會議が佛蘭西のヴェルサイユで開催されました、此時米國の大統領ウィルソンが主張しました説がこれであります、かの大戰は獨逸が他國を侵略しようとしたところに勃發したのでありますから、ウィルソンは民族自決主義を主張して、あの大戰のやうな悲惨なる戦争を又と繰返すことのないやうにと云ふ態度に出たのであります、されば機會均等の原理を人間の國際生活迄に擴張したところに國際的デモクラシーが出來たのであります。

進んで上來述べたもの／＼のデモクラシーの批判に這入らうと思ひます。是迄述べた色々の種類のデモクラシーの長所と思はれるところを見ると云ふと、先づ第一にデモクラシーは人物を重んずることが判ります、特に政治的デモクラシーにはこの事がはつきり見えるのであります、亞米利加でも亦佛蘭西でも大統領と云ふものが選舉せられる時何がその標的となるか、大統領の候補者が何人か現はれる時に有権者の方では其人達のどう云ふ點を見て選舉するかと云ふと、その人の人物でありまして、富ではありません、又門地、門閥と云ふやうなものでもありません、人物を睨んで適當と思はれる者に投票するのであります、又、社會の指導者を定める時にも同じく人物を標的と致します、是は大統領を選舉する程、的確なものではありませんが、矢張り人物を本位にして、富とか門閥とか云ふものを本位とは致しません。即ち大統領にしても、亦社會指導者にしても、本當に手腕力量のある者を選ぶのであります、是は安んじてデモクラシーの長所であると云ふことが出來ます、日本は君主國體の國家でございますから、大統領の選舉と云ふ御話には何等關係を有ちません、政治的デモクラシーは君主國日本には何等關係を有つてゐないと見て宜いのであります、けれども代議士の選舉、公吏、名譽職の選舉、社會の指導者の決定と云ふやうな場合には私は政治的デモクラシーに學ぶべきではないかと思ふのであります、この頃日本では代議士や公吏、名譽職にある者が破廉恥罪に問はれる場合が随分多いのであります、是は躍進日本にとりまして誠に釣合ひの取れない事實でございます、ですから今後我々はどうかあつても人物を本位にして代議士以下の代表者を選び、又社會指導者を定めるやうにせなければならぬやうに思ふのである。

デモクラシーの第二の長所は自治心を重んずることであり、民主國に於きましては大統領を選ぶのは人民であります、例へば、米國では先づ人民が大統領選舉人を選び次にこの大統領選舉人が大統領を選ぶのであります、兎も角、大統領を選ぶのは人民であります、次に大統領が國務長官その他の大官を任命し、その大官が大小の官吏を任命し、其大小の官吏が直接人民を治めるのである、であるから其處に一の輪が出来る譯である。即ち人民が大統領選舉人を選挙し、大統領選舉人が大統領を選舉し、大統領がもろ／＼の大官を任命し、その大官が大小の官吏を任命し、大小の官吏は人民を治めるのであるから一の輪になる譯である、結局、治める人が治められる人となるのである、治者が聽て被治者である、是が政治上の自治と云ふものゝ本當の意味であると思ひます、法律の上にも同じことがあります、議會があつて政府の提出にかゝる法律案を議し、それが通過すれば大統領がそれを批准し、茲に初めて法律が出来る、ところが其代議士でも亦大統領でも人民が選出するのでありますから、法律は詰り人民が造る譯である、法律を制定するものは法律に従ふものである、立法者は聽て遵法者であります、是が法律上から見た自治の本當の意味であります。この事がよく判れば、我々は法律に従ふことは少しも億劫でないのであります、法律に従ふと云ふことは結局、自分に従ふことであるからであります、此點で我々はデモクラシーの國民に學ぶ所が少くないのであります。第三の長所は公共心を重んずることであり、是亦確にデモクラシーの長所と見て宜いのであります、特に社會的デモクラシーを味つて見ると考へ付くところであります、デモクラシーの社會の人々はおよそ社會と云ふものは自分達が對等の權利で拵へ、對等の義務で支へて居るのだと考へてゐるのであります、これであるから一人でも社

會的に強い人を造り出し、一人でも社會的に弱い人はそれを救済しようとする、爲に、富のある人は富を以て社會奉仕をなし、智識ある人は智識を以て、信仰ある人は信仰を以て技術ある人は、技術を以てそれ〴〵社會奉仕を致します。世界大戦の時、亞米利加では今度の戦争で英佛側が敗けるやうなことがあつてはならないといつて大西洋を越えて二百萬の大軍を歐羅巴に出しました、そこで有志家は政府に願ひまして何でも宜いから使つて下さいといひました、政府の方ではこの出願を許して其人々を使ひましたが、報酬を與へようとしても、「私は報酬を得たくて出願したのでありません。本當に國家の爲と思つて願ひ出たのであります」といつて取りません、然るに政府としては無報酬で人を使ふ事は出来ないといつて、年俸一弗を支給しました、これを「一弗人」<sup>ワンフラン</sup>と呼びました、デモクラシーの國家には斯う云ふ様な事を見ることが出来ます、日本は家族制度の國であつてこれを支へるに財産が必要ですから、西洋の富豪と同じやうな寄附を富豪に對して要求しては不合理かも知れませんが、日本の富豪は今少し民主主義的に目覺める必要が有りはしないかと考へます。

次にデモクラシーの短所を見たいと思ひます、デモクラシーには相當、短所があります、その一は多數の横暴と言ふことでもあります、是は主として政治的デモクラシーや社會的デモクラシーに於いて發見されるものであります、どうして此短所が生ずるかといふに、先刻申しました様に、デモクラシーの國民は自由と平等とに目覺めて居り、又輿論と言ふものを大層重んじます、ですから大統領でも其他の大小の官吏でも人民の意志と言ふものを考慮に入れて政治を致します、言ひ換へれば、輿論と言ふものを考慮に入れて實際政治に當るのであります、指導階級の人々も亦輿論を尊重して社會指導の任に當るのであります、この故に輿論が君主國よりもすつと重んぜられて居ます、所が其輿

論が本當に人民の總意を代表して居る間は問題は起りませんが、輿論尊重と言ふ事は洵に結構なことではありますが、然るにデモクラシーの國に於きましては時として人民の總意を代表せぬところの輿論が起ることがあります、是は政治界には「煽動政治家」と言ふものが出て來、社會には「親方」と言ふものが出て來て、人民を煽動し左右するからであります、此時には眞の政治家、眞の指導者はすつと抑へ付けられて了ひます、本當に國家社會を憂ふると言ふやうな人は輿論ならぬ輿論に制壓せられて了ひます、其處で、彼等は或は政局から、或は社會の第一線から退くのであります、これ等の人々に取つて代るものは實力のない政治家、手腕のない指導者であります、彼等はたゞ自分の名譽や權利さへ得ればそれで宜いのでありますから、何處までも大衆を煽り、多數の勢力と言ふものを背後に擔つて、或は政治界に、又或は一般社會に妄動するのであります、此處が多數の横暴の生ずる所であります。この故に例へば一たび大統領が改選されますと内閣大臣の代るのは勿論、主なる官吏は皆代つて了ひます、時としては郵便局長迄代りま

す、是が米國の政治界の裏面であります、このやうな多數の横暴と言ふ事は日本の政治界にはないやうに致したいものであります。

第二の短所は反抗であります、どうしてデモクラシーにこの短所が生ずるかと言ふに、人は生れながら自由だ、平等だ、といふのでありますから、時としては自分の父母に反抗し、又教師にも、先輩にも反抗するやうになるのであります、これといふも所謂自由の履き違へ、平等の履き違へと言ふのが原因となるのであります、此反抗がもつと酷くなりますと破壊であります、デモクラシーの國で行はれるところのサポターヂユヤ、ストライキと言ふものには亂暴な場合が可なりあります、昭和二年、英國に起りましたストライキには五百萬人の労働者が参加したと言はれまし

た、爲に英國の國礎は動搖を來しはせないかと言ふ評判が一時起つた位であります、五百萬人のストライキとは實に大なる反抗であります。

又先般、デューチ六世王の戴冠式の執行せられた時、倫敦の一部の市民は交通機關の上でのストライキを計畫しましたが、當局者が餘程、骨折つた結果、幸に物にならなかつたのであります、自分の戴く新國王の御一代にたゞ一回執行される時の盛儀に乗じて、都會人士の足を奪ふと言ふ心根はいかにも醜くいたのであります、デモクラシーの短所の反抗は日本にデモクラシーが傳はりましてから我國にも亦見えて來たのであります、家庭に於ても、學校に於ても、叛逆兒が現はれました、工場に於ても大都市の交通機關に於ても亦反抗者が現はれました、かやうに外國の短所を學ぶと言ふことは無思慮でもあり輕佻でもありますして遺憾この上もないことでもあります。

### 三、マルクス主義

#### イ、その特色と主張

マルクスはカール・マルクスと申しまして獨逸の有名な急進社會主義者の一人であります、若しどう言ふ事情か彼が此世に生れて來なかつたと致しますれば、世界の文化國民はいはゆる思想問題の惱みは經驗しないで済んだかも知れませぬ、幸か不幸か彼が此世に生れ出た爲に、特に世界大戰後、世界の文化國と言ふ文化國に如何にも複雑な思想問題を惹起したのであります、上に述べた四通りの外來思想中、最も内容の變化に富み、又最も含蓄の複雑なるも

のはマルクス主義であります、これが主張を述べます前に、マルクス主義の特色を一言しようと思ふのであります。

(一) マルクスは社會の、特に無産者の味方になりました、社會の有産者に對抗することを教へたのであります。此處が彼の主張が何處の文化國民の間にも禮讃者のごさいます理由の一であります、何處の國でも無産者の數は有産者のそれよりか多いのであります、其無産者の態度がマルクスの思想に似て裏書されるやうになつた爲に、何處の國でもマルクス主義の禮讃者が多いのであります、無産者は經濟的に有産者から抑へ付けられて居ります、又何處でも經濟界の有力者は社會の有力者となり、又政治界の有力者となるのでありますから、無産者は政治的權力ある者からも抑へ付けられて居ります、又無産者には特權はありません、所が多くの文化國には特權階級と言ふものがありまして、無産者が抑へ付けられます、されば、無産者は産業的に、政治的に、將又、社會的に有産者から抑へ付けられて居る、其處へマルクスが現はれて、是等の無産者の味方となつて、今まで彼等を抑壓したものに反抗することを教へたのであります、此處が多くの文化國に彼の禮讃者、尊崇者の存する理由であります。

(二) マルクスは無産者に向つて單に反抗を教へたばかりでなく、又大衆運動と云ふものを教へました、或はこれを階級運動とも、又階級闘争ともいふのであります、ですから無産者の腰が仲々強くなるのであります、彼は唯思想的に無産者の背景に立つただけでなく、運動の方法、云はゞ一の戰術を教へたのですから、其處でマルクス主義を信奉する無産者の鼻息が荒くなるのであります。

(三) マルクスは眼前に展開して居る社會に對して深刻な批判のメスを振ひました、此社會は生活難で苦しむ人の居る所である、親子心中の行はれる所である、黄金に眼が暗んで肉親の兩親と妹とが自分の子、自分の兄を殺す所で

ある、是が社會の現實であります、かやうな社會に向つてマルクスは極めて深刻なる批判のメスを縦横無盡に振つたのです、それですから、此現實の社會に呼吸して居るほどの人はどうあつても、マルクスの主張に耳を傾けざるを得ないのである、所謂風馬牛では居られないのであります、貧しいものは貧しいものとして現實の社會で苦しみ、富めるものは富めるものとして又現實の社會で苦しむ、其社會に彼は深刻痛烈なる批判を加へたのですから、苟くも問題を有つて居る人はどうしてもマルクス主義に無關心の態度を取る譯に行きません。

(四) マルクスの社會の研究は如何にも大膽であり、又如何にも新味に富んで居ります、この點特に彼の主義が青年男女を引付けるところであります、何故といふに、青年心理には兎角、大膽なこと、新味に富むものを好むところがあるからであります。我が國で大正の末期から昭和の中頃邊りまで、特に高等學校を初め、その他の該程度の學校の學生が騒動を起したのは主として以上の理由に基づくのであります、當時、當局者は實際運動は宜しくないが、研究は宜しいと云つて後者を許しました、此處が高等學校及びその程度の學徒の學校騒動を惹起した直接の理由であります、後から思へば、研究と實際運動と云ふものは到底、これを引離すことの出来ないものであるけれども、何分、其頃の當局者は思想の取扱に慣れません、爲に大學に行けば研究を生命とする人達だから高等學校時代にマルクスを研究するのは差支ないと考へた結果、その研究を許したのでありませう。

(五) 終りに、マルクスは今日の資本主義的社會を呪ひまして、自分の思ふ通りの新しい社會を造り出さうとしたのであります、今日の社會は有産者が無産者を苦しめるやうな産業組織を有つ社會であるから改造を要すると考へて新しい社會を造出さうとしました、所が新しい社會を急いで造出すことになると云ふと其手段が危険になる、これは

新しき社會が眼で見る間に出来るものぢやないからであります、爲に彼は共產思想を根柢にして一氣呵成にこれを造出さうとして、終に革命を主張するやうになつたのであります、即ち革命と云ふ非常手段に訴へて新しい社會を造出さうとしたのであります、此處が大戦當時、社會に病弊が深く根ざしてこれを芟除することの出来ない國家が國體を變更するの己むなきに至つた理由であります、御承知のやうに大戦の進行中、帝國露西亞が覆つてソ聯邦となり、カイゼルの獨逸がヒンデンブルグ大統領の獨逸となり、引續き埃地利も、希臘も、土耳其も、國體を變更しました、又今日西班牙も、革命で大混亂に陥つて居ります、かくして君臣關係を失つた國家が大戦後、澤山、歐羅巴に現はれました、是は多かれ少かれ、革命と云ふ非常手段を許すマルクス主義の影響であります、此處が我々がマルクス主義を知らなければならぬ所以、而して又斷じて革命と云ふものを學ぶべきでないことを知らなければならぬ所以であります。

さう云ふマルクス主義は果してどんな主張を有するかといふ處に御話を進めて見ませう、マルクスは社會主義史の上で殆ど空前の大きな人物であります、社會主義と云ふものは既に古代希臘に於いて現はれましたが、それが中世を經、近世となつて著しい發展を遂げて居ります、其中でマルクス主義と其の主張を競ひ得る社會主義はないといつてよいのであります。

それ程のマルクス主義と云ふものはどう云ふ道程の下に出來たか、マルクスを知るには先づ彼れの先輩たる二人の人の思想を知る必要があります、マルクスの思想上の恩人が二人あります、それはヘーゲルとフオイエルバッハとである、これは何方も獨逸の人であります、ヘーゲルは近世獨逸の有名な哲學者であります、彼は宇宙の本體をロゴス

と言ひました、日本ではこれを論理的理念と譯して居ります、先づここで少しく宇宙の本體そのものについて説明しませう、ヘーゲルを知るにはこの宇宙の本體と云ふものを知る必要があるからであります。

我々の眼に見るもの、耳に聞くもの、乃至、手に觸れるものは決して最後のものではありません、何故ぞと云ふと、それらは何れも變化するからであります。例へば、此靴を火中に投じますれば見て居る間に灰になります、ですから此のやうな形をなして居る靴は決して最後のものではありません、永遠なるものではありません、窓の外に見える煉瓦でも亦同じ事であります、それを壊せば粉末となつて了ひます、ですから煉瓦も亦決して最後のもの、永遠のものではありません、凡べて我々の五官に觸れるものはこれを現象といひます、我々の面前に現はれて居る物象の意味であります、我々が現象と呼ぶ一切のものは變化しますから決して最後のもの、永遠のものではないのであります、さて我々は讀化するものの中に生きてゐるのではどうしても不安であります、況して自分そのものも變化して居るものと考へればどうしても不安でたまりません、其處で變化せぬもの、永遠なるものを求めて參ります、そのものを認識し、そのものを捕捉すれば、我々の心は初めて落着いて來るからであります、道德的に、智識的に、乃至、宗教的に不變不動なるもの、即ち永遠なるものを知り、それと我々とが一致合體して、其時、初めて我々は安心して、心に落着が生じるのであります、特に智識の點から見て、さういふ永久不變のものが即ち宇宙の本體であります、就いては、世には眼にも見えず、耳にも聞えず、手にも觸られず、口でも味ふことの出來ないもので、而も我々に知識的に心の満足を與へるものが存在することを知らなければなりません、それが即ち宇宙の本體であります。

これでヘーゲルの言ふたロゴスの取扱に戻ります、彼のいはゆるロゴスは永久不變のものであつて、これが彼の宇

宙の本體となすところのものであります、我が國ではこれに論理的理念と云ふ言葉を當筈めて居ることは前に述べた通りである、この論理的理念はヘーゲルに従へば一つの思想なのである、然り、いかにも神聖なる思想である、この思想は活物でありまして自分の中に自分に反對な思想を産むのである、既に自分に反對であつて矛盾關係にあるから兩者の間に戦ひが起つて來る、それ等は暫く戦ひましてから、より高き思想に綜合されるのである、この事をヘーゲルは「止揚」といつてゐます。彼は論理的理念の初形を「正」と呼び、これに反對な思想を「反」と呼び、兩者の止揚されたより高き思想を「合」と呼んだ、此正と反とは合に綜合されて滅びて了ふかと云ふとさうでない、合の要素としてその中に生きて居るのであります、かやうに現在の思想の中に入つて、その要素となつた過去の思想を彼は「止揚的契機」といつた、これは前を承けて後を起す思想力とも言ふべきであります、次に此合は第二の正となりまして、又、己れに反對な思想を産むのであります、それを第二の反と致します、この第二の正と第二の反とは對立して戦ひます、それらが暫く戦つて又より高き思想に止揚されます、それが第二の合であります、此第二の合が第三の正となり第三の反を産んで暫く戦ひ、それらが又止揚されて第三の合に綜合されるのであります、此正反合、々々々方式で論理的理念が自己を展開することをヘーゲルは論理的理念の辯證法的展開と言つた、此處で「論理的」と云ふ形容詞を使つて居る意味が判ります、即ち論理的理念は論理的道程を辿つて辯證法的に自己を展開するものであります、ヘーゲルに従へば、我々の住んで居る宇宙はその本體たる論理的理念が辯證法的に自己を展開をして居る道程に外ならぬのであります。

マルクスは青年時代にその郷里トリエル市から伯林に出て、伯林大學に這入つた。其時ヘーゲルは己に果てゝ居り

ましたから、その講義に侍することは出来ませんでした。ヘーゲルの著書はこれを愛讀しましたから、上來述べ來つたヘーゲルの唯心辯證法を知つたのであります。それで彼は初めて宇宙の解釋に觸れました。言換へれば、ヘーゲルの唯心哲學に依つて青年マルクスは宇宙解釋の鍵を與へられたのであります。所が意外にも彼れの思想上の第二の恩人たるフオイエルバツハに觸れまして彼の考へが一變するのであります。

フオイエルバツハは、ヘーゲルの門人の一人であります。ヘーゲルの哲學は唯心論と呼ばれるのであります。フオイエルバツハのそれは唯物論と呼ばれるのであります。唯心論とは心を本として宇宙を説明するものであります。別に言へば、心を本にして物を説明する哲學であります。ヘーゲル哲學の中心原理はロゴス即ち論理的理念であります。彼によれば是は宇宙の本体であります。いはゞ宇宙の心であります。我々個人に心があつて種々の活動を營むやうに、此の宇宙にも亦ロゴスといふ大いなる心があつて森羅萬象の源となつてゐるのです。さればロゴスは宇宙精神であります。ヘーゲルは此の宇宙精神を提げ來つて宇宙を説明したのでから、彼の哲學は正しく唯心論であります。所が此のヘーゲルを師として學んだフオイエルバツハの哲學は唯物論であります。兩人は師弟であります。その哲學は白と黒ほど相違して居つて、非常な對照をなすのであります。然らば、唯物論とは如何なる哲學であるぞと申しますと、物を本として宇宙を説明する哲學であります。精神に對立してゐます物質を本として此の宇宙を説明する哲學であります。マルクスを解するには、先づ此の唯物論と云ふものを充分に知らねばなりません。フオイエルバツハに従ふと云ふと、ヘーゲルのいはゆる論理的理念と云ふが如きものは哲學者の幻覺に過ぎないものである。この宇宙の實在としてロゴスといふやうなものがあるのではない。宇宙の實在として存するものは自然と人間とだけである。

此の二つのもの以外には實在するものは全くない。宗教家のいはゆる神とか天堂とか云ふやうなものも、宗教家の主觀の產物である。斯う云ふ次第で彼は大膽に唯心論を否定し、従つて宗教をも否定し、唯自然と人間とを肯定したのであります。

然らば人間とは果して如何なるものぞといふに、彼は「人間とは食物を喰ふ所のものである」と云ふのであります。これならば、フオイエルバツハを俟たないで何人も知つてゐる所であります。人間には貴い心といふものがあります。が、彼はそれを物質から説明するのであります。これで彼の哲學が極端な唯物論であることが判るのであります。

彼の言葉に、「思惟は現實から生ずるけれども、現實は思惟から生ずるものでない」といふのがあります。こゝに思惟と云ふは、哲學的考察と云ふ程の意味である。即ち物事を根本的に把握することである。現實とは眼前の存在であつて、彼は自然と人間とをその主なるものとなすのである。この故に彼は思惟は自然や人間の原因ではなく、却つて自然や人間があつて思惟が生ずるとなすのである。彼に従へば自然と人間とは何れも物質であるのであるから、思惟は物質から生ずることになるのであります。これが唯物論の正面の姿であります。

ヘーゲルの立場は丁度、この裏を進んでゐる。即ちヘーゲルの考へ方からすれば、「現實は思惟から生ずるけれども、思惟は現實より生ずるものでない」と云ふことになるのである。ヘーゲルのいはゆる論理的理念なるものは、我々の眼では見えず、耳にも聞えず、又、手でも觸れることの出來ぬものである。それならば果して何うすればそれが判るかと云ふに、目を瞑つて深い哲學的考察に入るにある。さうすると論理的理念と云ふものに觸れることが出來ると云ふ様にヘーゲルは考へた。それであるから、思惟の方が論理的理念よりも先きに存在する、現實についても亦同

じことがいはれる、思惟があつて然る後、現實があるのである、所がフオイエルバツハの立場から云ふと、現實が先であつて思惟が後に來るのである、思惟は現實から生ずるのである、現實があつて然る後、思惟があるのである。

ヘーゲルの哲學は一時、獨逸の哲學界に重きをなしましたが、彼が一八三一年地下の人となるや、彼れの學派は左右兩黨に分裂しました。その左黨に屬した一人が即ちフオイエルバツハであつて、其師の説とは全く異つた唯物論を唱へたのであります、青年と云ふものは、獨りマルクスに限つたことではありませぬ、何うも新しいもの大膽なことを好みます。當時、フオイエルバツハは獨逸の哲學界で、いかにも大膽な、又新味に富んだ唯物論を唱へました爲に青年マルクスはこれに動かされたのであります、そして考へました、ヘーゲルは物質的なものは合理的なるものから派生したとなしたがさうではない、凡べて精神的なものは人間の頭脳内に於いて物質的なものゝ轉化したのである、物質的なものこそ現實的であると、かくして彼はヘーゲルの唯心辯證法を建直して唯物辯證法となしたのであります、即ちヘーゲルは「心」が正反合、々々々の法式に従つて自己を展開するとなしましたが、マルクスは「物」が正反合、々々々の法式に従つて自己を展開するとなしたのであります、この故に、彼は辯證法そのものはヘーゲルに學び、辯證法的に自己展開をする「物」をフオイエルバツハに學んだのであります、爲にマルクスの辯證法を唯物辯證法と云ふのであります、即ち彼は、此の宇宙で最も根本的なものは物である、この物がヘーゲルの説いたやうに正反合、々々々の法式の下に自己展開をなし、それが此の宇宙をなすのであるとなしたのであります。

辯證法と云ふ言葉はその由來する所がいかにも遠いのであります、古代希臘にツエノーンと云ふ哲學者がありました、是が辯證法と云ふ辯論術を考へ出したと云はれて居ります、古代希臘に於ては大層、辯論術が重んぜられたので

ありまして、彼のデモソゼネスと云ふやうな雄辯家が出たのは自然のことでありまして、辯證法と云ふのは眞理の存在を辯じてこれを證據立てる方法であります、ですからグリースの當時にあつては辯證法は一つの辯論術であつたのであります、ところが近世になつてヘーゲルがこれを哲學の方法に建直したのである、即ち論理的理念が正反合、々々々と云ふ法式の下に自己展開をすることを辯證法と云ふやうになつた、これといふは辯證法を使ふ時には甲と乙があつて共に辯論を闘はせ最後に兩人が首肯する眞理に到達するのであるが、これに似たことがヘーゲルの考へました論理的理念の辯證法的自己展開に見られるからである、即ち該理念が己と反對なものを生み、それと矛盾關係を生じて、「正」と「反」とが戦ふのは丁度、二人の人間が辯論を闘はすと類似するからであります。

次にマルクスの唯物史觀に入ります、これは唯物論の立場に立つて、人間の歴史的發展を眺めて、何處を切つて見ても、經濟事情と云ふものが、最も重きを爲して居ると云ふ人生の見方でありまして、結局、これはマルクスの人生觀なのであります、マルクスの思想體系が、他の經濟學者のそれと違ひまして、何處となくドツシリとしたところのあるのは、それが此の唯物史觀の上に乗つてゐる爲であります、別にいへば、唯物史觀と云ふ人生觀が、彼の思想體系の礎になつて居るからであります、此の唯物史觀が果して何處から發生したかと云ふと、それは前に申した唯物辯證法であります、唯物辯證法はマルクスに取つていはゞ此の宇宙の秘密庫を開ける鍵である、これでそれを開けて見て、宇宙の一部分である人生を眺めるといふと其の歴史のどの斷層にも經濟事情が最も重要性を有して居ると云ふことが判つたのであります、これマルクスが始終一貫、人生の經濟的方面を重んじた所以であります、唯此の唯物史觀は、マルクスのいづれの著書にも明瞭に書いてないのが遺憾であります。此の邊りがマルクス學研究の骨の折れる一つの



理由であります、けれども割合に彼れの唯物史観が判る文字がその著「經濟學批判」の序文にあります、その十一頁に「物質的生活に於ける生産方法は、生活の社會的、政治的及び精神的道程の一般性を規定する、」とあります、これをなだらかに申すと、人間の社會生活、政治生活及び精神生活は、いづれも經濟事情に依つて左右されると云ふことになり、もつと平易に云ふと、人間の精神生活は物質生活に依つて支配されると云ふことになり、若し東洋で之に近い思想を求めるなれば支那の管子の説でありませう、管子に「倉廩實則知<sup>三</sup>禮節<sup>一</sup>。衣食足則知<sup>三</sup>榮辱<sup>一</sup>。」と云ふ言葉があります、「倉廩實則知<sup>三</sup>禮節<sup>一</sup>。」と云ふのは、人間は倉が一杯になると云ふと禮儀、作法と云ふやうなことを注意するやうになつて來るもので、倉が空虚な間は禮儀、作法所ではないといふ意味であります。又、「衣食足則知<sup>三</sup>榮辱<sup>一</sup>。」と云ふのは、着物や食物が足りるやうになつて人間は始めて名譽、不名譽と云ふことを考へるやうになる、着物も足らず、食物も足らなければ盗み泥棒迄するのであるから、名譽、不名譽には注意しないといふ意味であります。

次には、剩餘價值と云ふものに進みます、マルクス以前にこの言葉を使つた學者が無いではありませんが、マルクスが意味したほどではありません、彼はおよそ、商品の流通には二通りあるとなして居ります、即ち

商 品 — 貨 幣 — 商 品  
 貨 幣 — 商 品 — 貨 幣

であります、貨物が生産者の手を離れて消費者の手に渡ることをマルクスは商品の流通と云ふのであります、第一の場合は、先づ商品があつて、それを貨幣に代へ、次に其の貨幣を以て自分に必要な商品を買ふ場合であります、これ

は労働者に見るところである、労働者は労働と云ふ商品を持つて居ります、労働はマルクスの當時は商品でありました、世界大戰の終結直後、各國の代表者が佛國ヴェルサイユ宮殿に會し、平和會議を開いた時、初めて労働は商品でないと決議したのであります、それ故労働者は労働と云ふ商品を工場なり、炭坑なりに持つて行つて貨幣に代へるのである、此の貨幣が即ち貨銀であります、彼はこれを以て、米とか、味噌とか、着物とかを買ふのであります、それが第二番目の商品であります、であるから此の種の商品の流通はたゞ一回で終つて了ひます。

所が、第二の商品の流通の場合は之と違つてゐます。それは資本家や企業家の側に見るところである、彼等は先づ一定の貨幣を使つて生産の經營を爲すのであります。即ち或は工場を建て、或は機械、原料を講入し、次に労働者を雇入れて商品を製造させる、その出來た商品はこれを國の内外に賣出して貨幣を手に入れます、これが第二番目の貨幣であります。所で此の種の商品の流通は前の場合のやうに一回的でないのであります、即ち企業家は第二番目の貨幣を使つて復た企業を繰返します。例へば、初めに五千圓の貨幣を使つて第一回の企業を爲し、二千圓を得たとする、さうするとこのお金の中から自分の生活費や、その他の雜費を差引きその残りを以て、第二回目の企業をする、以下、第三回、第四回、第五回と何處迄も繰返して行きます、その間にその得る貨幣はドン／＼増して行きます、勿論、中には損をすることもありませうが、マルクスは今日のやうな貨銀制度の上に立つ産業組織では増して行く許りだといふのであります。

さて、初め使つた貨幣の額を第二番目に得た貨幣の額から差引いた殘餘をマルクスは剩餘價值と呼ぶのであります、でありますから、日本の言葉で云へばそれは先づ純益に近いものであります。

次に資本に移ります、マルクスは資本家や企業家の有する資本と云ふものは勤勉、節儉の賜物ではないのであつて、唯今述べた剰餘價值を積上げたものであると云ふのであります、或は又マルクスは資本を資本家や企業家が新しい貨幣を得る爲に使用する貨幣であるとも云つてゐます、何れの場合でも剰餘價值の積集であります、この故に、資本は資本家や企業家の勤勉、節儉の賜物ではなくて労働者の有する労働力の所産であるのであります。

今度は搾取と云ふことになり、資本家企業家は労働者を雇つて色々な貨物を生産させ、それを國の内外に賣捌いて一定の貨幣が回収される、さうすると、其の貨幣から労働者へ仕拂ふ賃銀、其の他の雜費を差引いて、その残りの全部を自分の懐に入れて了ひ、賃銀以外は少しも労働者に分ちません、これをマルクスは搾取と云ふのであります、マルクスの考によるに、企業家の搾取した貨幣は誰が拵へたかと云ふと、それは労働者である、所が雇主は労働者には賃銀と云つて、労働の成果のホンの一小部分しか與へないで其の大部分はこれを獨占するのである、これが即ち搾取であります、結局、労働の成果の大部分の獨占と云ふことであります。

マルクスの搾取と云ふ考には餘程、煽動性が織込まれて居りますが、次にこの點から更に穩かでない議論が展開して來るのであります、叙上の搾取と云ふことが公然行はれる今日の産業組織は何うしても、建直しをせなければならぬと考へられたからであります、そこでお話はこの産業組織建直しの方法論に進み入るのであります、彼はこの方法は二通り主張するのであります、其の一はデモクラシー即ち民主制の採用であります、是は昨日お話し致したデモクラシーの内、二番目の政治的デモクラシーを指します、彼は君主制を廢して民主制を採用すべきであると云ふのであります、この點だけでも我々はマルクス主義を排撃せねばならぬことになるのであります、彼は何が故に君主制を廢

しようとするかと云ふと、君主制と云ふものは、資本家、企業家に有利である制度であるからと云ふのであります、別に言へば、君主制は資本主義を庇護するからと云ふのであります。かくて、マルクスは何處迄も多數の労働者の味方となつて民主制を採用すべきであると主張したのであります、結局、産業上、民衆の總意を重んじようとするのであります。

その二は、共産主義の採用であります。こゝで、マルクス主義と云ふものが、共産主義の側面を備へ來るのであります、何が故に共産主義と云ふものを採用せねばならぬかと云ふならば、共産主義に對立するものは私有財産制度であります、資本家、企業家は此の制度に依つて、生産を經營して莫大の私有財産を拵へて居るのであります、だから、此の私有財産と云ふものを社會有なり、國家有にして了ふと云ふのであります、天下の富をすつと搔き均して世に富豪の階級、即ち有産階級を存在させないようにしようとするのであります、かくしてマルクス主義は漸くその危険性を加へて來るのであります、若し普通に共産主義を説きますならば、それは、生産、分配、消費及び所有の四ヶ條を共同に行ふ産業制度であります、先づ生産を共同にし、次に分配も共同にし、消費も共同にし、後日に備へる爲、共同に貯蓄するのが即ち共産主義の普通の言ひ方であります。

マルクスの同志にエンゲルスといふ者がありました、是亦獨逸の社會主義者であります、兩名が共著を致して、「共産黨宣言」と呼びました、この書は危険書の中の危険書であります、何故ぞと云ふと、それは共産主義を叙して、階級闘争や革命に及んで居るからであります、今日、公然搾取の行はれてゐる産業組織を改造する直接の方法が即ち階級闘争であります、是は労働者や職工が自分等は無産階級の人であると云ふ階級意識を明かにして、團體運動の下に

資本家、企業家と云ふ有産階級に向つて自分等の利益を保護することであり、マルクスはこれを以て眼前の搾取制度を粉碎すべきであると考へたのであります。此の書の終りの方に「共産黨宣言綱領」と云ふものが十ヶ條ござい、ます。これが公になりましてから果して幾度、世界各國の労働者が自分の階級運動の根據にしたか判らないのであります。それは

- 一、土地所有權を棄却し、地代を國費に轉用すること
- 二、高度の累進所得税を課すること
- 三、相續權を廢止すること
- 四、凡ての移民及び叛逆者の財産を沒收すること
- 五、國家資本と絶對特權とを有する國立銀行を設置して、信用機關を國家の手に集中すること
- 六、交通及び運輸機關を國家の手に集中すること
- 七、國有工場、國有生産機關を増加し、共同設計の下に土地を開墾、改善すること
- 八、何人にも平等に労働義務を課し、特に農業に關する産業軍隊を編成すること
- 九、農業及び工場の經營を結合し、都會と田舎との區別を漸次、廢止すること
- 一〇、凡ての兒童を公に且つ無料に教育し、現今の様式に於ける兒童の工場労働を廢し、教育と物質的生産との連絡を圖ること

であります。今これをざつと説明致しませう。

一は土地の私有を廢して、これを國有となし、國家がそれを人民に貸して、地代を取り、其のお金は國家の費用に使ふことにしようといふのであります。これで此の世の中に大地主といふやうなものなくなつて了ひます。二は「高度」と態と斷つてあることを注意すべきであります。日本の所得税法も累進法を採用して居りますが、此の綱領では高度の累進率で所得税を課しようといふのであります。即ち収入が多ければ多い程、税率を引上げるのであります。差當り、サラリーマンなどを富ますまいと云ふのがこの個條の精神であります。恐らく説明を要しないでせうが、此の内容の傍若無人であることはマルクスの面目が躍つてゐます。父が果てますと子は遺産相續が出来ない譯であります。四は文字通りであります。五は銀行事業と云ふは、最も有利な事業の一つでありますから、一人に銀行の經營をさせないで、國家がこれに當るやうにしようといふのです。已に絶對特權を許す以上、國立銀行が一國の金融を左右する事となります。六は汽車とか汽船とか電車とか總て之を國家の手に收めて了はふといふのである。交通機關、運輸機關の經營は矢張り大に儲かる事業でありますから、私人の經營を禁ずるのであります。七、國有工場は説く必要がないが、國有生産機關といふは農業の方では、例へば苗圃などをいひ、工業の方では製粉所などをいひます。マルクス主義は農業には大層、同情を有つて居ります。そこで七の後半があるのでして、共同設計の下に土地を開墾し、改善しようと云ひます。工業は通例、都會に行はれまして、工場に出入する者は夕刻には現金を手に入れることが出來ます。一度、工場の人になりますと、少くとも日給を受ける人は夕方はお金の顔を見ることが出來ます。所が農業は決してさうではありません。農業は春から夏にかけて種を下し、それから絶えず耕作して秋にならないと收穫する譯に行きません。收穫したものを商人に賣拂つて初めてお金を見るのであります。のみならず、農業にあつては労働

時間と云ふものが實に長く、到底工場のその比ではない。又、農村には都會のやうな娛樂機關に乏しい、かやうに色々な理由から、農村の青年男女の多くは、鋤や鋤を棄てまして、都會にあこがれ、そこにある工場に集中して來るのであります。その結果、都會はますます膨脹し繁榮しますが、農村はいよゝゝ疲弊するのであります。こゝにマルクスは着眼しました、都會が偏つた繁榮をとげ、農村が非常に疲弊することは決して社會の爲になりません、こゝが農業を割合に重んずる彼の肚裏であります。八は亦極めて大膽な主張であります、即ちその前半は何人にも勞働をさせることと云ふのであります、富豪でも貴族でも苟くも働ける身體を有つて居る者は働かなければならぬと云ふのであります、如何に先祖傳來の財産があつても、遊んで居てそれを消費してはならないと云ふのであります、是が今日、ソ聯邦の憲法第十八條に採用されて、「働かざる者は食ふべからず」となつて居ります、如何に共產主義者が天下の富豪や貴族と云ふ者を敵視するかと云ふことはこれで十分、想像ができません、其の後半は農業重視論の第二の現れといふべきであつて、およそ農業に従事して鋤や鋤を取るのには恰も戰爭する氣持でやれと云ふのであります、結局、農業勞働の強制であります。是は矢張りソ聯邦で採用致しました、九の前半は農業と工場とを結合させようと云ふのであります。例へば、農夫が鋤を要する時は、通例、金物屋に行つてそれを買ふのであるが、マルクスは農夫が鋤が欲しい時には金物屋に行かないで、鍛冶屋に行けといふのであります、何故ぞといふに、およそ商人と云ふは人の造つた品物を、たゞ場所を變へるだけで、お金を儲ける者であつて、少しも物を創造しないと云ふのである、マルクスは農業を重んずるだけ、それだけ商業を輕んずるのであります。九の後半は、都會と田舎の區別があれば田舎の青年男女が都會にあこがれてこゝに集中するから、全然、その區別を止めたいと云ふのであります、ですから、是は農業重視論

の第三の現はれと見られます、一〇は凡ての子供を公の學校で無料で教育すべく、又今日の體制下にある幼年工を止めさせなければならぬといふのであります、これ今日の幼年工は父母が貧しいから學校に入れないのであつて、丁度、學校に在つて勉學する時期を工場で暮すのでいかにも可哀相であるといふのである、結局、勞働者に對する同情の一の現はれであります、何うも今日の教育は、唯智識上の教育であつて、相手の實生活に即して居らぬのである、本當の教育と云ふものは、相手の生活に即すべく、相手が子供ならば子供相應に物品を造らせなければならぬと云ふのであります、今日、小學校に手工と云ふものがござりますが、マルクスの意味したことは手工以上であります、この一〇は今日、ソ聯邦が殆ど全部採用して居るところであります。これで十條の綱領の内容が如何に特異性を有するかを知るべきであります。これら十箇條は無論、有産階級は承認致す筈がありません、するとマルクスは然らばこちらには覺悟があるといふのであります、それは革命であります、こゝでマルクスの主張する共產主義は革命的共產主義となり、その危険性は全幅の形を露出した次第であります。

「共產黨宣言」は最後に一段上の活字で「凡ての國家の無産者よ、結束せよ」と書いてあります。その活字を一段大きくしてあるところを見ればこれに深い意味があると見なければなりません、これは勞働者が一國の中で有産者に向つて階級闘争を行つても、却々、今日の賃銀制度を基礎とする産業組織から全部の勞働者を解放することは到底、出來ない。ついでには世界中、凡ての國家の勞働者が、手を握り合つて、凡ての國家の有産者に當るべきである、さうすればその目的を達することが出來ようと云ふ意味の言葉であります。是に至りまして、マルクス主義の有する煽動性はますますハッキリと現はれて來ました、マルクス主義にも搾取論にも、資本論にも煽動性が窺はれるのであります

が、この言葉に至つてそれが露骨に働くやうになつて来て居ります。

マルクス主義は此の言葉でインターナショナルと云ふものゝスタートを切るのであります。譯して「國際共產黨」といふべきであります。今日、ソ聯邦のそれは第三インターナショナルであります、これは一にコミンテルンともいわれます、これの取扱は次の四、過激主義の條下に譲ります。

### ロ、その批判

以上でマルクス主義の主なる點は述べ終りましたから、これからその批判に入ります、先づ唯物史觀に就いて申すことに致します。

唯物史觀は、先刻申しましたやうに、唯物論の立場に立つて、人間の歴史的発展を眺めると云ふと、何處を切つて其の斷層を見ても經濟事情が最も重きをなして居ると云ふ人生觀であります、我々は此の點でマルクス主義が物質過尊に陥つてゐると云ひたいのであります、別に言へば、それは人生の經濟方面を重んじ過ぎて居ると云はなければならぬのであります。いふ迄もなく我々は肉體を有つて居りますから、衣食住を輕んじてはいけません、我々が肉體の所有者であります限り決して物質を輕んじてはなりません、先刻、管子の言葉を引きましたが、倉廩が一杯になるといふと人は禮節を知つて來、衣食が足りるといふと、人は名譽、人は不名譽を考慮するやうになるのは事實ですから、衣食住と云ふものゝ値打は誰でも認めない譯には行きませぬ、けれども、人間は衣食住が足りればそれで宜いかと云ふと、決してさう云ふものではありません、衣食住と云ふは、結局、人間の生活の方法であります。衣食住が足りて、

それから我々は初めて人間らしい仕事を行ふやうになるのであります、即ち人格としての思想を抱き、人格としての行爲を爲すやうになるのであります、ですから、物質は重んじなければなりません、物質が足りれば、それで宜いと云ふものではありません、物質が足りればそれでよいと云ふならば、人間と動物との區別が付きませぬ、この點はマルクス主義の弱いところであり、人間界においては「物質を重んぜよ」といふことは許されますが「物質で満足せよ」といふことは許されませぬ。

こゝに一つ例を擧げて以上いつたところを明にさせよう、かの乃木大將の殉死と云ふことは、唯物史觀では到底説明が出来ませぬ、唯物史觀から行くと肉體は非常に大事なものであるのですから、切腹をするに云ふ事は逆も出来ない筈であります、乃木大將の殉死については先輩が説明して居りますが、私は斯う考へて居ります、大將には洵に崇高な武士的人格を以て此の世で長い間明治天皇に對して忠義を盡し奉つたのであります、所が長くも天皇には崩御遊ばされて、靈の世界に御出で遊ばされたのであります、それ故大將にはその靈の世界迄御供を申上げて、そこで此方の世界に於けると同じく忠義を盡し奉らうとせられたのである、だが靈の世界に行く爲には肉體が邪魔になりますから自ら己が肉體を亡ぼしたのである、結局、大將が殉死せられたのは、此の世の忠義を靈界まで延長せられる爲である、是が日本の武士道の嚴正な實踐であります、日本には「武士は食はねど高楊枝」といふ諺があるほどであります、此のやうな武士道の壯烈な實踐は唯物史觀では到底説明が付きませぬ、道、理想、忠義といふやうな肉體を亡ぼして尙且つこれが實踐を要求せられる日本の國民道德の大切な事實は、唯物史觀を以てしては到底説明が付かないのであります、凡そ經濟事情と云ふものは決してこれを輕んじては不可ないけれども、この世の中で大切なのは單に經濟事情

許りではない、第一、政治があります、道徳があります、宗教があります、藝術があります、ところがマルクスは是等には少しも考へ及ばないのである、これらの事柄が整はなければ、よしんば經濟が整うてゐても甲斐がありません、殊に道徳とか、宗教とか云ふ人の魂を支配するものを重んじないのは唯物史觀の大變な弱點であります、日本の或る歴史家には「唯心史觀」といふ主張があります。

元來、日本には固有の教として神道と武士道とがあり、外來の教で日本化したものには儒教、佛教、キリスト教の三があります、これら二道三教は皆是れ力ある精神主義であります、何故かといふに、これらは何處迄も精神を重んずるからであります。神道の敬神、武士道の忠節、儒教の仁義、佛教の慈悲、而してキリスト教の愛はいづれも貴い精神的原理であります、精神主義の國、日本にマルクスの唯物史觀といふ物質主義が幅を利かすのは、日本人が精神主義の貴さを忘れた爲であります、今日でも晩くはありませぬ、我々は精神主義に目醒めなければなりません、帝大教授に承乏する者達がマルクス主義にかぶれて思想罪を犯し、牢獄生活をなすと云ふやうなことは、精神主義の國、日本の小ならぬ文化的汚點であります、私は滿堂の皆様が十分、精神主義に覺醒せられてその職責を完うせられんことを切望して止みませぬ、精神主義を外にして教育や教化は存しないからであります。

次に剰餘價値に就いて批判致します、今、試にマルクスに向つて、剰餘價値と云ふものは善いものであるが、若くは悪いものであるか、と質問するならば、彼は無論、それは悪いものであると云ふに相違ありません、何故ぞと云ふと剰餘價値は資本家、企業家が労働者から搾取するものであるからであります、いふまでもなく今日の産業組織と云ふものは、勞資兩者がキチンと分れて居ります、この事は日本でも外國でも變りがありません、そこで、資本家、企

業家は先程述べましたやうに、資本を以て工場を建て、機械や原料を買込み、それから労働者を傭入れて生産に従事させます、資本家、企業家はそれだけでは未だ充分でありませぬ、彼等はその經營の才幹を働かせて、成るべく儲かるやうに、成るべく損をせないやうに年中、考へて居ります、是が勞資分立の今日の資本の側の事實であります、然らば、労働者はいかにといふに、彼等には資本はない、工場もない、機械も原料もない、あるものは唯労働力だけである、しかし、労働力だけでは何うにもならぬ、徒手空拳では何物も造ることは出来ない、それ故労働が本當に労働たる爲には、何うあつても資本と云ふものがなければなりません、即ち労働者は資本家の資本によつて準備せられた工場に入り、機械や原料に手を觸れなければ、労働と云ふものは決して成立しませぬ。

さて、若し労働に對する報酬として賃銀が許されて居る以上、資本に對する報酬として、少くとも正當な剰餘價値は許されて宜い筈であります、勞資分立の今日では、一方に賃銀が労働者に對する正當な報酬であるならば、他方に正しい剰餘價値は資本家、企業家に對する正當な報酬でなければならぬ、資本家、企業家は儲ける爲に企業をするのですから、正しい儲けはこれを認めてならぬ道理はありませぬ、さればこの點に於けるマルクスの議論がどうも偏つて居ります、一途に労働者を庇はうとして、それだけ資本家、企業家を抑へるやうになつて居ります、かくいへばとて不正な剰餘價値は勿論不可せぬ、大體、複雑且つ深刻なストライキが起る所には、不正な剰餘價値を取るものがあるらしいです、ですから、私は剰餘價値そのものが全部宜しいとは申しませぬ、正しい剰餘價値は善く、不正な剰餘價値は悪いと云ふのであります、斯うなるとマルクスは書齋の中で、靜に經濟學の眞理を研究する學者ではなくて、街頭に躍り出して労働者の先頭に立ち資本家、企業家と階級闘争を戦ふところの戦士であります。

次に資本の批判に入ります、マルクスは資本は剰餘価値を積み上げたものであつて、資本家、企業家の勤勉、節儉の賜ではないと云ふのである、そしてその剰餘価値は企業家が労働者から搾取するものであるから、資本も従つて又彼等が労働者から搾取するものと云ふのであります、歐羅巴の中世に於ては、今日のやうな機械工業はございませんで、工業は小資本で經營せられ、農業も極く小規模であり、商業も亦極めて小資本で行はれたのであります、即ち當時は商工業、小農業、小商業が行はれたのである、當時の資本は經濟學上小資本と呼ばれて居ます、それが産業革命後、一部の成功した工業家に兼併されていはゆる大資本が出来たのであります、然らば中世の小資本は何うして出来たかと云ふに、工業家に致しますと、自分が資本家、企業家であると同時に労働者でもあつたのです、當時の工業家は資本家、企業家と労働者とを一人で兼て居りました、かやうな人は今日、日本の片田舎にも見當ります、自分が資本家、企業家であつて、同時に労働者であるならばそこに何うして搾取が行はれますか、搾取の行はれやうがありません、却つて其の工業家は何處迄も勤勉、節儉を致しまして、小資本を積んだのであります、歐羅巴の中世の小工業家の擁した資本は斷じて搾取の結果ではありません、全く彼等の勤勉、節儉の賜物であります、マルクスが、資本は搾取の結果であつて、勤勉、節儉の賜物でない」と云ふのは、所謂問ふに落ちず語るに落ちるものであります、彼は歐洲古今の經濟史を細かに研究した人でありまして一たびその大著「資本論」を讀んで見ても、又「經濟學批判」を讀んで見ても、殆んど毎頁の下部に、細註が書いてあるので分ります、こゝに於いて、學者としてのマルクスが益々怪しくなつて來るのであります、何故ぞといふに、彼は歐洲中世の經濟史上の事實を抹殺しようとするからであります、自分の論を主張するには是れ急なる餘り、經濟史上の事實を抹殺することは、學者としては斷じて許されませぬ、

若しマルクスが今日、存命であるならば、私は彼にこゝに來て貰つて、皆様の前で彼に質問して見たいと思ふのであります、何んな質問をするかといへば、「貴下が優ぐれた經濟學者であることは私の疾くに承知して居るところであります、若し貴下が本當の經濟學者ならば歐洲中世の經濟史上の事實を抹殺するやうなことは到底、出来ない筈である、所が貴下は「資本論」で、資本はこれを擁する者の搾取の結果であつて、勤勉、節儉の賜でない」と云ふが、歐洲中世の企業家は果して誰から搾取しましたか、妻子諸共、朝は早く夜は晩く迄働いて漸く彼等が小資本を有するやうになつたのではありませぬか、聽衆諸君の前で責任のある答をなして下さい」と私は云ひます、思ふに彼れの明答は期待する事は出来ませぬ、何うも此の邊りのマルクスは冷靜、公平な研究を生命とする學者でありませぬ、何うしても彼は労働者群の先頭に立つて、有産者に向つて階級戦を指揮する底の戦士であります、マルクス學の魅力に抵抗する事が出来ないで、それを盲信し、遂に實際運動に出た爲に刑餘の人になつたのは、その大學教授たると、大學、高等學校の學徒たるとを問はずこの邊に對して嚴正な批判的精神が働かなかつた爲であります。

次に資本と搾取との關係について少しく考察を試みたいと思ひます、中外の企業家には搾取をする者がないと云ふことは出来ませぬ、搾取をする者は日本にもあります、爲に當局からは戒告せられ、自分の使つて居る労働者からは、ストライキをされるのであります、さればといつて凡ての資本は搾取の結果であつて宜しくないと云ふ論は成立させぬ、何故かならば、資本の内には確に勤勉、節儉の賜物として出来たものがあります、又資本家、企業家が正しい剰餘価値を積んで出来た資本もあるからであります、ついでに資本と搾取との間にはマルクスが考へたやうに必然的關係はありません、横着な資本家、企業家の内には搾取をする者がありますけれども、文化國に存する

凡ての資本が搾取の結果であると云つては大なる間違であります、何故かならば、部分に眞なるもの、必ずしも全體に眞ではないからであります、搾取をした少數の資本家があればとて、又搾取から出來た資本があればとて、文化國の凡ての資本は搾取の結果であると云ふ論は論理上の誤りを犯すものであります、搾取其のものは決して善いことではないけれども、其の搾取がマルクスの疾呼する程、文化國の産業界に行はれて居ると云ふことは出來ませぬ、詰り、彼の搾取論は普遍妥當性を有たないのであります。

それから民主制の採用といふことは日本國に取りまして最も排撃すべきことでありまして、昨日、己に政治デモクラシーの批判の時に申した所でありまして今は繰返しません。

次に共産主義に移ります。是は歐洲思想史に徴しますと、己に古代希臘に行はれて居ります、又宗教的意味の共産主義は中世に於けるキリスト教界に行はれました、従つて共産主義全部が悪いと云ふことは勿論いはれませぬ、所がマルクスの力説しました共産主義はいかにも危険であるのであります、これを一般的に申しますれば、私有財産制度と云ふものは、人間の經濟上の本性にしつくり嵌つて居る制度なのです、そもく我々が汗を流し、膏を流して勞働に服するのは何う云ふ理由だらうか、蓋し其の主なる理由の一は、自分の働いて得たものは自分の所有となつて、國法が保護して呉れるやうになる、詰り、私有財産となつて、己れが費すことが勝手であるは勿論、その殘餘はこれを子孫に遺すことが出来るからであります、無論、これ以外にもあります、例へば嚴正な義務觀念も亦人の勞働に服する有力な動機であります、けれども、一般に人間の勞働の動機を考へれば、今申しましたところの私有財産の可能と云ふ所に存在するのであります、然る所此の私有財産制度を廢しまして、天下の富をすつかり搔き均して了つて、堂

々たる富豪も、亦赤貧洗ふが如き貧者も同じやうにして、一國の經濟状態を灰色の一色に塗り潰して了ふのは人間の經濟上の本性を無視することとなり、早いお話が、何んなに働いても、自分の勞働の成果は、自分だけの所有にならず、澤山働いた人も、少し働いた人も、否全く働かない人も、平等に物資の分配に預かることとなれば、働くのは詰らない、働くのは愚だ、となつて參ります、かやうな點から共産主義を考へると、それは第一に人間の經濟的本性を蹂躪し第二に國民を擧げて怠惰、放逸の輩にして了ひます、共産主義と云ふものはこれを國家に適用すべき經濟主義でありませぬ。

次にそれを更に我が日本に關係付けて考へて見ませう、日本は御承知のやうに、家族制度の國であります、この制度は、其の基礎を私有財産に有つて居ります、父が死ねば其の長子は家督相続と共に財産相続と云ふものを致して、一家の財産が子々孫々に傳つて行くのであります、それ故もしころつと私有財産制度を廢して了へば、家族制度は勢ひ動搖して來ます、家族制度が動搖すれば、日本國其のものも亦動搖すると云はなければなりません、此の意味からも我々は共産主義を採用することは到底、出來ないのであります、そこで日本では帝國憲法、第二十七條に「日本臣民ハ其ノ所有權ヲ侵サルルコトナシ」とあつて、私有財産の權利を帝國憲法が認めて居ります、是亦我々が共産主義を考へる時に日本國民として知らなければならぬことであります。

それならばソ聯邦では共産主義が何うなつて居るか、その詳しい事は四、過激主義の條下に譲ります。ニコライ・レニンと云ふはソ聯邦を建設した中心人物であります、彼が露國の政權を握つて共産政治を致しますや、第一、彼に反抗したのは農民でありました、何故彼等が反抗したかと申しますと、レニンは納穀法と云ふ法律を作りまして、一ヶ



年食べるだけの穀物をば農民が取ることを許し、其の残餘は政府の方で引上げて了ひました、詰り、剩餘穀物の貯蓄を許さないであります、そこで農民が彼に反抗したのであります、レニンは優ぐれた政治家でありましたから、農業國露西亞の政府が農民に反抗されては政府を預かる譯に行きませんため、直に共產政治を緩和して、或る程度迄資本主義を取込むことゝ致しました、之を新經濟政策と呼びます。時に一九二二年であります、所が彼が果てましてから一九二四年に政府は大工業の國家經營を廢し又土地の貸借を公然、許し、益々共產制度が緩和されたのであります、之を新々經濟政策と云ふのであります、更にその翌、一九二五年政府は商人に向つて保護政策を採り、一人に最高額五十萬留の私有財産を許可しました、之を新商業政策と呼んで居ります、一人で五十萬留所有することが出来れば澤山であります、之に由つて見るといふと、共產主義は嚴密な意味では、同主義の郷國たるソ聯邦に於いても今日、行はれておません、況してそれ以外の何の國にも共產主義と云ふものは行はれて居りませぬ、今日の露西亞には共產主義と資本主義とが雜居して居るのであります、これは他でありませぬ、共產主義は先刻申しましたやうに人間の經濟的本性を蹂躪する主義であるからであります、今日、我國に共產主義を行はふとする者の如きは、白日の夢を見て居る者であります。

次には階級闘争に就て申し上げます、是は多くの言葉を費やす必要はありません、或る程度の階級闘争と云ふものは大抵の國には存したのであります、日本でも徳川時代に農民一揆と云ふものがありました、是は一つの階級闘争と見られます、又マルクス主義が日本に傳りましてから、水平運動と云ふものが起りました、是も一つの階級闘争と見れば見られませう、けれども、階級闘争と云ふものは、これを爲すべきであるとして云つて社會一部の同胞に勧誘すべき

事では斷じてありません、よしんば、農民一揆があつたとしても、水平運動があつたとしても、又今日の歐米の資本國に大規模のストライキが行はれたとしても、それを労働者をして今日の産業組織から解放させる爲の戰術であると云つて、これが實行を奨励すべきでは斷じてありません、元來、闘争と云ふものは、家庭で行はれても不可せぬ、學校でも不可せぬ、その他もろくの自治體でも不可せぬ、凡べて闘争と云ふことは、人間の共同生活上、決して望ましいことではありません、況や之を一國の有産階級を亡ぼす爲の戰術として労働者に勤むべきものでは斷じてないのであります。

我々の共同生活は、その小さいものでも、亦大きいものでも融和と云ふことが尤も必要であります、家庭では教育勅語に仰せられてある通り「夫婦相和」し、學校では教師と學生が能く融け合ひ、自治體でも指導する人と指導せられる人とが融和し、而して國家でも治者と被治者と融和し、こゝに初めて大小の共同團體が存立もし發展もするのであります、いはゆる「和を以て貴し」とするのは此の理由に基くのであります、ですから此の社會にいろくの共同生活が行はれて居ること其のことが、已に階級闘争の行ふまじく、階級融和の行ふべきことを教へて居ります、階級融和なくして、世に共同生活がある筈がありません、マルクスは「共產黨宣言」で「是迄の凡ての社會の歴史は階級闘争の歴史である」と云つて居りますが、それは過ぎて居ります、是迄の凡ての社會の歴史は階級闘争の歴史であるから、今日我々も亦階級闘争を行ふべきだと云ふのは間違つて居ります、「是迄の凡ての社會の歴史は階級闘争と同時に、階級融和の歴史である」といはねばなりません、彼れの言は大變な片手落ちであります、最も望ましきは闘争ではなくして融和であります、この程度のことが判らないで階級闘争論に動かされる者の如きは、餘程、思慮に乏しい

人と見なければなりません、我々は決して階級闘争論で煽動されては不可せぬ、何うも日本人の一部には此の弱點を有つて居る人があるやうに思ひます、さうして思想運動に出て終に捕へられて牢獄に撃がれ、初めてその非を知るのであります、獄窓の下に後悔する程ならば、初めから煽動に乗らないことが尤も賢明であります。

最後のインターナショナル即ち國際共產黨の出發は、四、過激主義の條下で、割合に詳しく述べまして、其の後に批判いたす方が皆様の御理解に一層御便利でございますから此處では省略致します。

#### 四、過激主義

##### イ、その發生史と主張

過激主義の中堅となつて居る思想は、前述のマルクス主義であります、ですから、マルクス主義を講じ終つた後に、過激主義が何う云ふ道程を経て發生したかと云ふことを申しますのが正當な順序であると存じます。

元來、歐羅巴露西亞は昔から専制政治の行はれた國であります、既に十三世紀頃から暴君が出現して、人民を虐げたのであります、例へばイヴァン四世と云つた皇帝は有名な暴君でありまして、人民に向つて苛斂誅求をしましたのであります、此の人は激しい性格の所有者でございます、單り國民に辛く當つた許りでなく、自分の子にも辛く當りたうとうそれを殺してしまひました、それから「苛烈王イヴァン」といはれました。

同國の最後の朝廷をロマノフ朝と申します。是は三百十四年間續きましたが、此の朝廷も亦専制政治を致したのであります、その最後の皇帝はニコラスと云ひ、皇太子時代に日本に來遊されて、滋賀縣大津で負傷された方でありました。このロマノフ朝の政治の最も大きい缺陷は、態と國民の教育を怠つて民を愚にし、そこに専制の筈を振つたことでもあります、此の遣り口は支那にも亦あつたのであります、支那の政治史に「愚三黔首」とあるはこれを指すのであります、支那の専制君主は「黔首」即ち人民を愚にして、専制政治を行つたのであります、即ち兩國共、國民の教育と云ふものを怠つて民を無學文盲にして置いて、それに悪政を施したのであります。

元來、露西亞國民の國民性の一つは憂鬱なことであります、是は露西亞人と話をしましても、又露西亞國を旅しましても、或は又露西亞の文藝を見ましても直ぐ判ることでもあります、實際、露西亞人には憂鬱性とも云ふべき性質があります、その由つて來る所を考へますと、其の一つは風土であります、地理的環境であります、其の二は上述の専制政治であります、同國の風土はいかにも寒氣が甚しく、その上、冬の時期が長い、従つて太陽の光線が稀薄で温度も亦低いのであります、是は多少は人間の力で抵抗することは出來ますが、根こそぎこれを除去することは逆も出來ませぬ、所が之に加へて同國には永く専制政治が續いたのでありますから、露西亞國民と云ふものは、自然的にも亦人爲的にも、憂鬱な國民性を所有するやうになつたのであります。

又、露國民の第二の國民性には殘虐性とも云ふべきものが認められます、例へば世界大戰前、屢々行はれたユダヤ人の虐殺と云ふ事實に徴しても判ります。キエフに於けるユダヤ人の虐殺の如きは一時に何千人と云ふ老若男女がやられました、この時は英國から抗議が出來ました、最近、スターリン政権下の肅正事件は皆様の御承知の通りであり

ます、此の殘虐性は何處から來たかと云ふに、私は矢張り叙上の惡政と云ふものに主なる原因があると思ひます、政治が亂暴であれば何うしても人民の頭腦に支配階級に反抗し、怨嗟する殘虐な精神を養ふことになると思ひます、由つて見れば惡政と殘虐性との間には緊密な關係があります。

上述の如く、ロマノフ朝は民を愚にして置いて專制政治を致しましたが、併し、如何に無學文盲の輩でも、善き政治と悪い政治との區別は付く筈であります、爲に自然と人民の頭腦に君主を恨み、政治家を恨み、支配階級を恨む、と云ふ風な穩かならぬ感情が養はれて來たのであります、この勢を看取しました君主や政治家は何處迄もそれを押付けまして、兵器等は決して人民に持たせませんでした、爲に人民の方では支配者に對して表立つた抵抗は出來ませんで、申さば無抵抗の抵抗とも云ふべき態度を續けました、同國の文豪の一人トルストイは無抵抗主義と云ふものを唱へたのであります、即ちそれであり、結局、人民の不平不満の心の捌け口がないのであります、ですから、それが次第に鬱結して終には爆發する外はないのであります、一八八一年アレキサンダー二世の暗殺が即ちこれであり、是はニコラス帝の祖父であります、ニコラス帝は勞農革命の爲にエカテリンブルグで虐殺されました、アレキサンダー二世暗殺の徒黨は五人でありました、而かも其の中の一人は女子でございます、以てその大體を想像するところが出來ます。

かやうに段々、世間が險惡になつて參りましたから、本當に國を憂ふるほどの人は胸に手を當て、且つ憂ひ、且つ悲しみ、何うにかしてこれを救はねばならぬといふやうに考へて來ました、かく國を憂へました學者の一人にブレフアノフと云ふ者がありました、是は經濟學者であつてマルクス學の權威者でありました、彼は國家の前途を憂ふる餘り深く考へました、その擧句、考へ付いた案はかやうでありました。今や社會の上層は人民の怨府となつて居るから、國家救済の大任を託する譯に行かない、然らば中層は何うかといふに、中層らしい中層は帝國露西亞にはありません、何故ぞと云ふと、何の國でも中層と言ふものは人民に教育を施して、出來るのである、尤も上層から降つて來ることもあり、兎に角、中層の成立する爲には、人民に教育を加へなければなりません、日本の歴史で、武家時代には社會の中層は武士階級であります。武士階級にはいかにも徹底した教育が加へられた筈であります、所が露西亞では今申しました通り、教育を人民に施さないから中層らしい中層は出來ませぬ、殘る所は下層である、所が下層は唯今言つたやうに無學文盲で何うにもなりません、何うにもなりません、これ以外には國家を救ふ人は求められないのであります、そこで、彼は先づ労働組合を造つて下層民をこれに這入らせてその經濟的覺醒を促し、漸く機運が熟するを待つて政黨を造つて、政治的に彼等を覺醒させようと言ふ案を立てたのであります、ブレフアノフはマルクス主義者であるが、學者であるから、いかにも穩當な案を立てたのであります。

かくして彼は労働組合を造りましたところ、下層民の多くがこれに加入しました、一八九八年に至り、社會民主労働黨と言ふ政黨を造りました、彼が政黨の旗擧げを致しますや、國家を憂ふる程の人は諸方から、彼れの所に駆け參じたのであります、當時は未だ忠君愛國の士が露西亞にあつたのであります、露都の大學生も書物やペンを放つて、この黨派に加入した程であります、當時この黨派に競つて加入した一人にニコライ・レニンがいました、レニンとは勞農革命の中心人物であることは前に述べた通りであります、こゝで一吋傍徑に入ります、私は曾て東京市の依頼を受けまして、一二の同僚と共に、小學教師の短期講習會に出席したことがあります、其の時同市の教育局長某氏が

「貴下方に御願ひしますが、講習員の中には程度の低い人もありますから、餘り高尚なことは言はないで極く大切な事の大筋を漏れなく言ふやうにして下さい」と言はれました、その時、局長は更に言葉を續けて「實は講習志望者を取捨する爲、私が簡単な口頭試問をやつて見ました、さうして一人の若い教師に『レニンと言ふは何か』と聞いて見ました、すると教師は頻りに考へて居ましたが、『それは毒藥であります』と答へました（笑聲）、マア此の程度の人も居りますから、私は特に今申上げたやうな註文を先生方に致すのであります」と言ひました。成程或る意味ではレニンは毒藥とも言はれますか知らんが、小學教師が本當にレニンを毒藥と思つて居るのでは、特に思想上、混雜してゐる今日、教育者としての職責を完うすることは出来ないと思ひます。無論、教師の頭腦中の全内容を子供に傳へる必要はありませぬけれども、現代思潮の黒潮中に呼吸してゐる教育者は勞農革命の中心人物たるレニンの眞の認識がなければ駄目であります。

さて、お話の本筋に立還りますが、レニンは、初めはブレフアノフの部下の一人として忠實に働いたが、兎に角、非凡の人でありましたから、漸くブレフアノフの部下たることが出来なくなりました。ブレフアノフは學者ですから何處迄もその意見が着實で、その實現の方法も亦今述べた所で御想像が付くやうに堅實でありました、所がレニンは東洋豪傑と言つたやうな肌合の人であつて、親方氣質と言つたやうな所もあつた人であり、又非常に意志が鞏固で、何處迄も實際の革命家でありました、敢へて暴力革命を高唱したマルクスの思想に夙に沈潜しまして、ブレフアノフがマルクス學者であるやうに、レニンも亦マルクス主義者でありました、何方も充分にマルクスの思想を頭腦の中へ蓄へて居た人でありますが異なるところがあります。ブレフアノフは思想家としてのマルクスを能く知つて居ま

したが、レニンは革命家としてのマルクスに深く私淑して居ました、ですからブレフアノフとレニンは何うも永く事を共にすることは出来ませんでした。一九〇六年、第三回社會民主勞農黨大會を瑞典の都ストックホルムで開きましたが、こゝで終に兩雄が袂を分つやうな事件が突發したのであります。

當時、社會民主勞働黨は大分、盛んになつて參りまして、これが背景をなしてゐた勞働組合も亦大分、勢力を有つて來ました、そこで、件の大會の議案の一つは中央委員會と言ふものを作りたいが、果して何の程度の權能をこれに附與すべきかと言ふことでありました、すると穏和派は勞働組合が黨の基本なのだから、それ〴〵の組合に相當の權能を附與すべく、中央委員會には僅かの權能でよろしいと主張した、所が急進派はそれはいけない、宜しく中央委員會に絶對權能を附與し、これを急先鋒として、機會だにあれば政府に肉迫し、直に政權を獲得すべきであると主張しました、であるから此の二派は全く相容れないことゝなつたのであります、終りに決を投票に問ふや、急進派の方が多數を占めて勝利を得ました、この急進派を露西亞語でボルシエヴィキーと言ひます、譯して多數派と言ふべきであります、これに反して、穏和派は少數派でこれをメンシエヴィキーと言ひます、レニンはボルシエヴィキーの首領で、ブレフアノフはメンシエヴィキーのそれでありました。ボルシエヴィキーの有つて居る急進思想をボルシエヴィズムと云ひます、譯してこれを過激主義と云ふのであります、直譯すれば多數主義であります、かくして社會民主勞働黨は二に分裂して了ひました。これからレニンはマルクスの革命的共產主義を堅持しまして、機會さへあればこれを實際に施し、露國の政權を握らうと考へたのであります。

これが爲にマルクスは一八六四年、第一インターナショナルと云ふ團體をロンドンで作りました、これが根據はマ

ルクスとエンゲルスとの共著に係る「共産黨宣言」の結びの言葉たる「凡ての國家の無産者よ、結束せよ」にあるのであります、是は一にコミンテルンとも云はれます、日本語に譯しますと、國際共産黨であります、所が第一インターナショナルは仲間割れが起りまして、たうとう解散することになつたのであります、第二インターナショナルは一八八九年、パリで結成されました。是が一九一四年の世界大戰の頃迄つと存続しましたが、世界大戰となりまするや第二インターナショナルの穩和派は何うも今度の大戰は、容易ならぬ戦争だ、若し自分等の國が負けたら大變である、今度だけは自分等は政府に加勢して自分等の國を勝たせなければならぬと云ふやうに考へました、詰り、第二インターナショナルの一部は大戰を契機として、國家社會主義者となつたのであります、國家の大事に面して、思想團體が大角度の轉回をすることは敢へて珍らしいことではありません、そこで第二インターナショナルの内、レニンを首領と仰ぐ急進派は承知しません、彼等穩和派が國家社會主義者に墮落して了ふとは何たる醜態であるか、自分等は何處迄もマルクス主義に生きて、世界の労働者の結束を圖らなければならぬと考へたのであります。爲に此の急進派は一九一五年、瑞西のチンメンワールドと云ふ所に會合して、第三インターナショナル結成の協議を致しました、是は日本の共産黨の歴史では山形縣五色温泉の會合に當ります、當時、五色温泉の旅館ではそれを東京の商人の集會と思つたさうであります、此の時、世界大戰はその眞つ最中でありまして、彼等急進派は結束を固くし、最善の機會を擲へてその宿望を遂げようとしたのであります、こゝに勞農露西亞誕生の機運が近づいて來たのであります。

大戰の初め、露國の内閣はケレンスキーと云ふ者が總理大臣でありました、彼は辯護士上りの人でありまして雄辯家ではあつたけれども、軍國露西亞を背負つて立つ程の人物ではなかつた、いかに辯論に長けてゐても本當の鐵腕を持有せぬ以上、非常時に善處することは出来るものでありませぬ、炯眼なるレニンはどうしてこれを見逃しませう彼は所謂虎視眈々、巨眼を睜つてケレンスキー内閣の弱點を狙つて居つたのであります、露西亞の獨逸と戦ふや、初めは勝ちました、ワルシヨウの勝利はいかにも鮮かでありました、併しそれ以後は連戦連敗でありました、そこでレニンは突然、露國の政治舞臺の正面に踊り出まして、ケレンスキー内閣に向つて色々な難題を申込みました、其の一つは、戦争の即時中止でありました、負け戦をして居て戦争を中止することは、決して出来る筈のものではありません、何故、戦争の即時中止を要求したかと云ふに、レニンの肚は斯うなのである、今度の大戰は帝國主義の國家と國家とが歐洲中原の鹿を争ふ戦争である、ついては何方が勝つても、負けても我々無産者には何等の利益もないといふのであります、そこで、彼はケレンスキー内閣に向つてこの無形の爆弾を打ちつけたのであります、案の定、ケレンスキーは困りました、そして遂に佛蘭西に逃げて了ひました、一國の總理大臣ともあらう者が、自國ののるかそるかといふ戦争の眞最中、外國に逃げ去ると云ふことは、實に言語道斷のことでありまして、總理大臣と云ふは餘程確りした人を任命して置かないと不可せぬ、そこでレニンはマンマと内閣を乗取つて、かねての素志を達しました、實に是は一九一七年のことであります、それから彼は息もつかせず、勞農革命を斷行致して、皇室ロマノフ家を倒し貴族、富豪、軍閥、僧侶等を或は倒し、或は外國に放逐したりしまして、露西亞の主なる都市に共産政治を布いたのであります、是が即ち勞農革命であります。マルクスの夢がこゝで現となつた譯であります。

勞農革命の二つの側面を有つて居る、其の一つは政治的側面である、即ち無産者が政權を握つて、無産者の獨裁政治を實現したのであります、是はかね／＼マルクスの主張した所であります、即ち彼は先づ第一着手、無産者を資本

主義的産業組織から解放し、若し事情が許せば第二段に政權を握るのである、是がマルクスの理想でありました、所が今やマルクス主義を固く信じて居たレーンがこの理想を實現したのであります、その二は經濟的側面であります、即ち只今申しましたやうに主なる都市に共産政治を施して、動産、不動産をすつかり國有にしてつたのであります、この革命たるや全く破天荒のものであります、世界に人類が現れてこの方、かやうな抜本塞源的革命と云ふものは、何處の國の國民も經驗しなかつた所でありまして、その由つて來るところを考へて見れば、帝政露國の専制政治に對する人民の反抗であります、實に帝國露西亞は過激主義の温床でありました、こゝに至つて第三インターナショナルはハツキリその形を具へて萬人注視の的となりました、その首領レーンは自分等の革命を何處迄も維持し、ソ聯邦を何時迄も存続させようとした、そして彼やトロツキーを初めその幹部がこれが方法を考へました、その結果、案出したのは世界の主なる國家を赤化して、ソ聯邦がその牛耳を取ることである、斯うすればソ聯邦は萬々歳であると考へました、一九一九年レーン等はモスクワに會し、コミンテルン創立宣言を發しました、是から歐羅巴に、亞米利加に、東洋に、赤化の魔の手を伸ばしたのであります、所謂世界赤化政策なるものが是れであります、今日支那の政治家に何人かの過激主義を信する者があり、又相當な人數の共産軍のあるのは、支那に向つて赤化の魔の手の及んだ結果と見られるのであります、又日本に數回の共産黨事件が起つたのも、同じく日本に赤化の魔の手が及んだ結果と見られるのであります、過激主義は世界人類の敵であります。

## ロ、その批判

これから過激主義の批判をすることに致します、先づ革命について申します、過激主義を信するものは、革命的思想家マルクスの精神を受け継ぎまして、革命を以て自分等の理想を遂げる方法と考へ、過激派はこれを露國に於いて實行したのであります。さて革命と言ふことは、言ふ迄もなく一つの破壊であります、政治的破壊であります、我々はこの意味で之を是認することは到底出來ないのであります、我々の生きつゝある人生の本義は建設であるからであります、我々が毎日遂げつゝある生活の本當の意義は建設であります、我々は衣食住に依つて生の物的方面を建設し、もろくの精神科學を初め道德、藝術、宗教等に依つて其の心的方面を建設するのであります、現に此の講習會の如きも皆様の生の心的方面の建設の有數な方法であります、さて、人生の一つの分野に政治がありますが、それは國民の安泰を圖ることを以てその目的とするのであれば、その本義は固より建設であります、この故に政治的破壊たる革命は人生の本義に悖るものと言ふべきであります、是が我々がどうあつても、革命と言ふものを是認することの出來ない理由であります、特に我國は畏くも皇室の政治の御方針を伺ひ奉ると言ふと、國を建て、此の方徳治と言ふものが行はれて今日に及んで居るのであります、而して人民は此の御方針に感激しまして、何の時代にあつても皇室に對し奉つて、忠誠を抽んじて居るのであります、君は長へに仁におはし、民は長く忠であります、君の仁と民の忠とが日本に君民一體と言ふ國體美を造り出して居るのであります。我國に未だ會て一たびも革命と言ふものゝ起らないのは、全く此の君民一體の國體美に基くのでございます、ついでには我々日本國民は革命と言ふものは斷々乎としてこれを排除しなければなりません、獨逸にベルンシュタインと言ふ老政治家がございしますが社民黨の首領であり、彼は年末マルクス學を檢討致しまして、其の權威者の一人であり、確にマルクス主義者と申しても可い程の人で

あります、此のベルンシュタインがマルクスに就きまして、色々と自説を發表して居りますが、その内にマルクスの思想體系中、最も大なる誤りは革命の主張である、これこそはマルクスの思想を臺なしにしてしまつて洵にマルクスの爲に惜しむべきである、マルクスを亡ぼすものは、マルクス自らであると、言ふ風に言つて居ります、是は我々の参考に値する説であります、日本に數回、共産黨事件を惹き起しました我々の同胞は、果してこのベルンシュタインの説を知つて居るであらうか。

昨日、私は第三インターナショナルが世界赤化を企て、その魔手を歐羅巴にも、亞米利加にも將又東洋にも延して居ると言ふことを申しました。今此の赤化に就いて、申してみたいのであります。

元來、世界大戦中、露西亞は聯合國即ち英、佛、米三國の側に加はりまして、獨逸に向つて戦を宣したのであります、この聯合國の申合せでどの國も、獨逸と單獨講和を爲さないことを約束しました、所が露西亞の政權が過激派の手に移つて、ソ聯邦となりますや、此の約束を無視して、獨逸と單獨講和を致し、他餘の聯合國をして啞然たらしめたのであります。ソ聯邦と言ふものは、此の時から國際信義を辨へない國家となつてゐたのであります。ソ聯邦の第二の大膽な行爲は、帝政露國政府が外國から借りました金、即ち外債を破棄したことであります。實際、ソ聯邦政府は平然、國債破棄を斷行したのであります、日本でも只今以てソ聯邦に對して二億圓程の債權を有つて居るのであります、支那に於ける吉澤カラハン協議に於きましても、又我が國に於ける川上ヨツフェ協議に於きましても、是が協議事項の一つになつたのですが、ソ聯邦政府は決して債務を履行せないのであります、ソ聯邦政府は前朝の政權は自分等が握り、而して、その債務は破棄して毫もその良心を痛めないであります、是が同政府の第二の國際信義の蹂

躪であります。これら二つの事實から考へても、ソ聯邦と言ふものは國際信義を少しも解せず、國際信義を蹂躪して顧みない國であります、斯様な國が世界赤化を計畫しまして、自國の革命を維持しようとするのは、少しも異しむに足らないのである、世界赤化と言ふことは、斯う言ふ國の行爲としては寧ろ自然的事である。

世界赤化と言ふことは、大なる國際的不正義の實踐であります、國際道德の一つに國際的正義がございますが、ソ聯邦の如きはそれの反對の國際的不正義を行ふ國であると言ふことが出來ます、此事は、色々の看點から立證することが出來ます、其の一つは我々が拵へて居る國家と言ふものは、決して一朝一夕に出來たものではありません、どの國家でも國民が大に骨を折つて、多くの年月の間に拵へたものであります、其の國家を赤く染めて其の國民の國家生活の歴史を汚さうと言ふのですから、是は明に國際的不正義の實踐でございます、又或は凡そ人間をして人間たらしめるもの、一つは國家であります、といふは國家は國民の統一を圖り、これが教育に當るからであります、この國家を臺なしにしてしまふと云ふのでありますから、是亦國際的不正義の實踐であります、更に他の事が考へられる、我々が人間らしいと云ふ事の一つの理由は、我々が文化を拵へてそれを楽しみ、いはゆる文化生活を生きるところにあります、文化なくして何の人間生活があらませうか、文化の反對は云ふまでもなく野蠻であります、此の文化は、國境に依つて保護された人民、即ち國民が十分に自分の特異性を働かせて、創造するものであります、國境なき人民即ち國民でないものがこれまで果してどういふ文化を創造しましたか、到底それを考へることは出來ませぬ。然るに、ソ聯邦の世界赤化政策は此の國境を無視するのですから、これは取りも直さず世界の夫々の國家の文化を滅ぼしてしまふことになり、是亦大なる國際的不正義の實踐であります、この點から云へば、ソ聯邦は世界の凡ての文化國

の共同の敵でございます、昭和十一年、日獨防共協定の出来たことは、洵に妥當なことでありませう。

次に轉向に移ります、我が同胞共産黨員中には轉向を致したものがありません、轉向と云ふことは一旦、共産主義に共鳴して、日本で共産黨事件を惹き起しましたものが、遂にその非を悟り共産主義を放棄することを指すのであります、昭和九年日本共産黨の巨頭達が刑務所に於いて、轉向を申出たのであります、此の時、文書を當局に差出し、自分の同志にこれを示してくれるやうにと頼んだのであります、當局が其の文書を調べてみました所、同志に示しても宜しいことが判つて、これを同志に示しました、其の結果、約六百名のもものが轉向致しました、日本共産黨の幹部の或るものは、態々モスクワ迄出掛けて行きました、その地の第三インターナショナルから日本赤化の方法を指示され、歸朝の上、數回、共産黨事件を惹き起したのであります、その彼等がどうして轉向するやうになりましたか、思ふに彼等は先づ檢舉されました、刑務所の人となつたのである、刑務所に於いては、宗教書、道德書、歴史書等はこれを読むことが許されます、又彼方は此方よりか自分の時間が澤山あるらしいのでありますから、彼等は「我とは何ぞや」と云ふやうな、眞剣な問題をトツクリ考へる暇があつたやうに思はれます、そこで彼等は落着いて宗教書、道德書、歴史書等を繕いて自づと新しい良心に目覺めたのでありませう、共産黨員の多くは大抵、頭腦が宜いのであります、頭腦の宜しきものが、古への聖賢や學者の遺された教訓に親しむのでありますから、彼等の中には自然、本來の自分に覺醒するものが出て来る筈であります、さて、一旦新しい良心に目覺め、本來の自分に覺醒して萬邦無比の日本の國體を深く考へ、斯様に崇嚴微妙な我が國體をば、專制政治で終始して過激主義の温床であつた帝政露國を覆した危険思想を以て覆さうとするのは如何にも思慮のない事であると云ふことが判つたのであります、過激主義を以て我

が君民一體の國體美を汚さうとするが如きは不合理の甚しいものであるといふ事が判つたのであります、凡そ理智的生類としての人間と云ふものは、自分が誤つてゐることが判ると云ふと平然として居られないのであります、それですから彼等は轉向を申出たのであります、轉向は一旦、己が非を悟つた危険思想の持主が自己の矛盾を解除する方法であります、彼等が此方に居て殆んど盲目的に共産主義を信じて、祖國赤化の實際運動に出て居る間は、或は餘りにその事に熱心であつた爲、又或は官憲なり同胞なりの目を暗ますことに全力を傾けてゐた爲め、自國の純美なる國體を再検討するとか、自分自らを再吟味するとか云ふ暇はなかつたのでありませう、所が、刑務所生活は此方の生活とは打つて變つて精神にも肉體にも相當、餘裕を生ずるものである、そこで彼等は以上述べたやうな經過の下に轉向するやうになつたのであります、共産黨の巨頭の一人は昭和九年に於ける公判の法廷に於きまして、下の様なことを述べて居ります、(一)日本の國家の統一と云ふものは、如何にも鞏固である、(二)日本の人民の國家生活の訓練は長い間行はれて居る、(三)日本の人民の社會生活には内面的緊密性がある、(四)日本國の經濟的條件は大きな存在である、終りに(五)日本の國民の精神生活は、如何にも優れて居て、其の上、彼等は實行力に富んで居る、

如何に彼等が本當に祖國日本を省み、如何に彼等が本當に自分そのものを省みて、是迄自分が取つた態度の全く誤つて居たことを自覺したかと云ふことは、これら五箇條を見て明であります、由て考へますと、彼等は依然、日本人でございました、一時は大層な間違から共産主義を信じて、此の大御國を赤化しようと大それた考を起したのですが、一皮剥いで見れば、彼等は矢張り、日本人であつたのであります、日本人は共産主義と云ふものを信じて祖國を赤化するにはどうも不適當な國民であります。



## 五、フアッシュム

## イ、その活躍と特色

フアッシュムといふ言葉は、伊太利語のフアッシュヨと云ふ言葉から出て居るのであります。フアッシュヨと云ふ言葉は「結束」と云ふ意味を有つて居る、是は伊太利で古い歴史を有つ言葉でございます。昔、ローマ時代に楡と樺との棒を何本か束ねたものゝ中に一本の斧を入れ、これを軍隊の先頭に旗印として掲げて行進したと云はれて居ります。其の楡と樺との棒は犯罪者を鞭打つ爲であつて、斧は重罪犯人を死刑に處する爲に用ひたさうであります。それです。から「結束」とは楡と樺との棒の結束と云ふ意味であります。所が段々時代の進むと共にその意味が轉化しまして、今日は精神的結束、即ち何人かの人が固く規律を守つて、一の團體を拵へることになつたのであります。今日の伊太利のフアッシュヨ運動家は此の轉化した意味の結束を経験しつゝあるのであります。これから取扱はうとするフアッシュムは其のフアッシュヨから出たものであります。ですからこれを直譯するならば、フアッシュムは結束主義といふべきでありますけれども、これでは今述べたフアッシュヨの歴史を知らぬものには、全く通じませぬ爲に、今日はフアッシュムの内容から譯語を作つて國家社會主義とか國粹社會主義とか呼んで居ります。或は獨裁主義と云ふてもよろしいと存じます。

先づフアッシュムの發生の検討から致しませう、大戰前の伊太利の議會政治は、如何にも腐敗してゐました。選挙干渉は行はれ、投票の賣買も亦行はれ、暴力團は跋扈し、政治犯人が頻に現はれました。されば當時の伊太利の政治状態は東洋の某國のそれに似て居ります。一九一四年大戰が勃發するや、どう云ふ風にこれを取り切ると云ふことが、伊太利の支配階級の頭腦を悩ました問題でございました。加ふるに伊太利は人口過剰の國でありまして、どうしても土地が欲しい、又資源も欲しいのでございます。是亦東洋の某國に似て居るところであります。

そこで、段々と伊太利の指導階級の中に、我々は今度の大戦を利用して、先づ政治上の腐敗を除き、次に人口問題の解決を圖らねばならぬと云ふ考へを起す者が出て來たのであります。所が當時無名のムツソリーと云ふ社會主義者は、社會主義の立場から戦争に反対し、伊太利は決して大戦に参加してはならないと、云ふ論を發表しました。然るに幾何もなく彼はその態度を豹變して大戦参加論を公にした爲め、彼の屬する社會黨を裏切つた廉で同黨から除名されました。由つて彼はミラノと云ふ所に行つて「伊太利國民」と云ふ新聞を發行して、益々大戦参加論を主張したのでございます。

彼は千九百十五年フアッシュヨと云ふ團體を拵へ、その力で以て伊太利を救はなければならぬと云ふ議論を發表しました。是が今日のフアッシュヨのスタートでございます。程なく此の運動に共鳴するものが増加して遂に一箇年後には九千人となつたのであります。先刻申しましたやうに、當時英、佛、米三國の側を聯合國といひ、これに敵對した獨逸と奧地利とを同盟國と云ひましたが、其の時、聯合國も亦、同盟國も伊太利を自分の方へ引入れようとして熱心に運動しました。伊太利は初めの中は何方にもつかず中立の態度を取つて居りましたのですが、到頭、決心の臍を定めて聯合國の方に加はつたのであります。此の時、伊太利は暗黙の間に聯合國に向つて一旦、戦争が終れば、聯合國

は伊太利に、アドリヤチック海の制海權を許し、又阿弗利加で植民地を獲得させて欲しいと云ふことを認めさせたのであります、そこで、伊太利が聯合國の一國として特に獨逸と戦ひ、随分犠牲者を出しました、即ち死んだものが五十萬、傷いたものも五十萬でありました、ムツソリーニ自らも義勇兵を志願して許され、第一線に出て戦ひましたが、カルーソーと云ふ所の戦で傷いて、野戦病院に收容されたのであります、千九百十八年、聯合國の勝利となつて本戦が終りました、爲に伊太利國民は先刻申しましたやうにアドリヤチック海の制海權と、阿弗利加に於ける植民地とを得るは勿論、その他、戦時國債を償還する爲に、償金の分配に與ると云ふやうな大きい期待をかけて居ました、所が佛蘭西ヴェルサイユ宮の平和會議の結果は少しも伊太利の期待が報いられない、僅かチロール地方、ヴェニス、東方イストリヤ半島を分配されただけでございます、爲に伊太利は國を擧げて、非常に失望しました、何に致せ、戦地からはどん／＼戦争した將兵が歸つて来る、巨額の軍事費は、何處からも出所がない、それに加へまして、北部伊太利の工業地帯には過激主義者が赤化運動を始めて掠奪をしたり、放火をしたり、殺人行爲に出たり、或は工場や會社を占領したりしまして、伊太利は兎もすると、帝國露西亞のやうに、革命が起りさうになつて來たのであります、そこで熱血男兒ムツソリーニは到底、黙つて居られませぬ、當時彼れの同志は一萬人以上に上つたのでありますから、これを率ゐて祖國の危機を救はうと決心し、一九一九年、ミラノーに百人程の腹心の徒を集めて、祖國救済の協議に及んだのであります、この計畫は諸方に響いて、終に一萬七千人の團體が出来ました、その時、彼等は何れも黒シャツを着て、軍隊組織をつくり、「戦闘者ファツシヨ」と呼びましたから、世間からは黒シャツ黨と呼ばれ、その運動は黒シャツ運動と云はれたのであります、彼等はその志望、目的を天下に發表し、無力な議會政治に反對し、極左共產

主義者を排撃し、祖國に對して犠牲的奉仕を誓ひましたため、國家の前途を憂ふる程の人は貴族、軍人、共和主義者、代議士、學生、地主、農民、商工業者、勞働者等より戦地から歸つて來た除隊兵までこれに加入したのであります、「ファツシヨは塹壕の中から生れた」と云ふ言葉のあるのは、その黨員の中に實際、戦争を體驗したものが多かつたからであります、一九二〇年、黨員の數は三萬人となりました。

其の翌年、一九二一年、彼等は社會的結社を拵へ、ローマで總會を開いて「政黨ファシスタ」と云ふ名義とした。時に、黨員は最早三十二萬人になつて居ります、これ迄伊太利の内閣は何度も變りました、即ちニツチ内閣、ジョリツチ内閣、ボノミ内閣と次々に出來たが、何れも大問題に面して、これを解決することが出来ませんで倒れて了ひました、それ故、伊太利の政治家と云ふものは國民から愛想づかしをされて、「何と云ふ意氣地なしの政治家であるか、國家危急の場合に何一つ仕事が出来ないのか」と云ふ風に罵られました、それだけ、ムツソリーニの率ゐる黨派は國民の共鳴するところとなり、終に一九二二年「政黨ファシスタ」は敢へて力に訴へて自分等の主義や運動に反對するものを彈壓し、死傷者は五千人に上りました、力はファツシヨに付きものであります、即ち己が目的を達成する爲には同胞の生命を奪ふことも忍ぶのがファツシヨの態度でございます、同年、ムツソリーニはファシスト義勇軍を編制しまして、力の行動の基礎づけを致しました、同年十月二十四日、ナポリに大會を開きましたが、集つたものが六萬人ほどあつて、彼等は何處迄も伊太利國王に對して忠誠を誓ひ、伊太利の爲に國家主義の立場に立つて行動することを宣言致しました、二十七日全國一齊にファシスト總動員を實行致し、翌二十八日、「我等と共にせよ、然らずば我等に反對せよ」と書いた大旗を押立て、國家の正規軍の存在を無視しまして、ナポリからローマへとファツシヨの

軍隊が進軍してローマを占領しました、爲にファタタ内閣は辭職し、ムツソリーニが總理の印綬を帯び、名義も實際も伊太利の獨裁官となつてファツシヨ政權を確立したのであります。

それからファツシヨ政權の行動はいかにも目覚ましき活動をなしましたが、中にも我々の記憶に鮮かであることはエチオピアの併合であります、兎も角、國際聯盟も存在する時、何故にエチオピアと云ふ一の獨立國が伊太利から併合されたであらうか、一人の大和乙女のお嫁入さへしようとした其のエチオピアが何故、伊太利から併合されたであらうか、前に述べた通り、大戰の初め、伊太利が聯合國に加入した際、暗黙の間に伊太利は戦後、阿弗利加に植民地を得て、過剰の人口をそこへ移植することを許された、然る所、大戰が止み平和が克復しても英國を筆頭とする聯合國は伊太利に向つて黙約を履行しません、それでムツソリーニは腹を立て白晝、公然、獨立國エチオピアを併合してしまつたのであります、ムツソリーニと云ふは意志の人であつて、事に當つて自分の志望を達成しなければ己まない底の鐵腕を有つて居る現代政治家でございます。

伊太利のファツシヨ政權は二十世紀に於ける尤も輝かしいものゝ一である、遙かに之を羨しい顔をして眺めて居たのは獨逸國民であります、獨逸はカイゼルが世界大戰を惹き起した責任を負うて、和蘭のドールンと云ふ所に蒙塵致しました、爲に帝國獨逸はヒンデンブルグ大統領の獨逸となつてしまひました。ヒンデンブルグ元帥が大統領で居ります間はファツシヨ運動と云ふものは、未だ獨逸に起らなかつたのであります、所が一九三三年、ヒンデンブルグ大統領が歿するやヒットラーと云ふものが、獨逸總統の印綬を帯びたのであります、ヒットラーは元、軍人として世界大戰に應召し、鐵火の洗禮を受けた人であり、此の人がヒンデンブルグの後を嗣いで敗戦の屈辱に弱り抜いた獨逸を引受けたのであります。獨逸は御承知の通り、大戰迄は押しも押されもしない歐洲第一流の國家の一つでありましたが、大戰で敗れました後と云ふものは、すつと國際的位置が下つて了りました、どうしても、第三流の國家となつてしまつたのであります、そこへもつて行つて、ヴェルサイユ宮の平和會議は色々の點で非常な重荷を獨逸に負はしめた、償金だけでも千三百二十億マルクといふ所謂天文學的數字と云はれるほど巨額なものであります、斯う云ふ獨逸の跡始末を引受けたのが即ちヒットラーであります。

彼が遙かに伊太利の方を眺めますと、ムツソリーニのファツシヨ政權が赫々たる成功を収めて居るのでありますから、ヒットラーは到頭この伊太利のファツシヨ運動を學ぶやうになつたのであります、さうしてハーゲンクロイツと申しますが、巴比の卍を逆しまに致しました國旗の下に、極力、獨逸の統一と興隆とを圖つて所謂ナチス獨逸を打建てました、ナチスとは國民社會黨と譯すべきであります、彼は先づ第一に議會主義と云ふものを排斥しました、これは國民の代表者が議會を構成し、其議會の決議を一國政治の上に實行する立場であるが、彼はその必要を認めないのであります、又彼は共產主義を排斥しました、さうして何處迄も獨逸國民に向つて獨逸民族と云ふ觀念を喚起し、我々は獨逸民族の血液を純潔にし、純潔なる獨逸民族と云ふ觀念で戦後經營に當らなくちやならない、國家と云ふものは一の形式であつて、血液を同じくする民族がその實質である、我々は國家の實質たる獨逸民族と云ふものゝ血液を純潔にして、將に亡びようとしてゐる獨逸國を建直さなくてはならない、斯様な國家にあつては議會に於いて政治上の自由なる遊戯は斷じて許されない、又國家を無視して、世界國家を作らうとする過激主義の態度も決して許されない、我々は國境を高くし、其の中で獨逸民族の血液を純潔にし、以て祖國を再興せなければならぬ、これがヒッ

トラの建前でございます。此の主張を貫く爲に眞先に大打撃を蒙つたものは獨乙に居た猶太人であり、彼等は獨乙人と全然血液が違ひます、そこで政府は苟くも猶太人であれば高名な學者でも、藝術家でも其の他、色々の卓越性を有つて居つても皆これを國外に放逐してしまつた、何といふ辛辣な政治でありませうか。ヒットラーの人種哲學の中心觀念は「混血は國家を衰頹させる」といふところにあります。

## ロ、その批判

ファシズムの第一の長所とも云ふべき點は、一旦自國が危殆に瀕するや、之を救ふには自分の力に依る外はないと云ふ固い信念のあることであります、この際、國民は凡て國民意識に燃え立つて、自國を救ふのは、我等の義務であると固く信じ、他國の救援を求めると云ふやうなことなく、勇壯果敢な精神力を以て進むのであります、伊太利には「我等には實行ありて、議論なし」と言ふことが標語になつて居ります。

第二の長所はファシズムは必然的な發生過程を有する國家主義であつて極力共產主義に反對することであり、ファシズムは全く無産者の横暴を許さない、マルクス主義を肩に著て天下は俺達の天下だと言ひたがるのが、大戦後の多くの國家の無産者、労働者であります、爲にサボタージュとか、ストライキとか言ふものが頻りに起つたのであります、伊太利でも、獨乙でも決して此の態度を許しません。

第三の長所は、斯様にファシズムは一方では無産者の横暴を抑へると同時に、他方では資本家の利己を抑へるところにあります、資本家と言ふものは何處の國にあつても、利己主義の實行者でありまして、自分の富を積む爲には同

胞労働者を酷使するは論なく、國家そのものゝ不利をも顧みないのであります、ですからファシズムの立場からは、資本家の態度は許せないのであります、爲にファツシヨは言ひます、「一國の生産と言ふものは、労働者許りで出来るものでもなく、又資本家のみで出来るものでもない、それは勞資協調に依つて初めて出来るものである」と、今日ムツツリーニ氏は失業者を救はむが爲に、會社や工場に必要以上の職工、労働者を割當てゝ居ります、かくしてムツツリーニ政権は勞資兩者から好感を以て援けられて居るのであります。

第四の長所はファツシヨは青年學生と言ふものを愛國者に仕立てることであり、伊太利でも獨乙でも青年學生は次期の祖國を雙肩に擔ふ人達であるから、どうしても愛國者でなければならぬとなしまして、種々の方法の下に青年學生に愛國心を吹き入れて居ります、今日、兩國に於ける青年の團體運動と言ふものは、實に秩序立つて行はれて居るのであります。

次にはファシズムの短所を指摘してみようと思ひます、ファシズムは一の獨裁主義であります、伊太利ではムツツリーニ氏が獨裁者であつて、獨乙ではヒットラー氏がそれであり、結局、これは一人の優れた人物、一人の卓越した政治家が己が独自の主義を以て、大小の政治を行ふのであります、今日、日本でこれを表はすに賢良主義と言ふ文字を使ふ人がございます、所が此の獨裁主義と言ふものは、獨裁者が本當に優れて居り、政治家としての手腕、力量があり、政治上の高遠な理想を有し、愛國心を有すると言ふやうな諸條件の下にあつては無論宜いのであります、所がさう言ふ政治家は、何處の國にも澤山あるものではありません、そこで本當の手腕、力量なきものがファツシヨを信じまして、力至上主義の下に實際政治に當りますと言ふと、獨斷專行に出て恐ろしい弊害を生じて参ります、さう

言ふ場合には萬事、人民の自由と言ふものを抑へます、思想の自由も、言論の自由も、集會の自由も、其の他、文化國民の有すべき色々の自由を抑へるのであります、そこをいはゆる統制と呼ぶのであります、無論、統制には良い意味のものもありますが、人民の自由を抑へ切る統制は決して良い統制ではございませぬ、何故であるかといふに、その時は國民の氣魄と申しますか、元氣と申しますか、それをなくしてしまひます、各個人の自由行動をさせなければ遂に國民全体の潑刺たる元氣を亡ぼし人心を萎靡させ、甚しきに至つては人間の獨創力を根絶してしまふのであります、その上、力の際限なき行使には不平の鬱積と反撥の情勢とを醸し易いものであります。

## 六、日本精神

### イ、その意義

この度のプログラムの最後に「日本精神」を置きましたのは、思想問題の解決には日本國民が先づこの日本精神に目覺めることを以てその根本とするからであります、昭和六年、滿洲事變といふものが起り、續いて滿洲國の出現となりましたことは、更めて申す必要はないのであります、此の事變で日本國民なり、又世界の國民なりに深い感銘を與へたことは、我が陸軍の素晴らしい行動であります、特に多門師團の善謀善戰は第一、土匪が縮上つたといふことを承つて居ります、「多門來」と言ふと彼等は恰も蜘蛛の子を散らすやうに逃げたといふことであります、それに引續いて、上海事變が起りましたが、これでも日本國民が世界的に評判を高めたのは、陸海軍人の輝かしい功績であります。

す、例へば爆彈三勇士の壯絶悲絶の行爲の如きは、外國にその例がありますかどうか、疑はしいのであります、これら兩事變に依りまして、日本國民は自分の力、自分の潜勢力、自分の恃むに足る底力といふものを能く認識したのであります、個人に取つても自分の力を本當に認識することは、大層望ましいことではありますが、國民に取つても亦同じことであります、自國の底力を眞正面から眺めることの出來たのは、國民に取りまして洵に喜ばしいことでもあります。

その翌、昭和七年、米國の加州ロサンヂェルスにオリンピック大會がありました、此處へ出ました日本の選手達の中で、特に水泳の選手が世界各國から集つた人達の注意を惹きました、當時、時事新報に下のやうな記事のあつたことを覺えて居ります、米國の或る記者が日本の記者に向つて、「どうも貴方の國の水泳選手の腕前といふものは、實に天晴れなものだ、自分等の持合せの文字では、其の天晴れな腕前を褒め盡すことは到底、出來ない、貴方が貴方の持合せの文字でそれを充分に褒めなされば、私はそれに署名しませう」と言つたさうであります、亞米利加國民と言へば、有形無形、何事でも世界第一等になりたがつて居る國民である、其國民の一人たる記者が今のやうなことをいふたのは彼等が餘程日本の水泳選手の腕前に動かされたに相違ありません、又其の大會に出ました日本の騎兵將校の中に、城戸中佐といふがありました、(後に大佐になりました)此の人は晴れの競争に出ようとして、其の前日迄、毎日、自分の馬を訓練して居つたのであります、餘りに訓練の度が過ぎた爲か、到頭、競争の前日に馬が疲れて了つたのであります、爲に中佐はこんな疲れた馬に鞭打つて技を競ふに忍びないとの考へからサラリと競争權を放棄してしまひました、これ亦亞米利加人や歐羅巴からロスアンヂェルスに来て居た一部の人の注意を惹いたのであります、日本

といふ國は武士道の國だと聞いて居る、武士には情と言ふものがあるさうだ、その武士の情は獸類にも亦及ぶものか何とやさしいことか、といふ風に彼等は絶讃の言葉を放つたのであります、西洋人は日本人に比べると、凡べて勝負事には熱心で、何でも勝てば宜いといふ風に考へて居るやうであります、所が我が城戸中佐は眼中に勝負はない、自分の疲れた愛馬に鞭打つに忍びないといふ麗はしい動物愛から進んで競争権を棄てたのであります、爲に、その後ロサンヂェルス近くのルビトー山に中佐の頌徳碑を建てました、碑の表には満開の櫻花を刻み其の下に斯様な文字を彫りました、「城戸中佐ハ勝利ヲ棄テ、愛馬ヲ救ツタ、中佐ノ耳ヲ打ツタモノハ榮冠ノ聲高キ絶讃デハナクテ憐ノ心ノ低キ囁キデアツタ」といふのであります、此のやうなオリンピック大會の事實が矢張り、日本に傳はりまして、日本國民は平和な國際的の催からも自分の有つて居る長所美點を能く認識することが出来たのであります。

次に昭和八年、我國は國際聯盟から脱退しました、我國が國際聯盟に加入しまして歐洲諸國と歩調を揃へて世界の平和を圖ること、前後十三年でありました、昭和六年、滿洲事變が勃發し、次いで滿洲國建設となりまして日本國の考へと國際聯盟のそれとがどうも折合が付きません、爲に日本は件の十三年の歴史をかなぐり棄て、それと袂を分つたのであります、その時、日本は一對四十二といふ苦杯を嘗めさせられても屈せず、世界列強を向ふに廻して、「君達は君達の好きな通りになさい、私は私の好きな通りにするから」と言つた譯であります、嘉永六年、米國の提督ペルリが軍艦を率ゐて、浦賀に來た時は果してどうでありましたか、我が國は「黒船米」を叫んで上を下へと大騒ぎをなしたのでありますねぬか、所が昭和八年には日本國が世界の廣居に立つて自説を堅持し、敢へて公然、國際聯盟を脱退したのであります、その時、我が松岡代表がヂュネーブで切つた大見得は世界中の空氣を振はせました、此處で

も、日本國民は自國の力、自國の恃むに足ることをはつきり認識致しました。

以上の三つの事件は日本國民をしてこれ迄にない國民的自覺を惹起させたのであります、この國民的自覺が一人の政治家の口を藉りて、迸り出しましたのが即ち日本精神の叫びであります、若し是が學者とか、教育家とかの口から出たならば、日本精神の意味、日本精神の概念がはつきりして居つたでありませうが、政治家の口から出ました爲に其の意味、其の概念がどうもはつきりしないのであります、爲に諸方面の理論家や實際家が自分の立つて居る立場からこの精神の解釋を試みて居るのであります、今試にその代表的のものを述べようと思ひます。

第一、或る學者は日本精神は神道だと言ひます、神道にも色々ございますが、論旨は復古神道を意味して居るやうであります、これは徳川時代の本居宣長、平田篤胤等に依つて唱へられたものであつて、儒教や、佛教、其他の外來の教説に影響されないものであります、是は神官、神職などの喜ぶ説であります。

第二、或人は日本精神は清明心であるといふのであります、日本人には清き明き心がある、其の働きとして直毘靈と言ふものがある、と言ひます、又同人が日本人には「何くそ」といふ心の力がある、これが日本精神の動的側面であると言ひます。

第三、或る教育家は日本精神は國民道德であると言ひます、この人は精神と道德とは結局、同じものである、従つて日本精神は日本道德である、日本道德は日本の國民道德であると説くのであります。

第四、或る學者は日本精神は神々しさ、懐かしさ、清々しさ等に展開するものである、これには統一があり、永遠な性質があり、純真な性質があるといふのであります、詰り、日本に傳統的に傳つた國民的情操が日本精神であると

いふのであります。

第五、或る外國人で永く日本に滞在して、日本を研究して居る人で日本精神を解釋し、それは良心と意志との集成である、こゝに良心とは愛國と忠節、正直と熱情とを指し、意志とは美しいこと、正しいこと、人類的なことの爲に自分を役立たせようとするものであると説いて居ります。

然らば、日本精神の解釋はこれらの説の中で、どれを正しいものとして採るべきであるか、或はどれも採らないで、別に自分の説を樹つべきであるか、今日は丁度、左様になつて居るのであります、私は後の方の態度を採りまして私の考へて居るところを申上げて見ようと思ふのであります、どの説も過つて居るとは申しませぬが、私は別に考へてみたいのであります、先程一寸、本居宣長に觸れましたが此の人に有名な歌がありますことは誰方も御承知の筈であります、それは

敷島の和心を人間は

朝日に匂ふ山櫻花

といふのであります、是は洵に結構な歌でありまして、試に繰返してこれを口吟んで居るといふと色々のことが聯想せられて参ります、その一は明朗といふことであります、「朝日に匂ふ山櫻花」ですからとても明朗であります、その二は正大であります、爛漫と朝日に向つて咲いてゐる山櫻であつて、何等疚しいといふやうな所は塵微もなく洵に正大なものであります、その三は犠牲であります、櫻の散際は如何にも潔きよい、今日、眞盛りに咲き亂れて居るかと思へば、一夜の嵐に明朝はすつかり散つて滿地に白雪を散らして居ります、ですから犠牲といふことも聯想せられま

す、その四は忠君愛國であります、以上の明朗、正大、犠牲といふやうな精神を以て君國に對して盡しますれば、それは忠君愛國であります、さて宣長の意味した「大和心」の「心」といふ文字の代りに「精神」といふ文字を使へば日本精神となります、されば宣長の意味した日本精神は明朗な心、正大な心、犠牲心、忠君愛國の心といふ風に解決することが出来るのであります、幕末の志士の一人に長州の吉田松陰がありました、彼は當時の内憂外患に打ち拉がれた日本を救ふ爲にはどうあつても皇室と人民との間に介在する徳川幕府を倒さなければならぬと考へました、そこで彼は色々の方法の下に幕府を倒す實際運動に従事しました、或る時は米國や露國に行かうとし、又或る時は京都所司代間部詮勝を刺さうと致しました、爲に到頭捕縛されました、長州野山の獄に繋がれたのですが幕府では長州に置いては危ぶないと考へて、彼を江戸の傳馬町の獄屋に移したのであります、さうして、そこで以て取調べて、終に斬罪に處しました、此の松陰が下田から江戸に護送せられるに當り、高輪泉岳寺の下を通る時、左の歌を詠んで居ります、此の歌も亦諸君の疾くに御承知のことと存じます。

かくすればかくなるものと知りながら

已むに已まれぬ大和魂

「かくすればかくなるもの」といふは、幕府を倒さうといふ大膽の行動に出れば捕へられて殺されるといふことは疾うに承知して居るといふのであります、けれども自分には「已むに已まれぬ大和魂」がある、抑へんと欲して到底抑へることの出来ない歌々たる大和魂の持合せがある、此の大和魂が自分をして討幕の計畫に出でしめたのだといふのであります、彼の「大和魂」の「魂」の代りに「精神」を持つて來ますると又日本精神となります、松陰の意味した

日本精神といふものは忠君と申しますか、愛國と申しますか、兎に角、自分を抛つて長くも 天皇陛下の御爲に、又自分の生れ出たこの日本帝國の爲に盡させるものである、人をして小我に死して大我に生きさせる精神であります。

此の邊りで私は大體、日本精神の概念は明瞭であると思ふのであります、本居宣長と云へば古典學者として日本國で第一流の人物と見て宜いのであります、吉田松陰と言へば幕末に於ける理想的の忠君愛國の士と見て宜いのであります、此の人達の眞剣なる情懷を述べた作には毛でつくほど偽りのあらう筈はありません、さればこれ等の作品を材料として日本精神を検討しますれば、日本精神といふものの果してどういふものであるかといふことが判る筈であります、けれども、宣長のいふ「大和魂」、松陰のいふ「大和魂」は、今日、一部の人はこれを口に筆にしますけれども、多數の人はさう致しませぬ、多數の人は日本精神々々々といつて居ります、近頃の時代語として日本精神といふ言葉程多くの人に用ひられてゐるものはないのですが、これほどその意味の不明瞭な言葉も亦ありませぬ、萬人が口にして居ながら萬人が其の意味がはつきり判らぬといふは洵に不思議といへば不思議であります。

今日一部のを除いては大和心をいはない、又大和魂をいはないで、萬人が日本精神をいふのは果してどういふ譯であらうか、これについて私は斯ういふ風に考へてゐます、大和心とか、大和魂といふのは、第一、島國日本が有つて居つた言葉であります、第二、此の二つの言葉は封建日本が拵へて、封建日本が有つて居つた言葉であります、第三、此の二つの言葉は特に有識階級の人達が有つてゐた言葉であります。即ち階級日本の有つて居た言葉であります所が今日の日本は第一、世界的日本であります、押しも押されぬ世界の大國の一たる日本であります、第二、今日の日本は封建日本ではございませんで、立憲的日本であります、第三、今日の日本は階級日本ではなくて、國民的日

本であります、かやうな世界的日本、立憲的日本、國民的日本は最早大和心、大和魂といふ言葉は好みませんで、日本精神といふ言葉を好んで居ります、それでありませうから、日本精神は宣長のいふ大和心、松陰のいふ大和魂と無論、少からず一致點を有してゐますが、今日は是が萬人に使はれて居るのであります。

されば、今日、我々は是非共、日本精神といふものは、果してどういふ風に考へて宜いか、又どういふ風に表現して宜いか、そこを考へて見なければならぬのであります、或る學者の如きは、日本精神といふものは餘りに大きなものであつて、簡単に之を言表はすことは出来ない、定義などを拵へることは無論出来ない、唯我が國の古典を繕いて自然の間に、これを理解すべきであると言つて居ります、是は一部の有閑者流には或は首肯されるかも知れないが少くとも日本精神を教育的に取扱ふ者には喜ばれない説であります、若し學生が「先生！日本精神といふものは、どんなものですか」と質問したとき、「それは簡単にいふ譯には參らぬ、お前は古典を繕いて以心傳的に理解しなさい」といつたのでは、教師の役目は決して勤まりませぬ、ですから、少くとも日本精神といふものを教育的に取扱ふ爲には、普遍妥當性を有つた説明の方法、表現の方法を取らなければなりません、私は日本精神を二通りに考へて居りますから、其の一はいはゞ日本精神の哲學的説明であります、私は此の宇宙には「宇宙精神」と呼ぶべき大精神があると思ふのであります、宇宙に生命があるのは、宇宙に此の大精神があるからであります、此の宇宙精神を日本國民が分取したものが即ち日本精神であります、然らばその宇宙精神と、いふものは、果してどういふものであるか、私には私の精神があります、それですから諸君の前に立つて、思想問題の批評的研究といふお話を致して居るのであります、私の三日間の講演といふものは一に私の有する精神の働きなのであります、私の精神の現れなのであります、



今これと同じ考へ方を宇宙の方へ擴げてみますと、宇宙といふものには第一、色々の天體がある、その内地球といふ天體には色々の動物がある、動物の中には色々の種類があつてその内、最も高等なものが人類となつて居る、又色々の植物がある、植物の中にも色々の種類がある、以上は生物であります、その他に無生物がある、この無生物にも亦色々の種類がある、されば此の宇宙と言ふものは實に複雑を極めたものであります、けれども、その複雑を極めた中に一定の法則が働いてゐます、例へば物理學が取扱ふ引力法はその一であります。それは凡て物體は地球の中心に向つて落下するといふのでございます、又、四季の更迭も宇宙の法則の一つの現れでありまして、春夏秋冬の順序は何時間違なしに去來してゐます、斯う云ふ風に考へますといふと、宇宙の事象には變化、生滅があつて複雑極まりないのであります、おのづとその間に法則があつて一糸紊れず働いて居ります、宇宙間一切の事象には儼として一定の法則が支配して居るのであります。さて法則は目的を前提致します、目的を遂げる爲に法則があるのであります、世には色々の物質科學や精神科學があつて物質の支配せられる法則、精神の支配せられる法則を研究するのであるが、その法則は必ず目的を前提します、而してその目的は宇宙の有するものである、宇宙に法則があるのは、宇宙に目的があるからであります、己に目的を有する以上、宇宙には精神があることが判ります、宇宙に精神があつて目的を立て、その目的を達成する爲に法則があるのであります、ついでには宇宙精神の存立はどうあつてもこれを疑ふことが出来ません、此の宇宙精神を日本國民が國を建て、此の方、分取して居るのが即ち日本精神であります。

先刻申しました日本精神の諸家の説くところは一にこの日本精神の現はれに外ならぬのであります。即ち神道はこの日本精神の宗教的の現はれであります、清明心は該精神の民族心理的の現はれであります、又國民道德はこの精神の道德的の現はれである、神々しさ、懐かしさ、清々しさ等は此の精神の國民性的の現はれである、又この精神は或る外人の説いたやうに良心と意志との集成となつて現はれる、かやうにその現はれ方は色々であります、其の根本は一つの日本精神である、そしてこの精神は大なる宇宙精神を日本國民の分取したものであります。

その二は日本精神の經驗的説明であります、若し前の考へ方を哲學的説明といへば、これは科學的説明といふことが出来ます、それはかやうに申したい、日本精神は日本民族と共に發生し、日本の歴史を貫いて存し、日本國民の國家生活の指導原理となる全體的な精神であります、かやうに説明すると、或は皆様の間から下のやうな質問が現はれるかも知れません、それは貴方の説を聽いてゐるといふと、哲學的説明でも亦科學的説明でも、いづれも抽象的である今少し具體的に説くことは出来ませんか、といふのであります、それには私は斯うお答へ致します、日本精神といふものは肇國この方如何なる時代の日本國民も關與してゐる大なる精神であるのですから、これが把握は自然、抽象的になる外はないのであります、何故、大なる精神といふかといふと、日本國以外の國では東洋のものでも、西洋のものでも革命といふものがありました、國體が變り、主權者が變つてゐます、所が單り日本には肇國以來、未だ曾つて革命がございませぬ、さうして我が國民は長くも萬世一系の皇室を奉戴して、殆ど理想的の國家生活を致して居りますから、その間に形造られた日本精神は餘程大いなるものであると見なければなりません、又、今日この精神を取扱ひつゝある多くの學者は主として過去の材料からのみ日本精神を説明致しますが、私はそれは何うかと考へます、日本精神は日本の過去に於て働き、現代に於て働きつゝあるが、又當然、將來にも働くものであります、従つてそれは單に大きいばかりでなく又久しきに亘るものであります、即ち偉大にして且つ永遠なるものであります、斯ういふ精

神を具體的に表現することは到底、出来る筈のものでありませぬ、例へば、このコップならば具體的に表現出来ず、この扇、この水差ならば亦具體的に表現出来ず、けれども此の偉大にして且つ永遠に亘る日本精神をコップや扇や水差などと同様に具體的に表現しようとするのは無理であります、でありますから、その把握が抽象的になるのでございます、けれども私が抽象的に表現しました此の日本精神を具體化することはそれは雜作ないことでもあります、それは誰方でも、日本人といふ明なる意識を以て自分の立つて居る所にしつかり脚を立て、最善を盡すのであります神職なら神職といふ明なる意識を以てその神聖なる職責を十分、果すのであります、さうすれば、其の人の分取して居る日本精神は直に具體化されます、要するに、自分の自覺次第、自分の努力次第で抽象的に表現せられた日本精神は容易に具體化することが出来るのであります。

### ロ、日本民族の文化的使命

最後に「日本民族の文化的使命」といふお話を致します、今日、文化を取扱ひますものは、通例、東洋文化と、西洋文化とに分けることに致して居ります、東洋文化は更に三通りに區別することが出来ず、其の一は民族主義的文化といふべきものであります、これは特殊の民族がその独自の力で創り出した文化で、多分に民族性の盛られてあるものであります、然らばそれは東洋のいかなる民族が創り、いかなる民族が所有して居るかといひますと、日本民族が創り、日本民族が所有して居るものであります、これが内容を申すと神道と武士道とであります、その二は實證主義的文化と名づくべきものであります、これは何處迄も經驗を尊とび、實理を重んじ、形而上學的考察の如きは好

まないものであります、是は支那の孔子及びその門人達が創りましたものでありまして、其の内容をなすものは主として儒教である、其の三は禁慾主義的文化と名づくべきものであります、これは印度に出来たものであります、詰り、釋尊が禁慾生活の下に創られたものであつて、佛教がその内容をなして居ります。

次に西洋文化は二つに區別されます、其の一は主知主義的文化であります、是は古代希臘の國民が創り、且つ所有したものであります、これには哲學が屬して、いかにも優れたものがあります、又これには科學の源があります。その二は人道主義的文化と呼ぶものでございます、基督教は猶太に起り羅馬に這入つて國教となりそれから歐洲に廣がりましたが、この宗教を中心とした文化がこれであり、基督教は愛といふものを主に致しまして、「己を愛するが如く隣人を愛し、隣人を愛するが如く敵を愛せよ」と教へました。

斯ういふ風に東洋文化と西洋文化とが對立して今日に及んで居ります、勿論、今日迄に東西兩洋に英雄豪傑といふものが現はれまして、東洋の方から西洋を侵略し、西洋の方から東洋を征伐し、その間に自づと東西兩洋の文化が接觸することがあつたが、それらは案外に混淆しない、無論多少は混淆しましたが、十分ではなかつたのであります、又、探險家、航海家などがございまして、東西兩洋を往復致しましたが是亦兩洋の文化を十分混淆させる所迄は行かなかつたのであります。

以上の東西兩洋の文化には長所もあるが短所もあります、長所は暫らくこれを措き、主としてその短所が東西の兩洋の民族の間に不和衝突を誘發する原因となるのであります、されば此の東西兩洋の文化を混淆し融和して、一には兩洋の民族の不和衝突を防ぎ、又一にはより高度の世界文化を作りたいのであります、こゝに日本民族の文化的使命

といふものが考へられるのであります、日本民族の使命は色々の看點から考へられるのであります、例へば製造、工藝といふ方から考へられます、或は陸海軍といふ方からも考へられませう、しかし私は主としてこれを文化の方面から考へてみたい、今日、世界に飛躍的進歩を遂げつゝある日本民族はこの點で自分の世界的使命を見出すであらうと思ひます。

是から一わたり東西兩洋の文化の特色を説いてみようと思ふのであります、第一、西洋の文化は個人といふものを重んじます、西洋の文化の背景には個人主義といふものが横はつて居ります、所が東洋の文化はそうでない、東洋の文化は團體を重んじます、即ち家といふ團體、國といふ團體を重んじます、そこで東洋には團體主義が働いて居ります、茲に兩洋の文化の一つの相違を見出すのであります、さて西洋ではどうして個人を重んずるか、又個人主義といふものが西洋の文化の背景となつて居るかといふにそれは由來が相當遠いのであります、西洋では既に希臘時代に人格を重んずる考へがありました、およそ人間は黄金の點では貧富といふ差がある、權利の點では治者被治者といふ差がある、性の點では男女の差がある、位置の點では高下貴賤といふ差があります、所が人格といふ看點から人間を見ればこれらの差はすつかり取れてしまつて、唯赤裸々の人間だけが残ります、この赤裸々の人間を見詰めるところに個人を重んずる考が生じるのであります、個人を重んじて、其の正當なる人格的要求を認めるところに權利が起るのであります、他人をして自分の正しい人格的要求を重んぜしめると同時に、自分は他人のそれを重んじることが自他の權利の尊重であります、權利の裏面には義務があります、己れ一定の權利を得る爲には先づ一定の義務を果さなければならぬのである、例へば法定の納税の義務を果すとき、選舉權といふ權利が得られるのである、西洋で權利義務の

觀念といふものが發達したのは何處迄も個人を本位に考へた結果であります、然り、個人本位に思考し行動する所に個人主義といふものが發生するのであります、世間には個人主義を直に良くないものと斷定するものがございますが、是は何うかと思ふのであります、勿論、或る個人が他人の權利を認めず、己が義務を果たさず、唯、小さい我といふ個人だけを愛するなれば、それは利己主義であります、利己主義に墮落した個人主義は固より排斥すべきであります、けれども、個人を純化すると人格となることを忘れてなりません、こゝに純化とはものゝ特殊性を抑へてその普汎性を昂揚することであり、かくして得た人格を本位として思考し行動する立場を人格主義といひます、是は斷じて排斥すべきではないのであります、我々は人格を重んずるところに、自尊心や謙讓の美德を養ふことが出来るのであります。

翻つて東洋の方を見るといふと、今申上げましたやうに、日本や支那では家といふ團體を重んずるところに、孝といふ道德が起り、國といふ團體を重んずるところに忠といふ道德が起つたのであります、特に日本では忠と孝が一致します、日本は忠孝一致の國であります、西洋には日本程に發展した忠の道德はありません、曾て或る人が倫敦で英國の或る團體の依頼に依りまして、赤穂義士の話を致しました、話を終りますと、聴衆の一人が立ちまして、「大層面白く拜聴致しました、お蔭で四十七士が非常に忠義な人々であつたことが判りました、さて一つ伺ひますが、當時四十七士の俸給は何程でございましたか」といつたさうであります、是は日本の團體主義と英國の個人主義との相違をよく物語る事實であります。

第二に、西洋の文化は知的要素に富んで居ります、西洋の文化を味はつてみると知的要素が多いのであります、と

ところが東洋の文化は情的要素が多いのであります、これは兩洋の文化の著しい對立の一であります、西洋で近世の初めに於きまして誰方も御承知のやうに、自然科学といふものが勃興致しました、是は要するに、自然界に生きて働いてゐる物の道理を知らうとする要求に基いて起つたのであります、又西洋の近世に於いて歐羅巴大陸にも亦英國にも名高い哲學者が輩出して夫々の體系を組立てました、是亦全体としての世界と人生とを根本的に説明しようとする要求に基いたのであります、これらの自然科学や哲學が基礎になつて、其の上に築かれた文化に知的要素の織込まれて居るのは少しも異しむに足りません、所が東洋文化は情的要素に富んで居ります、例へば支那で孔子は仁といふものを大層、重んじました、之は一たび論語を読みますと直ぐ判ることであり、孔子の倫理學說の中心觀念は仁であります、多くの門人が孔子に仁の意味を聞いて居りますが、孔子は相手の器次第で仁を色々に説明して居ります、實に孔子の仁といふものは意味の豊富なものであります、仁の一つの解釋に、「博愛、之を仁といふ」といふのがあります、教育勅語の「博愛衆ニ及ホシ」といふ御言葉の博愛であります、これで仁は情的道德であることが判ります。

日本の忠や孝も矢張り情的道德であります、いふまでもなく、忠は 天皇陛下に對し奉る大道でありまして、人民が 天皇陛下の御政治の有難い所に感激し奉つて、その御鴻恩の萬一に報い奉らうとするところにこの忠が起るのであります。又、孝といふのは人の子女たる者が父母より受くる所の恩の海よりも深く、山よりも高いところに感じて起るものであつて矢張り、情的要素をたつぷり有つて居ります、前の時間に城戸中佐が馬を愛したことを申しましたが、これは所謂「武士の情」の動物への延長と見るべきであります。

第三、西洋文化は理論的要素が多く、東洋文化は實際的要素が多い、是亦著しい對立である、西洋では物質科學、

精神科學、哲學等がいづれも一定の研究法の下に研究され、その結果、それらに基づく文化に理論的要素が多いのであります、所が東洋に於きましては、支那の儒教にしても、印度の佛教にしても、亦日本の神道や、武士道にしても實際を重んじて、その理論の方は第二位に措かれて居ります、事實、實際の方では東洋の方が西洋の方よりすつと優つて居る所がございます、試にその著しい例を申しますと、支那の宋明の學者は例へば、持敬慎獨と云ことを大變に力をこめて教へました、王陽明などはその一人であります、西郷南洲は陽明學を愛した人であり、私は或る時、鹿兒島に参りまして或る旅館の床の間に南洲の「獨寢不愧衾」といふのを見たことがあります。

次に第四、西洋の文化は自主的要素が多く、東洋の文化は沒我的要素が多いのであります、自主的と云ふは何處迄も自分といふものを主にするのであります、獨逸のパウルゼンといふ倫理學者の著した「倫理學大系」といふ書物に下のやうなことが書いてあります、曾て英國の旅行家が露西亞を旅行して或る停車場で釣錢を貰ひましたが、一錢足りません、そこで切符を賣るものにこの事をいふと、切符賣りは「いや、あげました」といつた、すると「いや、貰はぬ」「いや、あげました」といつて半日間争つたといふことであります。私は大正十一年夏、滿洲に行きまして哈爾濱迄参り沖禎介といふ志士の殺された所に参拜致しました、當時、記念碑は未だ立ちませんでした、其の時、沖氏が横川省三氏と共に露西亞の兵隊に捕へられました端緒は氏等はすつかり支那人の装ひを致しまして、寸分の隙もなかつたのであります、沖氏が或る店に立寄つて物を買ふた時、何ほどかの釣錢を貰ふべきであつた、所が氏は「釣錢は要らぬ」といつたことであつたといふことを聞きました、支那には開關以來、「釣錢が要らぬ」といつた者はただの一人もないやうであります、どうでありますか、上述の英人と沖氏とのその相違はそのまま、西洋文化と東洋文化と

の一の相違ではないでせうか、又かの上海事變に於ける爆彈三勇士は、我が沒我的道德の實行の典型的のものであります。

終りに第五、西洋文化は直情的傾向に富み、東洋文化は制情的傾向に富みます、是はどういふことであるかといふと、例へば、西洋人といふものは大抵は己が胸中にあることはどん／＼他の人についてしまひます、特に大學生などは初對面の人にも胸中のことを悉く打明けてしまひます、ですから直ぐ親密になります、又素人下宿などでは犬も喰はぬといふ夫婦喧嘩を外國人の前で平氣でやつてみせます、日本では夫婦喧嘩といへば人に見せないやうにしてやるのが普通でありませうが、西洋では夫婦喧嘩の機會が到來すれば、そこに直に大戦が勃發致します、従つて又西洋人は多くは喜怒哀樂といふものを包み隠くしませぬ、是又彼等の直情的傾向であります、所が東洋では「喜怒哀樂にはさず」といふことが教養のある紳士淑女の態度であります、これは即ち制情的傾向であります、特に我國の武士には制情道德が大層發展致しました、例へば乃木大將の如き名將にはこの行爲が随分あつたやうであります、長男の勝典氏は南山の戦で亡くなられ、次男の保典氏は二〇三高地で亡くなられましたが、大將にはその悲みを少しも面にあらはされなかつた、ただそれを左の名作に寓せられたのであります。

山川草木轉荒涼 十里風腥新戰場

征馬不<sub>レ</sub>前人不<sub>レ</sub>語 金州城外立<sub>三</sub>斜陽<sub>一</sub>

これは日本の武將として非常に立派なことでありませう。

斯様な次第で東西兩洋の文化にはいろ／＼の相違がございます、これ迄英雄豪傑とか、探險家、旅行家といふやう

な人達が東西兩洋に往復しても十分に之を混淆することが出来なかつたのであります、尤も多少はそれがありません例へば、アレキサンダー大王が印度に遠征しました時に、印度の産物を持歸つてこれをその恩師のアリストテレースに進上したといふ話があります、けれども、まだ／＼地理的事情とか軍事的事情とか、其他、色々の事情があつて東西兩洋の文化は對立して居ります、其の結果、東西兩洋の諸國の競争、不和、衝突延いては戦争となるのであります、そこで、我々日本國民としては茲にその文化的使命が発見されはしないかと思ひます、即ち我々は十分、日本なり、支那なり、印度なり、東洋諸國の文化を研究することは勿論、又西洋諸國の文化を研究して、東西兩洋の文化の十分なる混淆を圖つて、より高度の世界文化を創造するのであります、これが日本國民の輝しい文化的使命であると私は思ふのであります、今日、世界に文化國民といふものは澤山ございますが、日本人程東洋文化を理解して居るものはありません、日本人程儒教に通じ、佛教に通じて居るものは西洋にも東洋にもございませぬ、現に眞の儒教はその郷國支那に於いては亡ぶるに垂んとし、同じく眞の佛教はその郷國印度に於いて亡びて了りました、これら二者の存するのは獨り我國のみであります、又日本人は西洋の文化にも十分通じて居ります、東洋に於いて日本人を除いて日本人程西洋の文化を理解して居る民族はありません、前に述べましたやうに、東洋文化にも、亦西洋文化にもそれ／＼長短があります、長所は互ひに學ぶべきであるが、短所が何時迄も短所として残るといふとこれを有する國民の對立、紛争の基になります、ついでには此の東西兩洋の文化を十分混淆して、一にはより高度の世界文化を創造し、又一には東西兩洋の文化國の對立、紛争を除いて、世界の永遠の平和を招來することは我が日本國民の文化的人道的使命であると固く信ずる次第であります。

然らば、此の大なる使命は果して何時、果さるるでありませうか、それはひとり神のみ知り給ふ事でありませう、けれども、若し此の大使命が果されれば、日本民族は必ずや世界史の上で餘程澤山の頁を占めるやうになると思ひます、今日、日本國民の世界的躍進といふものは實に素晴らしいのであります、私は日本民族の文化的人道的使命の達成といふ看點から見ましては未だく、足りないところがあると考へます、何故かならば、物質的方面から見ましても、將た又、精神的方面から見ましても、日本國民は相當、自戒自省すべきところがあるからであります、例へば、彼等の體力や健康状態が歐米人に比して少からず遜色があることの如きその一であります、結核死亡率の如き、乳兒死亡率の如き我國では可なり高いのでありますが、少くとも今日、第一流の文化國にあつてはこの事實をすつと減じて居ります、又日本國民は堂々たる大國民の襟度の點に於いて考慮すべきところが少くありません、ついでに、今日以後、我々は件の文化的人道的使命を果たすに足る人物を作らねばなりません、さうしてこれが直接の責任者は今日の教育者であります、他のことは一切抜きにして、單に此の點だけを考へて見ても我々は教育者の對祖國的責務といふものが實に大きいことを痛感させられるのであります、今日、教育者を措いて件の大使命を果たすに足る人物を教養する者はありません、私はこの點で皆様ますます、明晰な自覺と不動の信念とを所有せられることを切望して已まぬものであります。

是で今回の講演を終ることゝ致します、三日間に亘りまして、大暑の際にも拘らず、御清聽を頂きましたことを心からお禮を申し上げます。

## 支那事變と國體顯現

文學博士 鹿子木員信氏述

## 支那事變と國體顯現

文學博士 鹿子木員信氏述

只今管長閣下よりお話が御座りました様に、本日松井大將閣下に於かせられましたは、親しく御臨席の上一場のお話を遊ばさるゝ御意思であつたのでありますが、其の後參議におなりになりましたので、尙且つ恰度今明日五相會議の決定に基く相當重要な參議會等が催さるゝ段取りに至りました爲に遂にお居出が出来ず、代つて私に宜しく申上げる様にと云ふ御傳言であつたのであります。私も成る可くお居出になつては如何であるかとお勧めしたのであります。右の様な次第でありまして、惡しからず御諒承下いたしますことを私より申上げる次第であります。本日は何時となく鬱陶しい天氣で御座いまして、恐らくお聞きになる皆様に於てもお聞き苦しいことゝ存するのであります。そして頭を勞する者に探りましては此の鬱陶しい天氣と云ふものが、實は最も苦手でありまして、若し秋晴の爽やかなる時でありますれば話をする者にとりましては申す迄もなく、お聞き取りになります皆様も總ての事が極めて明瞭にお判りになるのでありませうが、牛僧今日の如き天氣でありまして定めしお聞き苦しいことゝ思ふのであります。これ共翻つて考へて見ますと、我が日本の國が瑞穂の國と云ふ所以のものは、全く此の貿易風の齋す所謂梅雨若くは梅雨類似の此の氣候であります。これに基きまして極めて豊富な穀物の出来る國となつて居るのであります。世界大戰當時戰爭勃發未だ半歳を経ずして英國、獨逸、伊太利等は食料の不足を告げつゝあつた。然るに今日我が國は實に百

萬に餘る大軍を支那大陸に動かしつゝあるにも拘らず、然も實に一年有餘を經つて居るにも拘らず、日本全國津々浦々に至る迄會つて食料不足の歎きを聞くことは無いのであります。斯くの如きは大体色々原因は御座いませうけれども、全く此の貿易風の齋す天候に基きます時に此の天候も有難く戴く事が大事であると思ひます。のみならず人生は決して光明のみのものでなくして、寧ろ吾々の頭の上に黒風白雨の荒れ狂ふ時が多いのであります。我等は如何なる天氣如何なる風土、如何なる境遇にもめげない勇猛心が必要であると思ひます。如何に暑くあらうと如何に苦しからうと常に吾々の魂は常に朗らかであり、常に勇敢でなければならぬ。希くは此の心意氣を以て話をする者も、聞く者も此の再び來る事の無き此の貴き時間の務めを果し度いと思ふのであります。既に言及致しました様に、吾が國は今日百萬の大軍を動かして居ります。斯くの如きことは日本歴史始つて以來會つて無かりしことでございます。人、口を開けば日露戦役の偉業を稱ふるのであります。既に今日に於きましては日露戦役と雖此の戦役に較べましてはその規模遙かに小なるものであります。戦費の大に於きまして又海軍、陸軍、空軍の活躍に於きまして又之れに参加して居る軍隊の數に於きまして、又其の戦ひの深刻にして其の會戦の數多きに於きまして、更に又我が皇軍の占領しつゝある地域の彪入なるに於きまして、日露戦役の如きは最早や到底同日の談ではないのであります。我が海の荒鷲は殆んど支那四百余州の全地域にその強き翼を試みつゝあります。

而して我海軍は殆んど揚子江の大半を今日までに完全に制壓しつゝあるのであります。揚子江と申せば、支那の生命線と云ふも過言でなきものであります。此の支那の生命線が既に其の過半我が海軍の制壓の下に陥りつゝある。然して我が陸軍は、北はゴビの砂漠に接する内蒙古の殆んど全部を其の強き盾の下に守りつゝ、其の馬を黄河の上流に水かひつゝあります。

神武天皇の肇國このかた、吾々の祖先は今日の如く偉大なる戦役に遭會したことは無かつたのであります。之れを思ひます時、生を此の昭和の御代に亨けて居ります私共の光榮と同時に、その責任の如何に重いものであるかと云ふことが思ひ偲ばれるのであります。此の見地より私共を生を此の昭和の御代に亨けて居ります日本國民としては、徹底的に此の戦役の遂行に貢献し、此の戦役をして有終の美を收めしむべく、不退轉の大決心を養ひ來らなければならぬと存じます。然も其の爲には私共は所謂支那事變の本質が何であるかと云ふことを、明確に把握しなければならぬのであります。

是れ即ち今日支那事變の本質に就きまして愚見の一端を開陳致しまして、皆様の御参考に供しやうと思ふ所以で御座います。

支那事變の依つて起る原因に付きましては、種々な意見が流行して居ないでもありません。例へば支那事變の本質は、日本の對支經濟進出戦であると斯う云ふ言をなす人々が我が國の内外を通じて相當多いので御座います。第一我が國に對し反感敵意をもつて居ります民主主義諸國は、殆んど例外なく何れも今次事變の本質は、日本の對支經濟的帝國主義戦争であると云つて居るのであります。亞米利加然り、英吉利然り、佛蘭西然り、殊にソビエトロシア然りであります。

而して斯う見る者は必らずしも日本に對して反感敵意をもつ之等の諸外國のみならず、日本の朝野の中にも斯くの如き意見を持つて居る人が無いではないのであります。



例へば一部の實業家の間には、此の度の支那事變は北支に於ける經濟的權益確保の爲に呼び起された戰爭である。否、甚だしきに至つては、此の度の事變は基くところ日本紡績の支那進出戰にあると云ふが如きことを云ふ人もないではないのであります。否、私共は日本外務省の代辯者すら、此の事變の起りました當初、此の事變の原因は所謂持てる國と、持たざる國の戦ひにあると云ふが如きことを發表せるを聞いたのであります。持てる國と、持たざる國の争ひならば、夫れは申す迄もなく經濟戰であります。果してさうであるか。私共は暫く足を留めて此の點に對して明確なる答を得なければならぬと思ひます。

然るに深く考へて見ますと、經濟的利益と云ふ點から云へば、日本と致しましては支那と戰ふよりも、寧ろ支那と經濟的に協力提携して支那の資源を開發すると云ふ方が遙かに有利であつたのであります。さればこそ又日本の經濟界は最後に至る迄、支那との戦ひを心から嫌うて居りました。否、今日に於ても日本の財界は決して此の事變を心から歓迎しては居らないのであります。寧ろ反對に、一日も早く此の事變は之れを切り上げて貰ひたいと云ふ希望が口こそ出してみませんけれ共、心の底には漲つてゐるのであります。事變の少し以前、兒玉謙吉氏を團長とする日本の經濟團が支那に渡り、蔣介石等と懇談を重ねて、どうか經濟的提携を仕やうではないかと持ちかけて居ります。それこそ腰を低うし、言葉を厚くして日本の方から經濟的提携を申し出して居ります。これに對して支那殆んど之れを一蹴して居ります。然らば果して支那として之れを經濟的に見て、日本と争ふと云ふことが果して利益であつたかと申しますと、支那の立場に立つて見ましても、日本と戰ふと云ふことは他の點は兎も角、尠くとも經濟的には不利であつたのであります。夫れは事變一年の經過が最も雄辯に物語つて居ります。支那は今日殆んど五十年乃至百年の

經濟的推進力を失つて了つて居ります。支那の茲に至るのは殆んど始めより明らかであつたのです。又是れを支那の經濟的國策と云ふ點に立ちて考へて見ましても、同じ結論に到達するのであります。御承知の通り支那國民政府の根本國策は、其の國本たるところの三民主義によつて決定されてゐます。此の支那の根本國策を決定致しまする三民主義に於きまして、孫文は次の如く説いて居るのであります。支那は無限の人口と、無盡藏の天然資源を持つて居る。それにも拘らず、今日の支那は世界列強の中、最も貧しき最も弱國である。此の無限の天然資源と、無盡藏の人口を持つてゐる國なるに拘らず、世界第一の貧乏國であると云ふ所以は、そも／＼何處にあるか。孫文は答へて申します。夫れは無限の人口と、無盡藏の天然資源を持つて居る共、此の二つのものが結び付いて居らないのである。富を生産する爲には、人の力が天然の資源に加はらなければならぬ。即ち無限の人口を無限の天然資源に結び付けなければならぬ。其の時に支那は無限の富強を來すのである。然るに無限の人口は其の儘では、無盡藏の天然資源に結び付かない。結び付けるには何が必要であるかと云へば、それは先づ第一に學問、技術である。次に資本である。然るに悲しい哉、今日の支那の學問、技術は尙極めて淺薄であり、其の資本も亦云ふに足らない。然も支那が自力を以て學問、技術を起す爲には數十年の久しきを待たなければならぬ。その間に列強は日進月歩の勢を以て非常なる富、非常なる強さを作り上げる。斯くの如き狀況の下に、支那の自力を以て其の復興を圖ると云ふ事は、所謂間尺に合はない。支那は急激に強くならねばならぬ。然らざれば亡びる。急激に無盡藏の人口に、無限の天然資源を結び付けねばならぬ。其の爲には學問、技術、資本等を海外より輸入しなければならぬと説いて居るのであります。而して實際支那は此の三民主義の根本經濟政策の線に副ひまして、旺んに外國より學問、技術を輸入し、尙今

日輸入しつゝあるのであります。そこで更に進んで苟も純粹に經濟的な立場に立ちて、そも／＼何れの外國の學問、技術を輸入することが支那に取つて最も有利であるかと云ふ事となると、言はずと知れたこと、日本の技術、學問を輸入するのが經濟上支那に取りて最も有利であります。と申しますのは、經濟開發と云ふ事に就きまして最も有力なる要素は、距離道程の短少と云ふことであります。此の事は皆様が炭をお買ひになるのに、山奥の炭焼の所では炭一俵が拾錢だとすれば、同じ炭一俵が十里、二十里隔てる町に來ると一圓以上にもなります。斯う云ふことをお考へになれば直ぐお分りになるのであります。同じ炭一俵がどうして炭の出來る山奥では僅かに十錢であるのに、町に來ると十倍もするかと云へば、夫れは即ち道程、距りと云ふものがあるからであります。支那の經濟を興す場合、苟も他の國から援助を受けます以上、何れの國の學問、技術、若くは資本を輸入するのが最も有利であるかと云ふと、最も近い國から援助を仰ぐと云ふことが最も有利であります。さうして支那に最も近い國と云へば、言ふ迄もなく日本であります。のみならず學問、技術を傳達するものは無論人であります。そこで若し其の學問、技術を傳達する人が之れを傳受する人とその風俗、習慣、傳統、歴史、宗教等を異にすれば、其處に傳達に幾多の困難と障害の起る事は申すまでもありません。之れに反して若し歴史の傳統を全く同じくしない迄も、多くの文化的傳統を同じくし、言葉は違つて居ても文字も同じい、人種も或程度迄似て居ると云ふ日本人が支那に参りまして學問、技術を傳達し、指導すると云ふことは西洋人が支那に参りまして學問、技術を傳達するより如何程容易であるかと云ふことは申す迄もないことであります。何と申しましたも日支兩國は、二千年の久しきに亘り同じき文化圏内に住んで居た國民であります。日本の文字は今日尙支那の文字を借りて用ひて居ります。従つて又多くの漢語が今日日本語として其の儘通

用されつゝあるのであります。之れに加ふるに風俗、習慣の彼此有無相通するもの決して尠くないのであります。斯う云ふ状況ですから、支那の人は比較的容易に日本の書物を讀むことが出来る。又日本の人も支那語の分りは早いのであります。之等のことを考へ合せますと、支那と致しましては、日本の資本及び技術等に俟つことが最も有利であつたのです。それにも拘らず、支那は日本との經濟的提携を拒絶致しました。是れに依つて見ますと、日本に取りましても、又支那にとりましても、日支兩國相提携すると云ふことが、尠くとも經濟的に有利であつたのに拘らず遂に不具戴天の關係に迄立ち到つたと云ふことそのことが、此の度の日支兩國の戰爭が決して經濟に其の根本原因を持つて居ないと云ふ何よりの証據であります。次に是れ又國の内外を通じて本事變の本質を以て、日支兩國の民族戰であるとなす見解がないではありません。即ち日支兩民族は、今や遂に兩々相容れざる關係に立ち至つた。日本が支那を呑むか、支那が日本を呑むかと云ふ瀬戸際に立ち至つて、此の戰が起つたのである。即ち本事變の本質は民族戰であると云ふのであります。果してさうであるか。私共は少くとも此の事變に關して賜はりましたる御勅語の御精神を拜讀し、又事變に關する内閣總理大臣の告諭を拜見致します時に、さうでないといはざるを得ないのであります。恐れ多いことでありますが、御勅語に於ても、亦内閣總理大臣の告諭にも、今次事變に於て我が皇軍は決して支那民衆を敵とするものでないと云ふことが、繰返し繰返し指摘されて居ります。實事又支那に於ける我が百萬の皇軍は、支那民衆を相手として戦ひつゝあるのでないのであります。否、寧ろ多くの犠牲を拂つて支那民衆の福利を念として居るのであります。今次事變の本質を、日支兩國の民族戰であると見ることは尠くも肯綮を穿てる言とは受取り得ないのであります。

第三に一部の論者の中には、此の事變を以て東亞に於ける日支兩國の政治的爭覇戰であると視る者も絶無ではないのであります。即ち誰がアジアの支配者となるのであるか。支那か日本か。之を決する爲に此の戰爭が起つて居るのであると云ふのです。併し少し考へて見ます時に、その全然誤謬であることが分るのであります。と申しますのは最近の支那は政治と云ふ点を他に對しましては、悉く其の獨立性を失つて居たのでございます。之れを經濟と云ふ立場に就て申しますれば、國民經濟の根幹をなして居ります交通事業、生産の根本をなすところの動力、殊に電氣事業等、其の殆んど全部は支那自身のものでなく、寧ろ外國のものであります。之れを鐵道、沿岸航路、乃至は長江航路等の航海事業若くは又支那にも發達して參りました。所謂航空事業について申しましても、その殆んど凡ては外國によつて經營されて居るのであります。

又金融に致しましても、一昨年の幣制改革の如きは支那が自力を以てなし遂げたものではなく、ユダヤ系英吉利資本の力に依つて始めて成就したものであります。

而して斯くの如きは決して經濟財政に限つたことではないのでありまして、思想、學問、文化の領域について見ましても支那は既にその獨立性を失つて居ります。例へば思想に付て申しますれば、今日支那の思想を支配して居るものは、三民主義にあらずんば共產主義であります。之等は何れも近世西洋思想の淺滓糟粕に過ぎないものです。又其の學問はどうかと云ひますと、今日支那の大學の何處に支那獨特の學問があるかと云へば、殆んど無いと云ふの優れるに如かないのであります。殆んど其の總ては西洋の學問の受け賣りに過ぎないのであります。又之れを一般に文化と云ふ点に付て見まするのに、支那には確かに價值のある獨自の文化があつたのです。何故に或は唐、或は宋、下つ

ては元の時代に至るまで日本が留學生を派遣したかと申しますと、當時の支那に或種の精神的、物質的文化が有つた爲であります。私共は今日尙ほ當時の支那文化の面影を、支那に留學せる日本學者の書き物や、又その携え歸れる文化的遺品に依つて、或程度まで之れを偲ぶことが出來ます。

然るに今日の支那には、古の高き文化の遺蘊は殆んど地を拂つて空しいのであります。支那今日の文化は、洵に低劣俗惡極るものであります。それは淺薄なる西洋文化の摸倣に過ぎないのであります。更に之れを政治や軍事に付いて見ましても同じであります。如何にも今日支那の軍隊は日清戰爭當時と異り、極めて勇猛果敢に戦ひつゝあります。然らば支那軍隊の戰鬪意識を旺盛ならしめつゝある思想は何であるかと云へば、それは支那固有のものでなく、借りものであります。三民主義と謂ふ西洋からの借りもの思想で踊らされてゐるのです。

而して彼等の武器は如何なる武器であるかと云ふに、支那人自身の作つた武器ではないのであります。飛行機は無論のこと大砲、機關銃、小銃に至るまでその大部分は總て英吉利、佛蘭西、チエツコ、ソヴィエツトロシア等の兵器工廠の生産品であります。若し支那國産の武器があるとすれば、夫れは手榴弾位のものであります。

更に進んで支那の上海防禦軍が、依つて以て數箇月の久しきに亘つて頑強に我が皇軍に抵抗せる防禦陣地なるものは、是れ又支那軍の自ら築いたものではないのであります。上海より南京に至る支那防禦陣地の構築は、悉く當時の獨逸軍事顧問の緻密なる計畫に基いた防禦陣地であつたのであります。更に進んで徐州會戦に至ります迄の支那軍の策戦は、是又支那軍自身の頭から生れたものでなく、當時迄尙支那軍の軍事顧問をして居りました優秀な獨逸陸軍將校の頭から生れた策戦であつたのです。之等の事實の指摘に依りましてもお分りにならうと思ひますが、軍事と云ふ

点に於ても支那は既にその獨立性をもつて居らないのであります。夫れにも拘らず、只一点に於て支那は依然としてその獨立を保ち來つたのであります。夫れは即ち支那國家の政治的獨立であります。然らば他の凡ての領域に於て其の獨立性を喪失して居るに拘らず、獨り政治の領域に於てその獨立を保持し得た所以のものは何處にあるか。之れは普通の規則に付て申しますれば、思想的、經濟的、文化的にその獨立性を失へる國家は、當然又其の政治的獨立を失ふのを通例と致します。夫れにも拘らず、支那は總ての領域に於て其の獨立性を失へるに拘らず、獨り政治の領域に於てのみ獨立を全ふしつゝある所以は何處にあるか。それは歴史を検討致しますれば明かなことではありますが、全く東亞細亞に於ける我が皇國日本の力強い存在に負つてゐるのであります。若し東亞細亞に皇國日本の力強い存在が無かつたならば、支那は既に遠くの昔、或は歐米各國の分割する所となり、或は國際聯盟の共同管理の下に立つて至つて居たのであります。近くは昭和六七年の滿洲事變に際し、支那は將にその政治的獨立を失はうとして居つたのです。それを堰き止めたのは外ならぬ日本であつたのです。と申しますのは、あのゼネヴに於ける國際聯盟は、支那事變解決案を日支兩國に提示したのであります。有名ナリットン調査團の調査に基く日支事變解決案が、即ちそれでありま

す。

然るにあの國際聯盟の事變解決案なるものを深く解剖して見ますと、結局支那を當分の間、國際聯盟の下に置くこと云ふことになるのであります。當の支那は此の提案に賛成し、シヤムは棄權し、而して日本のみが當時列席して居りました。四十數箇國の中、只獨り此の案を一蹴致しました。而して此の日本の一蹴に依り、支那は今日まで完全にその政治的獨立を保持することが出來たのであります。若し斯くの如くたゞ日本の力強い存在があるばかりで、漸く支

那がその政治的獨立を保持し來つたのであるからには、支那が進んで日本と政治的に協力提携すると致しましたならば、支那の國際的政治的地位は高まるであらうか、低まるであらうかと云ふに、私は恐れ多い事ではありますが、天皇陛下の大御心を拜察し奉る時に、支那の政治的地位は必らず高まつたであらうと確信して疑はないのであります。換言すれば日本に取りましても、支那に取りましても、政治的に提携協力すると云ふことは双方に取りて有利であつたのであります。

夫れにも拘らず、支那は斷乎として日本との政治的提携をも一蹴したのである。以上の検討に依りまして、恐らく皆様は此の度の支那事變は、日本の經濟的侵略的意志に依つて起つたのでもなく、又それは日支兩國間の民族戦でもなく、又政治的爭覇戦でもないと云ふことがお分りになつたことと思ふのであります。

然らば事變の本質は何處にあるのであるか。此の間に對する明確なる認識を得ます爲には、私共は翻つて暫く中華民國なるものゝ根本機構を検討して見る必要があるのであります。中華民國なるものは申す迄もなく、今年を以て二十八の齡を算へて居るのであります。而して最近數十年と云ふものは、此の中華民國の實質は所謂國民政府であります。

而して此の國民政府と云ふものは、言ふ迄もなく支那國民黨の権力行政組織に他ならなかつたのであります。従つて中華民國と云ふ國家の實質は國民黨であるのです。これ即ち黨國の名ある所以です。

然らば實質上今日の中華民國をつくり上げて居るこの支那國民黨なるものは、如何なる精神如何なる思想に依つて集結され、結成され、而して推進されつゝあるかと申しますと、國民黨の根本精神は三民主義の思想に他ならんので

あります。換言すれば、孫文の考へ出しました三民主義と云ふ思想が漸次支那の青年を教育し、之れを團結せしめその團結を擴大強化し、漸次その團結力を以て他の競走相手を打倒し、茲に國民政府を結成するに成功し、此の國民政府が實質上中華民國と云ふ國家を構成して居る現状であります。

即ち今日支那の國家の魂とも云ふべきものは、他でも無い三民主義と云ふ思想であります。私共は先づ此のことを判然と牢記する必要があります。今日の支那國民政府の根本國策、其の外交政策等の根本的動向を明かにする爲にはどうしても其の魂であり、其の推進力である所の三民主義の何たるかを明確にしなければならぬのであります。茲に於てか三民主義とは何ぞやと云ふ根本問題に逢着する次第であります。三民主義とは

第一に民族主義であります。

第二に民權主義であります。

第三に民生主義であります。

何れも『民』と云ふ字を以て首まる以上の三つの主義綱領の總稱に他ならぬのであります。然らば第一の民族主義と呼ぶところのものは如何なる主義主張のものであるか。其の説明に入ります前に、先づ私は此の三民主義は約三十三數年前否、寧ろ約四十年前始めて孫文の提唱にかゝり、之に依つて孫文は其の同志を集め、同志の教育鍛練に携つたと云ふことを付け加へて置きます。

孫文は恰度今年より溯りまして十四年前、即ち大正十三年始めて組織的に此の三民主義を秩序立て、それを口述致しまして其の速記録を訂正して、之れを書物として刊行し、それを支那一般國民の根本經典としたのであります。私

共は三民主義が書物に成る以前孫文がどう云ふ風にその思想を説いて居たかを明かにする由も無いのであります。彼が十四年前口述せる所のものは聽て支那國民の根本經典としてその日夕熟讀熱讀するところでありましたから、其の書物に依つて明確に之れを把握することが出来るのであります。然らば其の所謂民族主義なるものはどう云ふ主張であるか、孫文は近世に於ける支那衰亡の原因をたづねて申します。支那は世界最大の領土を有し、無盡藏の資源を擁し、然も四億に餘る人口を有して居る大國である。夫れにも拘らず今日の支那は世界に於ける最も貧弱なる國家であり、其の衰勢は寧ろ日を追つて甚しからんとして居る。其の原因は何處にあるか。孫文のこれに對する答は支那衰退の根本原因は、支那國民の間より民族的精神の喪失せるにあると云ふのです。四隣の強國悉く民族主義を以て奮ひ起りつゝある時に、獨り我が支那國民のみは、一身一家を重しとなして國家民族をその念頭に置かなかつた。是れが爲に支那民族は國家的に、民族的に、一致團結の力を缺き、それに反し他の國民、他の民族は小なりと雖も一致團結の實を擧げ、以て國際爭競場裡に於ける競争に打ち勝ちつゝあるのである。

此の故に再び支那を興す爲にはどうしても、今一度支那國民の間に、一國一民族を一身一家より重しとする國家的思想を養成しなければならぬと、之れ即ち孫文が民族主義を説く所以であります。

此の孫文の議論に對しては滿腔の同情同感を禁じ得ないのであります。併し進んでその所謂民族主義の内容を檢討するに及んでは、失望を禁じ得ないのであります。蓋し孫文にありましては、其の言ふところの民族主義なるものは、決して本當の民族主義ではないのです。私共が日本民族主義と云へば、當然其の民族主義の内容たり、その精神たるところのものは、三千年の久しきに亘り、日本國民を導いて今日の偉大に達せしめたところの其の精神を指すの

であります。而して悠久三千年、終始一貫日本民族を陶冶、鍛鍊、保持、指導し來れるところのものは、惟神の國体の信念であります。日本民族主義の内容は、申す迄もなく惟神の國体の精神、天壤無窮の皇運扶翼の精神を指して居るのであります。

又今日ナチス獨逸の人々が、獨逸民族主義と申しますその時に、彼の民族主義なるもの、實質内容は、二千數百年の久しく獨逸民族を指導して獨逸特有の高き文化を生ましめた傳統的、歴史的精神を指差して居るのであります。従つて又支那民族主義と云ふ言葉を聞きます時に、私共は自然支那四千年の歴史を貫いて、支那をして倫理的、道徳的な文化國たらしめ來つたあの王道の精神、支那第一の哲人であり、賢者でありました孔子をして終生之れが説明、之れが解釋、之れが祖述に没頭せしめましたあの王道の道徳的世界觀の思想こそ、支那民族精神の内容であると信ずるのであります。

然るに私共の期待は全く裏切られるのでありまして、孫文の所謂民族主義の實質内容を構成するものは孔子の思想でなく、否支那の思想とは何の關係もない近世歐米の民主主義、社會主義の思想であつたのであります。

即ち三民主義第一の民族主義の内容は、第二第三の民權主義、民主主義の思想に外ならないのであります。然らば三民主義の第二の主義たる民權主義とは如何なる思想であるか。之れは申す迄もなく、近世歐米のデモクラシーの直釋であります。孫文は繰り返し繰り返し彼の三民主義の中に、民權主義は近世歐米の思想である。自分の説くところの民權主義は、歐米傳來の思想であると云ふことを高調して居ります。然らば此の民權主義とは如何なる思想であるか。申す迄もなく、個人主義的、自由主義的的人生觀の政治的表現に他ならぬのであります。即ち人間の生命にありて

は個人が先である。個人の利害に基づくところの協定によりて社會が出來、國家が出來ると斯う見る思想であります。斯くの如く個人を宗とし、個人を主とするところから所謂多數決原理が生れます。物事を決めるのに正しいか、悪いかと云ふことで決めずに、決着するところ多數を以て決する政治、之れが所謂民權主義の根本の建前であります。而して數と云ふ点から申しますと、無論君に對して民が多いのであります。従つて君は従であつて、民は主である。所謂民主主義と云ふ考へが起つて來るのであります。

而して此の民主主義的政治理論に依りますと、民權主義的、政治的体制が最も進歩した政治的体制である。是れに反して一人若くは少數者を主とする政治体制は、未開蒙昧の政治であると、斯う云ふ考へを以て居るのであります。私の看るところを以て致しますれば、孫文が新しき支那の國家の根本綱領として、此のデモクラシーの原理を採り來つたことは、實に日支兩國の運命に取つて決定的のことであつたのです。と申しますのは、今申しました様に、支那が民主的政治体制を以て國本とするが爲に、自然其の國民に向つて民主主義の如何に貴く、然らざる政治体制が如何に野蠻であるかと云ふことを説かざるを得ないのであります。更に支那は、其の民主主義的思想を自分自身の力で生み出して居りません。フランス革命以來の歐米思想を摸倣したのであります。然るに摸倣者の心理と致しまして、其の摸倣するところのものを崇拜する事、摸倣されるものが自分自身を評價するに優るものがあります。分り易くこれを申しますれば、民主主義に關する限り民主主義の發祥地でありますフランス、或はアメリカ等が民主主義を評價するより、之れを摸倣する支那の方が民主主義に傾倒すること一層甚しきものがあるのであります。更に又フランスに致しましても、アメリカに致しましても、是等の國々に於きましては政治は必ずしも萬能ではありません。歐

米諸國に於きましては政治は唯政治であつて、その他に經濟がある、宗教がある、道德がある、學問がある、又傳統的、歴史的な良風美俗がある。然るに是れ等の歐米に於ける宗教、道德、學問若くは傳統的、社會的良風美俗は必ずしも民主主義的のものではございません。寧ろその反對です。従つて之等の哲學、道德、宗教、社會的良風美俗等が民主主義的政治思想の誤謬を是正しつゝあるのであります。然るに支那に於ては總てのものを三民主義を以て律したのです。哲學も、宗教も、道德も、從來の支那の良風美俗も之れを一掃し、之れに代ふるに三民主義を以て致しました。然るに三民主義の中心思想は民主主義と、而して各個人の自由の實現を理想とするマルクス主義であります。而して此の民主主義、共產主義的立場から考へます時に日本の國體、國家は無論君主體制であり、其の君主は體て又現神に在す 天皇であります。と云ふことは、民主主義の見地から言へば日本は獨り君主主義の政治體制を以て居るのみならず、神權主義的政體を以て居る。即ち日本は君主主義、神權主義と云ふが如き蒙昧未開の國であると云ふのです。かくして此の思想より支那國民の間に日本國體、國家に對する此の上なき侮蔑、排撃の思想が湧いて來たのであります。即ち此の民權主義は必然毎日、排日の思想を養ひ來つたのであります。支那に於ける排日、侮日の思想は決して一朝一夕のものでは無いのです。單なる政策でもないのであります。實に中華民國の根本綱領であります。従つて三民主義を國本とする中華民國の存する限り排日、侮日の根本國策は之れを如何ともすることが出來ないので。私共日本國民は此のことを暫くも忘れてはならない。此の事實を明かに牢記して、今次事變の徹底的解決に向つて勇往邁進しなければならぬと思ひます。

第二に所謂民生主義と呼ぶところのものも亦、民主主義と共に今日支那國家の根本綱領であります。孫文自らの云

ふところに依りますれば、民生主義は即ち共產主義であり、社會主義であります。私共は此の言を疑ふ必要はない。大体孫文と言ふ人は、理論的には極めて急進過激の傾きを以て居た人でありましたが、實際實務と云ふ点になりますと、極めて老練なる實務家でありました。而して此の實際家の實務と云ふ立場から今日の支那を見ますと、今日の支那にマルクス共產主義を其儘適用するが如きは、實際途方も無い見當はづれの事であつたのです。孫文自らマルクス共產主義の眼目とするところは、富の分配である。従つてマルクス共產主義は、當然富の存在を前提として居たのである。然るに翻つて支那を見よ。支那は此上なき貧乏に苦んで居る。富を分配し得るが爲めには、富がなければならぬ。その富は支那にはない。支那では先づ富を作らねばならぬ。富を増すのは生産である。従つて最も支那に大切なものは富の生産であると、洵に至富の言をなして居ります。而して此の見地から大膽に外國の學問、技術、資本を輸入すべしと言つて居ります。けれ共之れは實務家としての孫文の考へでありまして、孫文の本心は寧ろ共產主義にあつたのであります。

孫文自ら共產主義と、彼の民生主義の異同を辨じて共產主義は民生の理想であり、民生主義は共產主義の實行である。共產主義と民生主義とは、根本に於て異なるところはないと言ひ切つて居ります。共產主義は實に孫文の理想とする所であつたのです。従つて共產主義の大成者マルクスに對する孫文の尊崇は、殆んど意想外に熱烈なるものがあります。

即ち孫文は三民主義のある個所に於て、私共から見ますと最もゆがんだよこしまな魂の持主でありましたカールマルクスを、人もあらうに支那第一の聖人たる孔子と並び稱し、之れを聖人と稱して居ります。或る所に於きましては

マルクスを以て世界人類數千年の經驗を大成せる、世界第一の學者であると云ふ意味のことを申して居ります。あの迷妄邪惡のマルクスを稱して大學者であると云ふに至つては、私は啞然として之れを評するの辭なきものであります。ものを知らなさ過ぎるのにも程があります。それは兎も角斯くの如くでありますから、マルクス共産主義の上に國を成すソビエツト聯邦に對する孫文のソビエツト露西亞に對する尊崇は、一通りではありません。恰度今から十四年前、孫文の將に日本を去らんとするに當り、神戸の高等女學校講堂で神戸商工會議所其他五團體の聽衆を前にして、大亞細亞主義と云ふ題の下に一場の講演をして居ります。それは如何なる内容であつたかと申しますと、今日世界國多しと雖も、ソビエツト露西亞の如き正義、人道を以て國本として居る國は他に無い。此の点に於て今日のソビエツトロシヤは、古へ支那の王道政治と合致する。夫れ故中華民國は今後ソビエツト露西亞と一致協力して進んで行く積りである。日本はどうなさるお考か。依然として西洋の侵略的列強の驥尾に附し、其の番犬の勤めをする積りか。夫れとも吾々と提携して行く氣はないかと云ふのであります。之れに依つて見ましても、孫文の所謂大亞細亞主義なるものは、要するに亞細亞赤化主義であつた事は火を視るよりも明かであります。而して彼は、日本の聽衆に向つて勸說せる其の聯露容共の國策を中華民國の國策として、彼れの同志の間に残したのであります。然るに其のソビエツトロシヤは、日本國家と如何なる關係にありますか。ソビエツトロシヤはマルクス共産主義をその國本とする國家である。然るにマルクス共産主義なるものは、分り易く云へば個人自由主義の普及版、大衆版とも云ふべき性質のものであります。個人自由主義を奉ずる点に於て、資本主義も共産主義も歸を一にしてゐるのです。即ちマルクス共産主義の建設者である、マルクスやエンゲルス等の思想をしらべて見ますに、彼等の最高の理想とするところは『自由』であり

ます。ただ資本主義的自由主義に於きましては、實際個人の自由を享樂し得る者は資本家階級に限られ、大多數の勤勞階級は經濟的理由の下に、個人の自由を擅にすることが出来ない。みんなが各々その自由を享樂する爲には、資本主義では駄目だ。どうしても資本主義を打倒して共産主義を樹てなければならぬと言ふのが、共産主義の議論なんです。資本主義も、共産主義も、その根本の世界觀は同様であります。相違するところは一方は少數の人にのみ自由を與へる事が出来るに反し、他方は少くも理論的には總ての人、若しくは多くの人に個人の自由を享樂させる様にしやうと云ふてあるのであります。

然るに茲に吾人の考へねばならぬ事は、個人の自由と云ふことが果して正當なことであるであらうか。若し人間各自の生命と云ふものが、恰も神の生命の如く、自分に由つて生れ來れるものであり、自分によつて教へ導かれて今日あるを得てゐるのでありますならば、夫れは個人の自由と云ふことは絶対原理となつて來ます。然るに人間の内何人が自分自身の親であり、自分自身の先生でありますか。私共は自分より生れたのではない。悉く他より即ち親より生れて來、又先生によつて教へられて始めて事の善惡が分る様になりつゝあるのです。之れ即ち佛教に天地の恩、君の恩、親の恩、衆生の恩等人間に四恩あるを教ふる所以であります。人の生命は徹頭徹尾他のお蔭によつて始めてそのあるを得つゝある。換言すれば人間各自の存在と云ふものは、自らのうちにその本源を持つものでなく、之れを他に即ち祖先、神に仰いでゐるのであります。此の故に私共人生の行路を往くに際し、自分を主として感じ、考へ、意志し行ふと云ふことは、根本的に間違つて居るのであります。祖先民族全体有つて始めて私共各自があるのです。此の故に私共と致しましては、常に全体を先き立て、然る後己れを立てなければならぬのです。然るに近世西洋政治思



想は、恰も個々の私の自由が世界に於ける最も高いものであるかの如く誤り思つて、自由主義的世界觀を奉じ遂に共產主義と云ふが如きものが生れ來つたのであります。唯だソヴェットロシア以外の他の歐米諸國に於きましては、個人自由主義的な政治思想に對し、傳統的の宗教、道德、社會の良風美俗等の力が強くありまして、國民生活に於ける自由主義的弊風を常に矯めつゝあるのであります。然るにソヴェットロシアに於ては總ての傳統的宗教、道德、社會の良風美俗等を一掃致して、其の跡へ唯一の世界觀、唯一の宗教、唯一の社會的習俗としてマルクス共產主義が自らを確立し、その鬼畜の思想を持ちまして、一億五千萬のロシア人を鬼畜の群に驅り立てつゝあるのであります。繰り返して申しますれば、人はお蔭を以て有るのであります。然るに此の根本事實を忘却して恰も自分に由つて有り、従つて銘々の利益、享樂が最高のものであるかの如くに誤り思ひ、此の誤れる思想の上に社會を建て、國を成さんとするのでありますから、勢の趨くところ遂に今日のソヴェット聯邦に見るが如き鬼畜の境界を現出し、遂には親は子を疑ひ、子は親に背き、妻は夫を裏切り、夫は妻を棄て、母は子を棄て、願みず、友は友を疑ひ、同志の間と雖も一日として信頼するを得ず、遂に一億五千萬人の國民を支配するものは、萬人の萬人に對する戰であります。之れはマルクス共產主義支配の歸結であります。

然るに我が皇御國の國體は、所謂全体主義的人生觀の最も典型的のものであります。此の故に此の皇御國とソヴェットロシアの共產主義國家とは、世界觀的には全く不倶戴天の關係にあるのであります。さればこそソヴェットロシアの老獪なる指導者等は、あらゆる手段を以ちまして、此の日本國體國家の崩壞を策すべく日も是れ足らない有様であります。日本の華とも云ふ可き優秀なる青年子弟を收容して居る我帝國大學、高等學校等が何故に赤化の本山とな

り、赤化巢窟となつて來たのであるか。之れはソヴェットロシア側に於ける計画的策戰行動の結果に外ならぬのであります。日本の將來を負担すべき日本の華とも云ふ可き青年子弟を籠絡し、之れを其の味方とし、手先とすることに依つて最も確實に日本國體國家を崩壞せしむることが出來ると考へたのであります。之に依りましても如何に我が國體國家がマルクス共產主義的ソヴェットロシアと、不倶戴天の關係にあると云ふことが分るであらうと思ひます。然るに三民主義を奉ずる隣邦中華民國は、實に此の日本に對して不倶戴天の關係にあるソヴェットロシアと結んで行かうと云ふのでありますから、ソヴェットロシアの抗日意識は、自ら三民主義に傳播せざるを得ないのであります。従つて抗日意識は、三民主義中の民生主義に附隨して生れて來るのであります。民生主義を奉ずる限り、支那の抗日は必然であります。之れに依つて支那の三民主義なるものが、民族主義と云ふ内容空虚な外殼に、毎日思想を伴ふ民權主義又抗日意識を必然に伴ふ民生主義を充填した排日、抗日の爆彈であつたことが分るのであります。民族主義と云ふのは恰度中の空な鉄丸で、その空虚な鉄丸に排日、毎日の思想を隨伴する民主主義抗日の意識を隨伴する民生主義を充填し、出來上る抗日爆彈が即ち三民主義であるのです。此の爆彈が中華民國の魂であり、推進力である以上、一度日支兩國の生命線の接觸するや否や、遂に爆發を見るに至るべきは、識者を俟ちて始めて知ることではなかつたのであります。

斯く申しますと或は先見の明を誇るかにお聞きでございませうけれども、卒直に申しますと、私共は既に兩三年前日支間のこと鮮血を以て洗ふにあらざる限りその解決の道なきを直感し、之れを卒直に述べておつたのであります。従つて昨年七月七日蘆溝橋事件の起りました時、私共は直ちに日本政府の事件不擴大の方針にも拘らず、此の事變は

全面的破局に至らざるを得ぬと云ふことを直言し、之れに對する用意と、覺悟を國民有識の方々に訴へて來たのであります。

本事變の本質は經濟戰にあらず、民族戰にあらず、又政事爭覇戰に非ず、實に思想戰であります。思想戰でありますが故に、此の事變は利害の打算を超越して居るのであります。此の三民主義的思想の存する限り、支那事變は續きます。故に私共は此の思想に基く支那の總ての政治的、軍事的、經濟的、權力に對して全滅的打撃を與へねばなりません。然らざる限り、此の事變の終熄は之れを期することは出来ない。従つて日本に於きましては此の事變の本質は思想である。従つて利害の打算を超越してゐる。従つて徹底的である。従つて此の事變の有終の美を成す爲には、日本國民は純日本の使命を闡明にし、之れを自覺せねばならない。斯くして私は、最後に國內に於ける思想の統制と云ふことを一言申上げて見たいと思ひます。

今次事變が決して經濟的利害に基くものでもなく、民族鬭争でもなく、更に政治争覇戰でもないものであつて、實に其の本質は思想の相違に基くものであると云ふことを申上げたのであります。本事變の本質が、日支兩國の思想の相違に基くものであります。故に、支那事變は一面總ての利害關係を超越致しまして、長期深刻の形態を採りつゝあると同時に他面、其の國際的關係に於きましても思想戰の線に副ひ、各種各様の合縱連衡が行はれつゝあるのであります。先づ第一に此の支那事變を呼び起して居ります三民主義の中心思想は、民權主義所謂民主主義の思想であります。今日の支那は民主を以てつて其の國本として居るのであります。

此の故に世界に於ける總ての民主國家は、其の思想的同情の故に依り、自ら支那に對して或は精神的、道徳的支持

を與へ、或は更に一步を進めて政治的、經濟的、軍事的の支援を與へつゝある状態であります。先づ第一に世界に於ける民主主義の隨一とも云ふべきアメリカ合衆國は、經濟的の見地から申しますれば、日本には極めて緊密の間柄であることは今更申す迄もないのであります。日本に取りましてアメリカと云ふ國は、生糸の輸出先であります。所謂大切なお得意先であります。尙其の他各種各様の雜貨は、主としてアメリカを目標として輸出されて居る状態であります。又アメリカに取りまして日本は或は綿花、或は鐵と云ふが如き其の農産物や、重要工業品の輸出國であります。綿花、鐵と云ふが如き原料品の他に尙自動車其の他の重工業用の機械等尠からぬ量に於きまして、日本に向つて輸出されつゝある状態であります。即ち之れ等のことに依つても、經濟的には日米兩國は切つても切れぬ様な密接な友好關係にあります。にも拘らず、今日のアメリカ一般の輿論は、極めて日本に對して險惡であります。辛にして日本に居られますグルー亞米利加大使は、相當日本のことを理解して居られまして、極めて親日的な政策を以て本國を指導して居られると云ふことは、幸にして日米の國交を今日迄破綻なからしめ來つた原因でありまして、一般アメリカの輿論と云ふ点から申しますと、日米の關係と云ふものは相當危険なものがあります。而して斯くの如くなる所以は、實にアメリカが民主の國であると云ふ一点に歸着するのであります。多くの点から申しますれば、アメリカは支那より寧ろ日本に同情を持つべき理由があるのであります。にも拘らず、今日アメリカが極力支那に向つて同情支援をしつゝあると云ふ所以のものは、一に支那がアメリカと同様に民主主義の國本を奉じて居るが故に外ならぬのであります。翻つてフランスも同様であります。御承知の通りフランスと云ふ國は、亞細亞に於きまして相當廣汎な殖民地を持つて居り、經濟的利權を持つて居ります。而して之等の經濟的利權若しくはフランスの殖民地と云ふが如

きものは、若し日佛交戦の曉には直ちに日本の蹂躪するところとなることは、火を視るより明かなことであります。夫れにも拘らず、フランスは常に排日親支の政策を探り、尠からぬ數量を以て武器を支那に輸入し、我が皇軍を苦しめつゝあると云ふことは、フランスも生粋の民主國家であることが根本の理由であります。又英吉利は其の形式こそ君主國の形骸を残して居りますが、其の實質、其の精神に至りましては、紛ふ方なき民主國家であります。之れが英吉利を驅り立て、日本を挫く爲にあらゆる手段を以て支那國民政權を支持し、強化しやうと努めて居る所以であります。之等の歐米民主主義國家は、何れも南支方面に其の入口を求めまして、それより軍事的、經濟的、政治的對支援助の幹線を漢口に迄伸ばして居るのであります。而して之等の歐米民主主義國家群の對支援助の重点は、何と申しましても廣東及香港であります。香港は英吉利の領地でありまして、日本が英吉利に對して宣戰の布告をなさん限り攻撃は出来ない。廣東は支那の領地であります。而して廣東が英吉利、佛蘭西等の對支援助物資集積地であります。此の廣東より粵漢鐵路に依り歐米産の軍需品が、抗日支那の中心たる漢口に無盡藏に流れ込みつゝあるのであります。之れ即ち本來極めて羸弱な國民政府の抵抗力を驚くべき程強靱ならしめつゝある所以であります。若し此の歐米軍需工業の無盡藏の支援が無かつたならば、此の事變は尠くとも半歳前には既に徹底的解決を見て居る筈であります。然らざる所以は、歐米民主主義國家群が支那援助を目的として、あらゆる武器、彈藥等の供給をなしつゝあるからであります。

斯う云ふ譯でありますから、日本と致しましては此の支那事變を急速に終局に導く爲には、是非共廣東攻略に依り粵漢鐵路の死命を制すると云ふことは、一刻も早くなさなければならなかつた作戦であつたのです。洩れ聞くと

# 欠

# 欠

となつたのであります。即ちヒットラーに率ゐられた民族社會黨が、各種各様の民主々義的社會主義的政黨を壓倒して、恰度五年前、獨逸の政權を獲得し、ヒットラーが獨逸の指導者と云ふ地位に立ち至つたのであります。けれども當時獨逸の國家其のもの例へば獨逸の官僚、獨逸の軍部若くは獨逸の外務省、獨逸の大藏省、若くは其の銀行と云ふが如きものは舊來の獨逸の機構そのまゝであつた。無論ヒットラー其の人は其の政權を獲得した其の日から、直ぐさま其の理想とするところの獨逸民族主義と云ふものを、獨逸國家の各般各方面に適用すべく努力して來たのであります。が、牢固として固き獨逸在來の機構なり、思想なり、利害關係なりは一朝にして之れを改變することが出來ないのであります。

而して牢固として固き勢力に官僚有り、軍部有り、又財閥があつたのであります。而して此の在來の獨逸の軍部は極東問題に關する限り、何れにかと申しますと、日本より支那の方に多くの利害關係を持つて居たのであります。即ち昭和八年の頃から大戰後の獨逸國防軍の建設者でありましたゼークト將軍が、支那の最高軍事顧問として聘せられて居ります。其の死去するのの際しては其の後任者として、ファルケンハウゼン將軍が參つてゐたのであります。極めて優秀な獨逸將校を以て一團とし、茲に支那陸軍建設本部を構成して居たのであります。之れ即ち最近に至ります迄、支那百數十萬の大軍が實質に於て獨逸陸軍の指揮の下に戰つてゐたと云つても好い所以であります。然るにヒットラー其の人は、殆んど生れながらにしてと云つても宜い位に親日の人であります。殊にその奉ずる民族主義的指導者國家の思想に至りましては、寧ろ其の範を日本の國体に仰いで居られると云ふことも過言ではないのであります。夫れ故にヒットラーの政策は、獨逸陸軍の政策を廢棄すると云ふのであつたのであります。が、政權を執つて日尙淺く

未だ獨逸の陸軍をその掌中に掌握するに至らなかつた。之れ即ち彼が支那に於けるドイツ人軍事顧問の引揚命令を出すを差控へて居つた所以であります。然るに本年二月完全に獨逸陸軍をその掌中に掌握し、自ら獨逸陸海軍の大元帥たるや否や直ちにその親日政策を實現すべく、獨逸將校の支那引揚げを命令したのであります。又支那に於ける獨逸の經濟的利害は非常に多かつたのであります。一昨年各國の對支貿易額を見ましても、獨逸は日本の上に位して居ります。曩に申しました通り、日本と云ふ國は支那に取つて最も近い國である。夫れに對して獨逸の方は支那に取りましては恐らく最も遠い國である。其の最も遠い獨逸が漸次支那に對し其の貿易を旺んに致しまして、遂に一昨年頃は英吉利に次いで對支最大貿易國たるに至つて居るのであります。それ程に獨逸は支那に對して、極めて重大なる經濟的利害關係を以て居る國であります。さればこそ支那に於ける獨逸の實業家、從つて又其の意見に左右されるところの獨逸の財閥及び獨逸舊來の外務省は、親日と云ふより寧ろ親支であつたのです。然るにヒットラーは本年に至つて政權を強化すると共に、所謂ナチス的の外交政策を以て、在來の獨逸外務省の思想を征服し、爰に始めてそのヒットラー其の人の外交政策を實行する段取となり、從來兎角支那支持の外交方針を取つて來た獨逸大使トラウトマン氏を去る六月召還するに至つたのであります。之等のことによつても明らかであります様に、獨逸は今迄の各種各様の廣汎な外交的、軍事的經濟的利害を超越し、之れを犠牲にして日本支持の外交方針を樹立するに至つて居ります。

而してその根本動機は全くヒットラー其の人の信念とするところが、我皇御國の國体を理想とするからであります。同じ事が伊太利に致しましても云へるのであります。大体伊太利の外交政策は、大英帝國の政策とは到底相容れ難い關係にあるのであります。詳しく申しますればムツソリーニの理想とするところは、古へのローマ帝國の再現にある

のであります。即ち今の伊太利を古のローマの偉大に復さうと云ふのであります。従つて地中海は伊太利の湖でなければならぬ。地中海の東西南北に跨る地中海を挾む大帝國でなければならぬと云ふのであります。而して此の政策は大英帝國の印度及び東亞に出る道として地中海を確保しやうとする根本政策と相容れない。然るに虚心坦懷亞細亞に於ける日本對大英帝國の關係を見ますと、地中海を挿むイタリア對英吉利の關係と極めて似たるものがあります。支那と云ふものを挿んでの英吉利對日本と云ふものは兩立しない關係にあるのであります。此の點に於きまして伊太利は日本の最も善き盟友を持つものであります。併し只是れのみでありましたならば、伊太利としては實際今日の様に日本と心から手をつなぐ迄には至らなかつたと思ひます。伊太利をして心置きなく日本と提携せしめつゝあるところのものは、その政体が日本の國体に近いものがあるからであります。今日の伊太利は、ファスチスムス國家であります。ファスチスムスと云ふことは結束團結主義と云ふのでありますが、一致團結主義と云ふ思想に於きまして、天皇を中心を仰ぐ日本の『すめらみくに』即ち全一國家と相似たる或るものを持つてゐるからであります。斯くの如きは支那事變が實に其の本質に於きまして思想戰なるが故に、支那事變を繞る世界列強の動向も、又自ら思想的に決定されつゝあるのであります。私共は此の事實を少しでも暫くの間でも忘れてはならぬのであります。

以上の如くでありますから、日本の外交政策と致しましては、大体思想を同じくして居ります。今日の獨逸及び伊太利兩國に固き盟友を求め、此の日獨伊の同盟關係を今後益々固くして行くと云ふことが急務中の急務と私共は信じて居ります。併し此の日獨伊の防共協定を確固たる攻守同盟に迄強化し、しかも成るべく敵を尠くすると云ふ方策を探ることは、作戰の必要上己むを得ざる所でありませう。即ち或る時期の間は成るべく亞米加と事を構へない、若しくは

フランスの如きは之れを無視する、若しくは或範圍内に於きましては英吉利とさえも妥協すると云ふが如きことは、時と場合によりまして必らずしも排撃すべきものではないのでありますけれども、結局に於て、マルクス主義を奉ずるソビエトロシヤを此の地球より抹殺することは、どうでも貫徹しなければならぬと云ふことだけは知つて置く必要があると思ひます。

斯くの如く今日の支那事變及び將來の國際間の葛藤が、其の來るところ多く思想の相違であります以上、吾々としては自ら顧みて疚しきところがあつてはならん譯であります。先程私は北支方面に日本思想戦に従事する者として罷り出て居つたのでありますが、度々支那の學者等と話をする機會を持つたのであります。私は手強く三民主義延いては共產主義の誤謬を指摘し、この悪思想がこの不幸なる事變を生むに至つたことを語るを常としてゐましたが、其の都度私の得ました返事は、あなたのお仰言るところのことは一應尤もである、けれどもあなた方日本人々としても考へて貰ひたい。一体誰が支那の智識階級曳いては多くの民衆を狩り立て、共產主義に染まらしめたのであるか。その責任は第一に日本の雜誌の論文や日本の大學教授の著書にある。支那に於て共產主義排撃の戦端を開かれるも好いが、寧ろ先づ日本内地に於て共產主義撲滅の運動を起さるべきでないか。此の言葉は實は決して急激な言葉ではないのであります。支那の人と致しましては、卒直に事實を指摘したるに過ぎないのであります。と申しますのは、共產主義關係の文献は多く、獨逸語やロシヤ語にて書かれて居りますが、支那に於ける現代教育はアングロサクソン風の英語教育に依つて居りますが故に、直接に獨逸語やロシヤ語を読む學者は支那には多くないのであります。この缺陷を補ふところのものが、實に日本の各種各様の雜誌殊に所謂流行雜誌であります。毎號々々共產主義的思想を以

て市場に洪水の如く氾濫しました俗流雜誌であり、又日本に於きましても所謂盛名を謳はれました多くの大學の先生方の共產主義阿附の著書であります。支那の人にとりまして、日本の文章を読むと云ふことは、元々文字が同じいから比較的容易である。之れ等日本の雜誌及著書を通して共產主義的思想が支那に擴がつて行つたのであります。即ち支那に於ける赤化の一勢力は實に日本の學問思想であつたのである。然も今日本は實に此の三民主義的共產主義的思想の所以より、此のつびきならぬ大戦争の渦中に巻き込まるゝに至つたのであります。而して此の戦争をして有終の美を爲さしむる爲には、其の思想戦なるが故に徹底的に日本皇道思想に基いて策戦計畫を樹ると共に、其の建設方面に於きましても、徹底的に皇道思想を以て終始しなければなりません。然も其の爲には、日本國民其の者が從來の思想的迷夢より醒め來り純真な日本の大信念に立ち還らざる限り、私は日本の將來は頗る暗澹たるものがあると思ふのであります。斯くして最後の國体眞姿の顯現と云ふことに付きまして所見の一端を申述べると同時に、皆様御研究乃至は御反省に資したいと思ふのであります。民主政治と申しますところのものは、自由主義的世界觀の政治的表現であります。然らば個人自由主義と云ふ世界觀は、何時の頃から如何なる經路を辿り如何なる文化を生み出しつゝ今日に立ち到つたのであるか、之れに對して一瞥を投げる必要があると思ひます。西洋とても常に自由主義的世界觀をもつて居つた次第ではないのであります。

私の看るところを以て致しますれば、西洋が自由主義的世界觀に這入つて參りましたのは、今より約四百年前、所謂伊太利のルネッサンスを以て其の嚆矢と致します。伊太利のルネッサンス時代に至ります迄は、西洋の世界觀は神を中心とする絶對的世界觀でありました。然るに伊太利に始めてルネッサンスの思潮が起りますと同時に、漸次神を

中心とする物の見方が自然を中心とする物の見方に變つて來るのであります。此の邊の消息を最もよく現はして居る一つの逸話は、ルネッサンスの持つ最も偉大な文豪ベトラルカの青年時代の話であります。若きベトラルカ、一日北伊太利のモン・ヴェントウの嶺を攀じ、ふと眼を開いて北の方を眺めますと、大アルプスの連峰が雪を被り氷を戴いて聳え、之れに夕日の光りが反映して紫色に匂つて居る、此の雄大なるアルプス連峰の壯觀に見惚れたベトラルカは自ら莊嚴の念に打たれて跪いて此の自然の壯觀を拜したと云ふのであります。然るに此の莊嚴なる自然の大觀の前に恍惚として我を忘れて跪く間もなく、ふと心に思ふやう、考へて見れば此のアルプスの大自然と雖も、元々神の造り給ひしものである。然るに人間のその崇敬の誠を致すべきところのものは只一人絶對の神あるのみ。然るに今自分は造られたる物の前に跪き恰も神の如く之れに崇敬を捧げた、之れは神に對する反逆であると思ふと矢も楯もたまたず急ぎ山を降つて懺悔僧の所に走り、心情を披瀝告白して其の罪を悔いたと云ふことであります。此のベトラルカの逸話に於て私共は西洋中世の絶對なる神への奉仕と云ふことから此の自然に興味を持ち、自然を見つめて行くと云ふ物の見方に移つて行く様を見ることが出来るのであります。確かに伊太利のルネッサンス此の方、近世史に於ける興味關心の中心は、神に存せず寧ろ自然にあつたと云ふことが出来ます。従つて自然の研究と云ふことに漸次没頭し始めるのであります。學問は神學から近世自然科學に變つて來るのであります。然るに自然を研究すると云ふことは自然に没頭することである、即ち自然を研究すると云ふことは、總て人倫との關係から離れ、只管に自然と云ふものに心を打ち込んで参ります。斯くして自ら神の事や人間の本質、人間の機構従つて人倫と云ふが如き題目は、自ら人間の考へよりその影を潜めて参りまして、漸次研究者の理性精神とか自然とか兩者の交渉とか云ふことが、最も大いなる

題目となつて來るのであります。斯くの如き關係からして、遂に近世西洋哲學の父と呼ばれるやうになりました。有名なデカルト哲學の根本原理が生れたのであります。是れは既にお聞き及びのことと思ひますが、デカルトの根本原理は「自分は考へる、夫れ故に自分は在る」と云ふ命題であります。自分が在ると云ふことを自分で考へると云ふことに依つて証明する此の説は、吾々から考へますと途方も無い思想であります。私共を以て見ますと、自分が在ると云ふ證據は、他に之れを求むべきもので無い。自分が在ること位確かなことは無い。其の自分は孤立して居る自分では無いのであつて、親から生れたものである。兄弟を持つて居る私である、子供の父としての私である、妻の夫としての私である、天皇陛下の民としての私である。と云ふのは、即ち我と云ふものをきつかけとして我等がある、皇御民吾等がある、即ち皇御國があると云ふことが、吾々日本人としては根本的の事實なのであります。又私が考へるのは無論言葉で考へるのであります。其の言葉と云ふものは、申す迄もなく私たつた一人孤立の存在として要あるものではありません。言葉は互に魂の連絡のための言葉であります。言葉は多く人を豫想して居ます。その多くの人は皇御民であります。この皇御民我等の造る皇御國を豫想する皇御民の言葉があつて始めて、この私なるものは出來て居るのです。夫れを近世哲學の父とも呼ばれるデカルトは、自分の存在迄も疑つて自分は有るだらうか無いだらうかと、自分のあること迄疑ひ出します。ところが疑つて居る間に、疑ふことそのこと迄も疑つてゐたのでは疑ふことが意味をなさなくなる。疑ふことそのことは疑はれぬ事實である。然るに疑ふと云ふことは考へると云ふことである。そこで自分は事實考へて居る、考へて居るならば自分が在つてこそ始めて考へることが出来るのであるから、矢張り自分はちやんと在るんだと云ふて、始めて一度疑つた自分の存在を確信するやうになるのです。而し斯う云ふものゝ考へ方は

余程人倫の道を外れた魂にして始めて出来ることでもあります。然るに近世思想の父と曰はれる人が、人倫の道を外れて考へたと云ふことは、其の考へるところのものが、人と云ふ者を眼中に置かず、主として自然を研究考察の對象となしたからであります。而も私共は同時に近世西洋の自然中心の物の考へやうの成し遂げた偉大な功績に對して盲目であつてはならないのです。と申しますのは、斯くの如く人寰を忘れ、自然に心に向けた其の考から、近世の實に深い組織立つた自然科学が生れて來、然し此の自然科学の上に始めて近世の機械技術が生れるのであります。蓋し自然の本質を知り、其の本質を動かしつゝあるところの力を知り、更に其の力の働き具合所謂自然の法則と云ふものを知る者は、聽て依つて以て此の自然を支配する道具機械を發明することが出来るのであります。

即ち近世西洋の自然科学の上に近世西洋の機械技術が生れて來る。而して此の近世機械技術に依りまして近世の驚くべき産業と云ふものが生れて來るのであります。昔手を以てする紡績機械では極く僅かな物しか紡ぐことは出来な。之れに對して普通の手車を以てするよりか機械を以て致しますと、何万倍の糸を紡ぐことが出来る。それが始めて近世の資本主義と言ふものゝ出現を見る所以です。然るに近世の資本主義出現の根本動機は、前述の如く、主として自然に注意を集中し、自ら倫理を無視した個人的思想であります。従つて自分の享樂、自分の權利と云ふことが最高のものとして、驚くべき富を造つて行くのです。

従つて其の巨富を自ら横領し、之れを占有して茲に近世資本主義と云ふものが基礎を置くのであります。又總ての人々が各々自分の考へを持ち、各々その私を以て寄り合ひ、一緒に事を行つて行かねばならぬ際に事を決する者は何であるかと云ひますと、それは正しき考へ眞なる考へ善き考へでなくつて、多人数の要求がそれをきめる所謂多數決

原理です。多數で事を決めるとなると、自然、民主主義と云ふことになつて來るんである。何れも個々の人々が自らを以て主であるとなす思想に基いて居る。資本主義も共產主義も元々自由主義でありまして、その違ふところは量にあつて質には無い。資本主義的自由主義では、自由を享樂する者少數資本家に限られる。成るべく多くの人をして自由を享樂せしめる方法として、元來マルクス共產主義は考案されてゐるのであります。之れ即ち私が、共產主義を以て自由主義の普及版と申す所以であります。然るに先程申しました通り、先づ人間の本質が眞に自由、即ち、自らに由る者でありますならば、それは自由主義で、正しいのです。ところが人間の存在は自由でなくて他由なのです。即ち親に由つて始めて生れることが出來、親に由つて始めて育てられ來つたのです。又先生に由つて私共は正邪善惡是非曲直を會得しつゝあります。又吾々日本人は、天皇に由つて始めて日本人としての眞骨頂を休得し、以て日本人として人間としての最高の尊貴を獲得するを得つゝあるのであります。斯く見て參りますと、私共の存在の十中七八迄は他に由つて居るのであります。如何に私共が他に由つて始めてあるかと云ふことは、私共が人の人たる面目を特に高調するに際しまして、特に『人間』と云ふ言葉を使ふことに依つてゞも明かであると思ふのであります。何故に人の人たる面目を高調する時に『人間』と云ふのかと云ふと、それは人の人たる面目が寧ろ人と人との間にありますからであります。と云ふのは、私共の存在は人と人との間に依つて構成されて居ると云ふても過言では無いのであります。即ち私共は親に由つて始めてある。而して親は無論子を持つことによつて始めて親であります。親たり子たることは、親と子との間の上に由りて始めてある。兄弟の關係も又然り。夫婦の關係も又然り。朋友同志も又然り。無論君臣の關係も又然りであります。即ち私共は親子、兄弟、夫婦、朋友、國民同胞、及び君臣と云ふ之れ等の間に



由つて始めて出来上つて居ると云つても差支へない。而して之れ等の間は何れも緊張充實せるものでなければなりません。此等の間が充實緊張してゐれば人間は體て健全なのです。私は論じ論じて最後に我が皇國國體の本質を論ずるの機會に到達致しました次第でございます。我が皇國の國體は之れを教育勅語のお言葉に照して見ますと、一應二つの要素から成り立つて居ると云ふことが出来ると思ひます。

即ち教育勅語に『朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ之レ我國體ノ精華ニシテ』と仰せになつて居ります。此の御言葉に依つてこれを見ますと、我が國體の精華は、先づ第一に國を肇むること宏遠に德を樹つること深厚にあらせられる皇祖皇宗即ち歴代の 天皇を根本要素として持つて居ると云ふことは申す迄も無いのでございます。夫れならば萬世一系の皇室を戴き奉つてさえ居れば、夫れで我が國體の精華は全たしと云ふことが出来るかと云ひますと、尠くとも教育勅語は斷じて然らずと仰せられて居るのであります。即ち如何に私共にして萬世一系の皇室を奉戴し奉つて居りましても若し國民の側に於きまして、政黨政治華かなりし當時の如く、我が臣民克く不忠に克く不孝に億兆心を二三にし、克くその惡をなす、と云ふのでありましては、國體の精華は斷じて擧り得ないのであります。即ち國體の精華を發揚する爲には、國民の側に於きまして、一定の生活態度に出なければなりません。萬世一系の皇室を奉戴して居りさえすれば、夫れで澤山である。夫れから先は國民がどう云ふ様に生きて行かうと、夫れは問ふところではないと云ふ思想の如きは我が國體の本義を減却せる言ひ分と言はねばなりません。『克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシ』と云ふことを日本臣民が實際行ふことに依つて、始めて國體の精華を發揮することが出来るのであります。而して此の國民の一定

の生活態度の眼目は實に億兆心を一にしと云ふところにあると思ひます。然かも眞劍に億兆心を一にすると云ふ此の理想を考へます時に、之れは決して容易のことではないのであります。一身一家若くは一つの學校、一つの社會、一つの會社、一つの工場に於ける一心すらも決して容易のことではないのであります。然かも此處では億兆一心と云ふことを要求されて居るのであります。然かも深く考へます時に、若し私共にして唯だ一つの條件を滿すことが出来たらば、至難のことと思はれるこの億兆一心の生活を顯現することが出来るのです。然らばその一つの要件とは如何なる要件であるか。それは日本國民で以て公の生活の中心と仰ぐところが唯一無二であり、更に進んで吾々各自の至高の念願たるところが、各自に共通し、而かも銘々の至高の念願が體て公の生活の絶対無二の中心と仰ぐところと同一であるその時に、私共日本國民は期せずして、億兆心を一にすることが出来るのです。斯くして要は、果して日本國民の中にかくの如き公私二つながらの生活を貫く絶対唯一無二の中心があると否やと云ふことに懸つて來るのであります。然るに何の幸ぞ、吾々日本國民にあつてのみ、斯くの如き公私二つながらの生活を貫く唯一無二の中心が與へられて居るのです。それは即ち永へに搖ぎなき動きなき 天皇にましますのであります。而して此の永遠に變りなき動きなき 天皇に歸依し奉る、まつろひ奉ると云ふことを、日本では忠と言つて居ります。これ即ち臣民克く忠にと云ふ御言葉の趣旨であります。大君としては 天皇に眞心もちて仕へ奉ると云ふことを忠と言つて居ります。然るに日本の國家に於きましては國は體て家である。日本の國家は即ち家の擴大強化發展せるものであります。さればこそ日本に於てのみ國家と云ふ一つのことを、實に國、家と云ふ此の二つの字を以て現はして居るのであります。無論、國と云ふ字と家と云ふ字は支那傳來の支那の文字であります。けれども日本に於きましては、此の文字を使ふに當り、當

初から此の二つの文字を繋ぎ合して一つのことを意味して使つて居るのであります。支那に於きましては、之れに反して國と家とは全然二つの別なものを指してゐるのであります。支那で天下國家と申しますと、天下と云ふものが一つ、國と云ふものが一つ、家と云ふものが一つと、此の三つを意味して居ります。最近に於きましては、支那の政治法律行政法等が日本の直譯に懸りますところから、此の日本の言葉を支那に輸入致しまして、今日の支那に於きましては私共と同様に國家と云ふ二字を以て一つのことを言ひ現はすやうになりました。之れは三四十年以來のことでありまして、夫れ以前は二つのものを現はして居ります。然るに支那から此の二つの文字を借りて來た日本では、始めから國家と云ふ二つの文字を以て一つのことを現はして居ります。私の記憶にして誤りなくんば、始めて日本の文献に現はれるのは、日本書記の景行天皇五十一年紀のところと思ひます。即ち國と家との二つの字を繋いで何んと讀んで居つたか、日本書記を調べて見ますと『ミカド』と讀んで居ります。日本に於きましては元來、國家とは『ミカド』のこと、皇室のことであります。即ち日本の國家と云ふものは、皇室の發展擴大して強大な組織をとれるものに他ならぬのであります。然るに斯くの如き國家は世界國多しと雖も他に類例を見ないところでありました。古のギリシヤ、ローマでは國家のことを夫々ポリス、キピタスと呼びました。その意は何れも町と云ふことでありました。ギリシヤ、ローマの國家は元々町から發達せるものであつたからであります。近世の歐米では國家は何と云ふ字を以て表して居るかと思はすと、ステート若くはスタートと云ふ字を以て表して居ります。之れはどう云ふ意味の言葉であるかと申しますと、現行約法と云ふ意味であります。若くは現に行はれて居る契約と云ふ意味であります。何故に近世の歐米に於て國家のことを契約と云ふかと申しますと、近世歐米の國家はその起原に於きまして、各種各様の利害、團體

の利益、階級の利害に關する協定に基いて成立したものであるからであります。之れに對し我が國に於きましては、歐米の人々が或はステートと言ひ或は町と云ふところのものを國家と云ふのです。茲に即ち日本國家の本質が言葉の上に表はれて居ります。日本國家の本質は實に家であります。それも皇室であります。さればこそ大君は同時に、大御親にましまし、大君に忠なるは又大御親に孝な所以であります。之れ即ち我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニとお仰せられた所以であります。此の克く忠に克く孝にと云ふ時の孝は、私共自分の親に對する孝を意味するのでなくして、大御親としての天皇に對する大孝を意味するのであります。さればこそ直ぐに其の後に『億兆心ヲ一ニシテ』と仰せられたのであります。大君は聽て又大御親にましますが故に、忠は即ち孝であり、忠孝一本、私共の仰ぎ望み仕へ奉るところ唯一無二なるが故に、爰に億兆心を一にすることが出来るのであります。而して億兆一心の協心協力あるところに自ら世々その美を濟さざるを得ませず、世々厥の美をなすは億兆一心、必然の結果であります。而して是れ即ち我が國體の精華であります。かくて國體の精華を構成する要素は一應二つの要素であります。即ち永遠の天皇と忠孝なる臣民であります。併しその忠孝の臣民たり得る所以のものは、萬古を貫いて唯一絕對無二の中心ましませばこそであります。斯くして窮極するところ、國體の原理は唯だ一つ、即ち絕對の天皇ましますのみであります。更に一步を進めて之れを見ますに、教育勅語は臣民の務めをお訓へ遊ばされ、『爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ』と云ふ御教より『天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ』と仰せになつて居ります。今日は時間の關係上、其の一つ一つに付て申す機會を持たないのでありますが、私の拜讀し奉るところを以て致しますれば、『爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ』と云ふことから、『一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ』に至ります迄、其の一つ一つの務めが悉く窮極の目的た

る、『以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ』と云の大使命にかゝつてゐるのであります。之れが即ち我等日本人の父母に孝であり、兄弟に友であり、又夫婦相和する所以が、他の國人とは其の趣きを異にする所であります。

日本以外の國々にありましては、父母に盡す孝は父母に盡す孝を以て定結して居る、夫婦の和合は夫婦の和合を以てその全きを得て居る、然も日本に於ては父母に孝なるも兄弟に友なるも夫婦相和するも常に天壤無窮の皇運扶翼のためであります。即ち日本臣民にありましては、その道德的義務は天壤無窮の皇運扶翼と云ふ永遠の意義を以て來て居ります。

即ち私共日本臣民にありては、博愛衆に及ぼすと云ふことも、徳器を成就すると云ふことも、若くは進んで世務を啓くと云ふ事も、又常に國憲を重んじ國法に違ふと云ふことも、一旦緩急あれば義勇公に奉ずると云ふことも、これは決して其れ限りのことでは無いのでありまして、天壤無窮の永遠の意義を以て居ります。それだけに重々しい嚴々しい意義が一一の日常朝夕の努めに内在してゐるのであります。茲に日本人としての生活のもつ驚くべく限りなく深い世界があるのであります。

而して私共が克く斯くの如くなる所以のものは、天壤無窮の皇運を継ぎ給ふ 天皇が、嘗に 大君にましますのみならず、最も具体的に最も現實的に、現御神にましますからであります。換言致しますならば、日本臣民は、天皇陛下に大君と大御親と而して現御神を一つに戴き奉り、その御爲めに働き戦ふ者であります。茲に日本人として汲めども盡きせぬ驚くべき生命の泉の深さがあるのであります。此の日本民族の生命の泉の餘りに深きが爲に、私共凡庸の常として之れを忘れて、或は道德或は哲學或は宗教等と、あらゆる異端邪説に迷ふこと多きものでございませ

す。而も伊勢の神宮、出雲の大社に、この深遠なる信仰の對象にまします神々の尊嚴其の儘に鎮りまします限り、常に此の皇御國の深き神秘的なる世界觀に對する私共の覺醒を促し給ふを思ひまして、感激惜く能はざるものがあるのであります。皆様には或は直接に或は間接に大社にお仕への方々と承つて居ります。皆様の責務は實に重大であります。今日は我が國の高等教育なるものは多く近世歐米の糟粕を嘗め來りまして、或は民主主義或はマルクス主義と云ふが如き、鬼畜の思想に久しき間、迷はされて居たのであります。赤手空拳、孤軍奮闘、猶且つ私共は此の思想戦に處して皇御國の國体を護つて行かなければなりません。而して此の思想の勝利、即ち國体眞姿の顯現に由りまして、始めて我が日本國民は今事變の徹底的解決に向つて勇往邁進することが出来るのであります。其の時始めて亞細亞大陸の上に 明治天皇此の方の御理想たる東洋永遠の平和は確立さるのであります。皆様の御後援をお願いして此の不束な講演を終ることに致します。

# 支那今後の經濟開發問題

— 北支開發、中支振興兩會社を中心として —

外務省情報部第三課長

岸

偉一氏述